

令和元年度

# 研修集録

46



秋田県立秋田南高等学校  
秋田県立秋田南高等学校中等部

## 成果をつないでいくために

校長 眞壁聰子

昨年2月、「秋田の教育資産を活用した海外交流促進事業」の一環として、タイ王国の小中学校や大学、連携機関を訪問する機会がありました。この事業は、本県の強みである「豊かな教育資産」を海外に積極的に発信し、交流人口の拡大につなげることを目的に平成27年度から行われています。

吹雪の秋田を出発して、到着したのは気温30度を超える首都バンコク。バンコク市街は急速な自家用車の普及で常に交通渋滞が発生しています。始めに訪れた小学校は町の中心部にあり、子どもたちは落ち着いて礼儀正しく、合掌して迎えてくれました。気温35度を超える校舎4階の教室には45人の小学校3年生。時々声を合わせて教科書を読んだりはしてるものの、授業の大半は先生が説明に終始する、いわゆる一斉型の授業でした。これがタイの典型的な授業風景だと説明を受けました。

この事業で具体的に取り組んでいることは、タイ王国ノンタブリー県の小中学校に「秋田の探究型授業」(Akita Actionという名称で呼ばれており、以下AAと示す)を紹介し、教育専門監を派遣するなどして現地の先生方に授業づくりの支援をしたり、一緒に授業を行ったりすることです。また、より多くの教育関係者にAAの理論やその実際を知ってもらうために、米田進教育長が現地に赴いて講演を行うなどもしてきました。昨年は、この事業の連携機関である地元の大学を会場に、それまで研究を推進してきた2校(小中各1校)の国語、理科、数学の研究授業を行い、参観者が付箋紙を用いた授業研修を体験したり、意見交換を行ったりするフォーラムが開催されました。AAの研究と実践を重ねてきた両校では、児童生徒の変容が明らかであり、先生方がその効果を実感して自主的に取り組み始めています。他校の先生方には、課題を自分たちで設定したり、友だちと考えを生き生きと交流し合う子どもたちの姿が新鮮に映ったようでした。タイの先生方自身が実感した成果を、次につなげるためにも、探究型授業の実践と授業研修が定着することが期待されます。

さて、本校では、スーパーグローバルハイスクールの指定が今年度で終了となります。秋田県の基幹産業である農業や食を中心テーマとしながら、郷土と世界の両方の視点から課題に挑戦したことやその研究成果が、広く国内で、更に海外でも認められました。当該のグループだけではなく、全ての本校生徒、職員にとって大きな喜びであり、励みになってきました。高校1年生については、国際探究Ⅰの時間を中心にして、段階を踏んだ指導がなされており、次第に意欲がわき出てくる様子が面白いようでした。高校2年生は、国際探究Ⅱにおいて、議論する様子に成長を感じました。相手の考えを論破するのではなく、様々な考えを拾い上げたり捨てたりしながらより良いものを見出そうとする姿勢や力が伸びていることを感じました。また、高校3年生については、市役所で行ったグローカルミーティングでの自信にあふれた、また同時に真摯な態度に感銘を受けました。専門的な意見に耳を傾けるだけではなく、新たな疑問を投げかけるなど、コミュニケーション能力の高さを垣間見ました。高校生だけではありません。中等部3年生が公開成果発表会で見せた、高2生を見るまなざしは、憧れと決意を感じさせるものでしたし、クリエイティブサイエンスの研究内容や発表スキルはそのレベルの高さに感心しました。そして、本校職員が指導のノウハウについて研修に励み、身に付け、共有してきたことも大きな成果だと言うことができます。

本校は、上記のような生徒の姿、すなわちグローバルリーダーに必要な資質の育成を目指してきましたし、これからも目指していくとしています。生徒の姿として表れた成果を継承していくためにも、本校職員のもつ指導のノウハウを本校の財産として次につなげていく必要を強く感じています。

## 目 次

巻頭言 「成果をつないでいくために」	校長 貞壁 聰子	1
<b>I. 授業研修</b>		
令和元年度教育委員会指導主事等の学校訪問		
数 学 科 (高)	茂木 大介	4
理 科 (高)	佐藤 啓介	9
芸 術 科 (高)	深井 裕之	14
令和元年度英語科フォローアップ研修		
外 国 語 科 (高)	佐藤亜希子 伊藤 孝紘 高橋 和也 Bryce Fowler	20
令和元年度秋田県教育庁中央教育事務所学校訪問		
数 学 科	大友 和也	30
音 楽 科	小林 明人	36
総合的な学習の時間	大渕 牧人 工藤 道人 小澤 寿子 金 敬子	41
その他の授業研修		
国 語 科 (高)	樽田 雪子	47
地 理 歴 史 科 (高)	佐藤 寿志	52
保 健 体 育 科 (高)	佐藤 雄大 金森 康臣	56
今年度のクリエイティブサイエンスを振り返って	工藤 道人	60
大学入学共通テストに向けて		63
<b>II. 校内研修</b>		105
<b>III. 研修講座等受講報告</b>		
生徒指導推進研修	中山つづか	110
高等学校保健体育科授業の充実研修	金森 康臣	111
これからの中運動部活動の在り方研修	伊藤 栄治	112
<b>IV. 校外研修</b>		
第39回東北地区学校図書館研究大会実践発表報告	杉山美美子 三浦 弓子	114
<b>V. 平成27~31年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール (SGH) 事業</b>		
SGH事業の概要について	關 友明	127
本年度の高1「国際探究Ⅰ」について	木村 太郎	131
本年度の高2「国際探究Ⅱ」について	戸坂 圭子	132
本年度の高3「グローバル・イシュー」について	林 克至	133
令和元年度 国際探究Ⅰ 成果発表交流会	木村 太郎	134
令和元年度 国際探究Ⅱ 公開成果発表会	戸坂 圭子	137
本年度SGH事業の成果と課題	關 友明	141
SGH事業5年間を振り返って	關 友明	146
編集後記		147

# I. 授業研修

# 高等学校数学科 数学A 学習指導案

学級 1年A組32名  
場所 1年A組教室  
授業者 茂木 大介

## 1 単元名 第2章 図形の性質 第1節 平面図形 3 チェバの定理・メネラウスの定理

### 2 単元の目標

- (1) 図形の見方を豊かにするとともに数学的な見方や考え方を身に付けその有用性を認識する。  
【数学的な見方や考え方】
- (2) 三角形や円などの基本的な図形の性質について、関心をもち理解を深める。  
【関心・意欲・態度】 【知識・理解】
- (3) 図形の性質を論理的に考察し、処理できるようにする。  
【数学的な技能】

### 3 取り上げる教材

教 材：「高等学校 数学A」（数研出版） 「フォーカスゴールド数学 I+A」（啓林館）

### 4 本単元で育成しようとする「思考力・判断力・表現力」

チェバの定理・メネラウスの定理を用いて辺の比や面積比が求められるだけでなく、正確にかつ素早く求めるために計算方法を工夫できる力

### 5 評価規準

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	数学的な技能	知識・理解
チェバの定理・メネラウスの定理を用いた計量に関心をもつとともに、それらの有用性を認識し、事象の考察に活用しようとしている。	定理をそのまま利用するのではなく、より簡便な形に変形して表現したり、思考の過程の正当性や広汎性を振り返ったり探ったりすることを通して、辺の比を用いて計量を行うための数学的な見方や考え方を身に付けることができる。	辺の比を用いて表現・処理する仕方や推論の方法などの技能を身に付けている。	辺の比の表示方法を工夫することで、他の辺の比や面積比を簡単に求めることができることを理解し、知識を身に付けている。

### 6 生徒と単元

#### (1) 《生徒の実態》 男子17名 女子15名 計32名

数学Aについては概ね意欲的に取り組んでいる。また、SGHの探究活動を通して自らの考えや疑問点を積極的に述べる態度や、他者の意見を取り入れながら工夫・改善に取り組む主体性が育ってきている。とはいっても、一斉指導の中で、分かったことや、不明な点を発言できる生徒は多くないので、演習場面ではペアワークやグループ活動を積極的に取り入れ、学び合いを意識した授業を行っている。

今回の授業では、基礎的な事項の定着を確実に行うことには加え、式変形や計算方法を工夫して生徒に解ける喜びや達成感を与え、数学を楽しむ気持ちや解くことへの自信につなげていきたいと考えている。

#### (2) 《本単元について》

平面図形は、図形の中でも最も身近な素材である三角形や円などの基本的な性質を扱うことから生徒の興味・関心も高いと思われる。その反面、アプローチ方法が浮かぶ・浮かばないことや

手続きの定着不足から反射的に動けない生徒も多い。さらに、比や分数が多くの場面で登場するため、図を描かずに処理しようとするとミスにつながりやすい。

(3) 《(1) (2)を受けた、本単元の指導について》

今回は三角形の辺の比の表示方法に工夫を加えることで素早く・直感的にかつ正確に辺の比と面積比を求めさせたいと考えている。これは教科書や参考書で勧められる解法とは異なるが、公式のように用いることで図形に苦手意識をもつ生徒だけでなく、上位層の生徒にも処理速度の向上の点で効果があると考える。

**7 全体計画 (チェバの定理 メネラウスの定理 総時数2時間)**

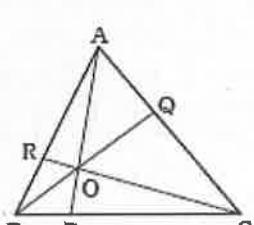
	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準(評価の方法)
1 (1 時 限)	・チェバの定理、メネラウスの定理を、三角形に現れる線分比や図形の面積比を求める問題に活用できる。	・チェバの定理とメネラウスの定理を応用して線分の長さの比や面積比を求める。	・最初のうちはどのように考えてよいのか戸惑う生徒も多いと思うので、着眼点を含めて助言する。	・・・ 【関心・意欲・態度】 (活動の観察) (ワークシート観察)
2 (2 時 限) 本時	・辺の比の表示方法を工夫することで、瞬間に線分の辺の比や面積比を求めることができる。	・・・ ・辺の比を工夫して表示し、問題を素早く正確に処理する。	・既習事項の確認について正誤のみならず時間についても意識させる。 ・辺の比に工夫を加える際、有用性を感じる前に集中力が途切れないう端的に行う。	・三角形に現れる線分比や図形の面積比を本時の内容を活用して素早く正確に求めることができる。  【数学的な技能】 (ワークシート観察)

**8 本時の計画 (本時 2 / 2時間)**

(1) 本時の目標

- ・辺の比の表示方法を工夫することで、瞬間に線分の辺の比や面積比を求めることができる。  
【数学的な技能】

## (2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入 (2分)	<p>1 本時の目標を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">           辺の比の表示を工夫することで瞬時に問題を処理する力を身に付けよう！         </div>	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ チェバの定理・メネラウスの定理を用いて求めるべき線分の比や面積比を瞬間に求められるようになる授業だと伝える。</li> </ul>	
展開 (38分)	<p>2 前時の復習として、問題①に取り組む。</p> <p>3 ペアワークで答え合わせを行う。</p> <p>4 チェバの定理の考察。 辺の比の表示の工夫を提案し、簡単に表示できることを実感させる(イ)。</p> <p>5 メネラウスの定理を用いて辺の比を求め、さらに三角形の面積比を求めさせる(ロ)。</p> <p>6 結論をまとめさせる(ハ)。  <math>BP : PC = n : m</math>  <math>PO : OA = 1 : (n+m)</math>  <math>\triangle OAB : \triangle OBC : \triangle OCA = n : 1 : m</math> </p> 	<p>個人</p> <p>ペア</p> <p>全体</p> <p>グループ</p> <p>グループ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 問題にかかった時間を記入させる。</li> <li>・ 実際にチェバの定理において実践し、生徒に有用性を感じさせる。</li> <li>・ 学び合いが進むように自分のアプローチ方法との相違点に留意して相手の話を聞くことを助言する。</li> <li>・ 簡潔な数値で表現できるように助言する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 辺の比を工夫することで、<math>BP : PC = n : m</math> を簡単に求められることがわかった。さらにこの考え方の良さを見つけるために、<math>PO : OA</math>、三角形の面積比を指示に従って求めてみよう。</li> <li>・ この授業の提案、  <math>AR : RB = j : 1</math>,  <math>AQ : QC = m : 1</math> とすることで、各比はどのように表せるか。また、実際の計算に応用するために、まず何をすれば良いか。</li> <li>・ 三角形に現れる線分比や図形の面積比を本時の内容を活用して素早く正確に求めることができる。  <b>【数学的な技能】</b>            (ワークシート観察)         </li> </ul>
まとめ (10分)	<p>7 結論の共有を行う。</p> <p>8 問題演習②・振り返り</p>	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 結論を共有し、実際に問題に当たる準備をさせる。</li> </ul>	

## 9 協議の視点

- (1) 他者との関わり合いを通して、協働的に問題を解決することができたか。
- (2) 生徒自身が本授業における解法の有用性を感じることができたか。

## 10 教科協議会記録

期日：令和元年10月18日（金）

指導助言者：高校教育課指導班 伊藤 淳 指導主事

### （1）授業者から

最初はグループ毎の発表という形式も考えたが、今回は数学的な考察、数学的な工夫のよさ、数学を用いた結果の驚きなどを感じさせることをねらい、発表の場面は作らなかった。

題材は、東北大学の問題をヒントとして構成した。今日の授業で作り出した方法は有効であると感じている。

生徒は、日頃からグループ活動を取り入れていることもあり、互いに教え合いながらよく活動してくれた。想定していなかった生徒の発言もあったが、今回は誘導を強めて行った。

先生方の厳しいご意見をお願いします。

### （2）各班の発表

#### （1班）

- ・グループワークが定着している様子が見られた。
- ・生徒の活動に対してどのような支援が必要かが話題となつたが、共有する時間や深める時間を確保することが必要という意見があつた。
- ・生徒の「できた」と「分かっている」を見極めて評価することが課題である。

#### （2班）

- ・グループ内でしっかりと協働できていた。
- ・授業の流れを板書しておくことや、板書を Classi で配信するという活用の仕方がよかつた。
- ・できない生徒への対応が課題であると感じられた。

#### （3班）

- ・思考活動が活発に行われていた。
- ・「個」→「グループ」→「全体」という流れが必要だと思う。
- ・数学的な内容に関しては補足が必要な部分もあり、授業構成に工夫の余地があつたと思う。

#### （4班）

- ・問題解決の時間を生徒と競争するなどの工夫がよかつた。
- ・証明することがねらいなのか、解法のテクニックを身に付けることがねらいなのかがはつきりしなかつた。

### （3）授業者の感想

協議の中で示してもらったことに、確かにそうすればよかつたというアドバイスがあつたので、次に活かしていきたいと思う。

### （4）指導助言

先生方が協議に向かう姿勢が素晴らしい、生徒達にも見せたいくらいであった。先生方が授業改善に対して積極的であることが感じられた。

「主体的・対話的で深い学び」には決まったスタイルはない。学校や生徒の特色に応じて作り上げていくものである。普段から先生方が授業に関して話し合う機会をもつことができれば授業改善は進んでいくと思う。今後も先生方の対話を続けていってもらいたい。

本時のねらいが、本校のねらう生徒像のどの部分とつながっていて、生徒のどのような変容をねらったものであるのかを明確に結び付ける視点で見ていただきたい。

協働的な学習のためには、協働する前に自分の意見をしっかりともつことが大事である。また、考えを共有することのよさも感じさせなければならない。

今日の授業では、答が合っているのかだけではなく、どのように考えたのかを共有する場面がみられてよかったです。

授業での指導者の発問は1問1答の形式になってしまることが多いが、今日は考え方をしっかりと評価していたので、生徒も間違いを恐れずに発表できる雰囲気になっていた。ただ、生徒からどのような反応があっても、それが予想外の反応とならないように準備しておかなければいけない。

表現力を高めるためには、「しっかりと思考する」ことを繰り返すことが大事である。1単位時間だけにこだわらず、表現力を高める授業構成を考えてももらいたい。今日の盛り上がりの場面は思考力を要する場面ではなかった。

まとめで先生が話した内容を生徒の口から引き出すことができればなおよいと思う。そのための主発問をどうすべきなのか工夫してみるといいのではないか。

今後も引き続き授業改善に取り組んでいただきたい。

# 高等学校理科 物理 学習指導案

学級 2年A組39名  
場所 2年A組教室  
授業者 佐藤 啓介

## 1 単元名 第3章 運動量の保存 3. 反発係数

### 2 単元の目標

- (1) 力が一瞬だけ加わったときに、物体の運動がどのように変化するかに興味をもつことができる。 【関心・意欲・態度】
- (2) 運動量保存則を適用する条件を理解し、適切に状況を判断して立式し、変化した物理量の値から、その後の運動を表現することができる。 【思考・判断・表現】
- (3) 力が一瞬だけはたらく状況を観察し、運動量保存則や反発係数を用いて予測を立て、実験の結果を表現することができる。 【観察・実験の技能】
- (4) 運動量保存則が適用される条件を自ら見出し、立式することで運動に係わる物理量を求めることができる。 【知識・理解】

### 3 取り上げる教材

教 材：「改訂版 物理」（数研出版）

### 4 本単元で育成しようとする「思考力・判断力・表現力」

運動量保存則が必要である状況を自ら判断し、その状況にあった式を立式して適切な物理量を求め、その後の運動の予測を表現することができる。

### 5 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	観察・実験の技能	知識・理解
衝突などの一瞬だけ力が加わる状況に関心をもち、意欲的に探究しようとしている。	力や反発係数など、提示された運動に対して適切な条件を判断し物理量を求め、その後の運動予測を表現できる。	衝突時の運動の様子を観察し、既習の内容から実際の運動に対する予測をたて、観察を通して予測との整合性を発見することができる。	各運動の条件の違いから適切な法則を選び、立式して物理量を求めることができる。

### 6 生徒と単元

#### (1) 《生徒の実態》 男子 26名 女子 13名 計 39名

活発な生徒が多く、グループでの学び合いや対話的な学習に意欲をもつ生徒が多い。反面、学習能力が高いが表現することに抵抗をもつ生徒も少なからず在籍するクラスである。また、学力の幅が大きく、物理に対する理解度の幅も大きいので提示する課題の設定が難しいクラスでもある。今回の授業を通して、学力や理解度の高い生徒から物理の考え方の論理性を学び、その表現の仕方にについて身に付けていけるように留意したい。

#### (2) 《本単元（教材）について》

力学領域の中でも、「運動の法則」「力学的エネルギー保存則」と並んで重要度の高い単元である。生徒達は連続的に力が加わって運動が変化していくことを考えることはできるが、一瞬だけ（非常に短い時間、あるいは外力が連続的に加わらない状況を指す）場合の運動の表現については初め

て学ぶことになる。どのような状況で運動量保存則を適用し、正確な立式を通して事後の運動の状況を予測し、その後の運動との関連性を考える能力は、今後の発展的な物理学には必要不可欠な能力である。論理的に状況を考える上で非常に大切な単元である。

(3) 《(1) (2) を受けた、本単元の指導について》

提示された状況について、まずは生徒一人一人が考え、自らの答えを導き出して見ることが大切である。その後、グループを構成しグループ内の個々人の表現から自らに足りない考え方、論理の進め方、表現の仕方を考えさせたい。さらにグループで一つの解答を作成することで、解答を作成したときに留意したことを確認させ、全体に発表することで全生徒がそれを共有することを通して、思考力・判断力を向上させ、物理的状況を表現することを学ばせていくたい。

**7 全体計画 (総時数8時間)**

本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
1 ( 1 ～ 2 時 限 )	・運動量と力積の関係を通して、運動量がはたらく条件を理解する。	・一瞬しか力がはたらかぬ物体の運動について既習事項からどのように表現するかを考える。	・考える際に必要な既習事項の確認と論理的な思考を促すためにフローチャートを配付する。  【知識・理解】 (ワークシート分析)
2 ( 3 ～ 4 時 限 )	・運動量保存則の成り立ちを理解し、衝突などが発生したときに運動の変化を判断し、立式することができる。	・運動量と力積の関係の定義から運動量保存則を導くことができる。  ・平面の衝突の実験から衝突後の運動の様子を予測し、確かめることができる。	・なるべく同条件で実験ができるように支援する。  【思考・判断・表現】 ・平面の衝突における予測ができるか 【観察・実験の技能】 (ワークシート分析)
3 ( 5 ～ 6 時 限 )	・物体の個別の性質によって衝突の状況が変化し、反発係数によって表現していくことができる。	・反発係数を用いて物体がもつ性質に合わせて運動量保存則を利用することができます。	・グループワークを設定し、考え方を共有できるようにする。  【思考・判断・表現】 (ワークシート分析)
4 ( 7 時 限 ～ 本 時 )	・既習事項から運動量保存則を用いて運動の変化の様子を表現することができる。	・グループワークを通して解答を作成し、発表する。	・適切な課題を提示し解答する時間やグループワークの時間を適切にコーディネートする。  【思考・判断・表現】 【興味・関心・態度】
5 ( 8 時 限 )	・運動量保存則と力学的エネルギーの変化の関わりについて理解する。	・運動量の変化の様子と力学的エネルギーの変化の様子を比較し、考える。	・ワークシートを用いてそれぞれの考えを発表し、解答を作成して確かめる。  【知識・理解】 【思考・判断・表現】 (ワークシート分析)

## 8 本時の計画（本時 7／8 時間）

### (1) 本時の目標

既習事項から運動量保存則や反発係数を用いて運動の変化の様子を表現することができる。

【思考・判断・表現】

【興味・関心・態度】

### (2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入 10分	<p>1 提示された課題に対して解答を作成する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">           与えられた物体の運動条件から、適切な定理、原理、法則を用いることができる。         </div>	個	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題に対して論理的に解答を作成できるように、フローチャートの使用を認める。</li> </ul>	
展開 35分	<p>問題は3種類用意する。1班あたり4名で、3班を一つのグループとし、代表を決める</p> <p>2 班に分かれて自らの解答を確認しあい、解答作成の上で気を付けたことを提示しあう。</p> <p>3 班内の解答を作成する。（2. 3で10分）</p> <p>4 班内の解答を白板にまとめ、発表の内容を考える。（8分）</p> <p>5 各班で発表し、グループの中の代表発表を投票で決める。（8分）</p> <p>6 各問題の代表が発表する（9分）</p>	グループ	<ul style="list-style-type: none"> <li>班内の他のメンバーのよいところを評価しながら解答を改善していくことを促す。</li> <li>発表時間の2分が守れるように論理的な説明の仕方について生徒に注意を促す。</li> <li>フローチャートを用いて適切な論理の展開ができるかを確認させる。</li> <li>よい解答の基準に気付けるように論理的な解答を選択することを促す。</li> </ul>	<p>積極的にグループワーク・発表に係わることができたか。【興味・態度】 (ワークシート内の自己評価)</p> <p>論理的に解答を作成することができたか。 【思考・判断・表現】 (個人のワークシート、及びグループ解答)</p>
まとめ 5分	8 求められる論理性といい解答がどのようなもののかを学ぶ。	個	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師が最もよいと判断した解答を示し、そのよさを伝え、物理学の論理性に対する審美眼の発達を促す。</li> </ul>	

## 9 協議の視点

(1) 協働的に問題を解決するための手立ては適切であったか。

(2) 思考力を育むための場面の設定はよかつたか。

## 10 教科協議会記録

期日：令和元年10月18日（金）

指導助言者：高校教育課指導班 能美 佳央 主任指導主事

### （1）授業者から

今回は思考力をためし、発表・表現を重視する授業を目指した。

本時のような「解答作成」スタイルの授業は1年に何度か取り入れているが、グループ毎にホワイトボード（A3版）を利用するのは初めてであった。ホワイトボードを使うことで、「よい解答」を選ぶ、という進め方を想定して授業案を構成した。生徒の発表自体はうまくできたと思う。

一方、問題設定の関係で、グループ毎にバラエティに富んだ解答というものは生まれにくかった。これは、数学的能力がまだ未熟ということも原因と感じている。

今回の、「各グループで発表後にそれぞれのセクションで一番よい解法のグループを選ぶ」というやり方については、生徒自身が楽しんでおり、とてもよい時間であった。

### （2）各班の発表

#### （1班）

- ・生徒同士が協働的に進めていた。
- ・一方で、グループで話し合わずに1人でホワイトボードに解法を書き込んでいる班が見られた。
- ・マスクをしたまま発表したり、ずっとホワイトボードを見て発表するなど、発表については気になる点があった。
- ・発表については、もっと広い場所で発表をしたり、タイマーで発表の経過時間が分かるようにしたりするなどの、工夫があつてもよかったです。

#### （2班）

- ・個人で考え、グループで討議し、全体に発表するという流れができており、それぞれの時間設定がよかったです。
- ・初見の問題を使う、など授業の設定がよくできていた。
- ・一方で、グループ内での生徒間の学力差が見られ、細かい条件に気が付かない班や、思考力を深めることができない生徒が見られ、よい答案をピックアップできないケースがあった。

#### （3班）

- ・生徒がよく動いていた。ホワイトボードを使い目の前で解法を書くことで、同じ班の生徒がよく話を聞いていた。
- ・話し合いに入れない生徒もいたが、4人が教え合うことで考えが深まるのではないか。
- ・用意してあった「解法のためのフローチャート」が有効であった。思考の過程がよく分かる資料である。
- ・発表することで、よく考えている。
- ・物理の魅力を伝える時間があつてもいいのではないか。

### (3) 授業者の感想

「活動させる授業」にすることことができた。ホワイトボードは中等部の授業でよく使っており、本授業のために活用させていただいた。ありがとうございました。

### (4) 指導助言

工夫された授業でした。時間配分もうまくできており、振り返るための時間は知識の定着を図るために丁度よかったです。

各生徒が個人で解く最初の10分間はとても静かであった。また、グループの中には、グラフの軸の設定に関して議論していたグループもあり、よく学び合っている様子が見られた。これらは深い学びの中核であると感じる。

今回は、問題をお互いに解き合うというスタイルであったが、実際に物を持ってきて見せてみてはどうか。事前に授業案について、「2球の衝突の設定を3パターン用意し、ABCの3グループで解く」という発想だった。

発表した解法の中から一番よいグループを問題毎にそれぞれ1グループ決めていたが、このあたりの進め方(ルール)の説明が最初になかったようである。生徒が主体的に学ぶためには、最初に設定(ルール)を説明しておくことが大事なのではないか。また、生徒が主体的に動くためには生徒の調整能力が必要である。授業を通して養ってほしい。

最後に、中等部の授業に触発されたとしても「南高的な授業」だったと思います。今後も引き続き授業改善に取り組んでいただきたい。

# 高等学校芸術科美術Ⅰ 学習指導案

学 級 1 年 E 組

場 所 美術室 1

授業者 深井 裕之

## 1 題 材 名 『無限柱～モニュメントとしての抽象彫刻の鑑賞』 「B鑑賞」 (1時間)

### 2 題材の目標（本時の目標） ※B鑑賞の評価の観点は2つのみ

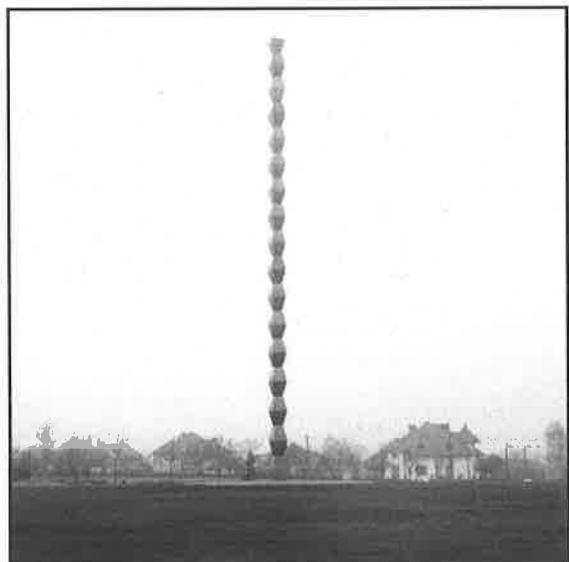
- (1) 抽象彫刻としてのよさや美しさ、モニュメントを制作した作者の心情や意図と表現の工夫、モニュメントのある国や地域の歴史などに关心をもち、作品について理解しようとする。 (関心・意欲・態度)
- (2) 抽象彫刻としての「無限柱」のよさや美しさ、モニュメントとして制作した作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り、「平和祈念像」と比較しながらその特徴を捉えて分析するなどして、作品に対する見方や感じ方、考え方などをもち、理解する。 (鑑賞の能力)
- (3) モニュメントに求められる表現の特質や果たす役割、主題や表現方法について感じ取り、社会の中で美術がもつ意味や働きを理解している。 (鑑賞の能力)

### 対応する学習指導要領の指導事項

#### 「B鑑賞」

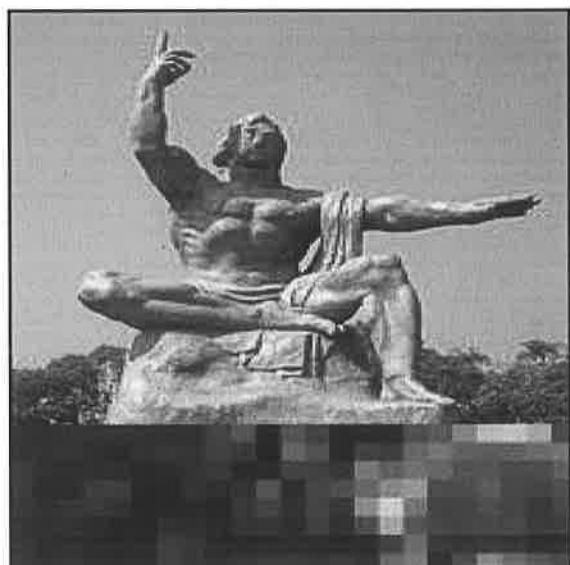
- ア 美術作品などのよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り、理解を深めること。
- ウ 自然と美術とのかかわり、生活や社会を心豊かにする美術の働きについて考え、理解を深めること。
- エ 日本の美術の歴史や表現の特質、日本及び諸外国の美術文化について理解を深めること。

### 3 取り上げる教材



①「無限柱」(コンスタンティン・ブランクーシ作)

ルーマニア ラシセ市 1937



②「平和祈念像」(北村西望作)

長崎市1955

#### 4 本題材で育成しようとする「思考力・判断力・表現力」

- (1) 抽象表現と具象表現の特質を捉えて作者の意図やねらいを感じ取ろうとする力。
- (2) グループワークの中で、他者の見方や考え方について批評的に捉えたりそのよさに気付いたりしながら、協働して理解を深めようとする力。

#### 5 評価の計画

##### (1) 題材の評価基準

美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
<p><b>鑑賞</b> 作品のよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などに关心をもち、作品について理解しようとしている。</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・美術作品のよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り、その特徴を捉えて分析するなどして、作品に対する見方や感じ方、考えなどをもち、理解している。</li></ul>
<p><b>鑑賞</b> 表現の造形的な特質に关心をもち、諸外国と日本の美術文化について理解しようとしている。</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・生活や社会を明るく心豊かにし、向上させる上で美術がもつ意味や働きを理解している。</li><li>・表現の特質、主題や表現方法を感じ取り、諸外国及び日本の美術文化について理解している。</li></ul>

##### (2) 学習活動に即した評価基準

美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
<p><b>鑑賞 関①</b> 抽象彫刻としてのよさや美しさ、モニュメントとして制作した作者の心情や意図と表現の工夫などに关心をもち、作品について理解しようとしている。</p>	<p><b>鑑①</b> 抽象彫刻としての「無限柱」のよさや美しさ、モニュメントとして制作した作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り、「平和祈念像」と比較しながらその特徴を捉えて分析するなどして、作品に対する見方や感じ方、考えなどをもち、理解している。</p>
<p><b>鑑賞 関②</b> モニュメントに求められる表現の特質や果たす役割に关心をもち、モニュメントのある国や地域の歴史をふまえて美術文化について理解しようとしている。</p>	<p><b>鑑②</b> モニュメントに求められる表現の特質や果たす役割、主題や表現方法について感じ取り、社会の中で美術がもつ意味や働きを理解している。</p> <p><b>鑑②</b> ルーマニアと日本の歴史をふまえて美術文化について理解している。</p>

#### 6 生徒と題材

##### (1) 《生徒の実態》 美術選択者 男子11名 女子4名 計15名

生徒の希望をもとに音楽か美術かを選択させているため、全体的に教科への興味や関心が高く、題材に対して真面目に取り組む生徒が多い。その反面、美術の表現に落とし込むためのスキルや経験が少なかつたり、鑑賞の際に感じ取ったことを適切な言葉で表すための語彙が乏しかつたりする生徒も多く、表現が説明的な図だったり、考えを述べる言葉に実感がともなわない場合が見受けられる。

授業では多様な表現や新たな鑑賞の視点が生まれるように、それらを尊重する雰囲気を醸成するとともに、生徒の価値観の変容をうながすために生徒相互の批評をともなう鑑賞活動を充実させたい。

## (2) 《本題材について》

美術Ⅰでは、B鑑賞のねらいである「美術作品などを様々な観点から鑑賞して、自然や社会と美術との関係、日本及び諸外国の美術文化などを理解すること」を育むために、造形的なものの見方や感じ取りができるだけ多様になるように、深めることもできるように題材やテーマを選んで授業を進めてきた。

抽象表現はその中でも特に解釈の自由度が高いため、そのねらいを果たす題材として効果的な面がある。しかし、その自由さゆえに「抽象は何をやってどう感じ取ってもOK」という短絡的な考えに陥ってしまうと、逆に造形的なものの見方や思考を深めることを阻害することにもなりかねない。

そこで今回は、モニュメントとして制作された抽象彫刻を鑑賞することをおして、一見すると、どのように解釈できる抽象表現に込められた作者の意図や伝えたかったメッセージなどについて様々な角度から掘り下げて探らせ、造形的なよさや美しさを深く味わわせたい。

彫刻家ブランクーシの作品には、今回取り上げる「無限柱」も含めて抽象の度合いの高いものが多いが、戦争モニュメントとして依頼されたこの作品には、第一次世界大戦の中で戦場となった祖国ルーマニアの記憶を後世に伝えるための公共的な役割がある。作者は、「無限柱」を抽象作品としてあらわすことでの造形と鑑賞の自由さを保ちつつ、モニュメントとして求められる普遍的なメッセージ性についても見事に調和させて表現している。抽象性とメッセージ性という一見相反する要素を、説明的な表現にならないよう高いレベルで両立しているという点で、考え方を深めさせる題材のねらいに適している作品である。

## (3) 《(1)(2)を受けた、本題材の指導について》

はじめ、生徒には「無限柱」に予備知識を与えることなく通常と同じように自由に鑑賞させるが、主発問を入れ、少しずつ浮かぶ生徒の疑問に対してヒントや情報を与え、それを手がかりとして推理劇のように思考を深めさせたい。その際、生徒からは「大きい、たくさん、無限」などの曖昧な言葉が出てくることが予想されるが、ユニットの数を数えさせたり、作品の高さやユニットの数からユニットの大きさを計算させたりして、数字がもつ意味なども考えさせたい。そのように進めながら、生徒が自ずから「この作品には作家の自己表現を越えた大きな目的があるのではないか」と気付くように導きたい。

そして、「では何のため誰のために」という疑問が大きくなつたところで、理解の手がかりとして北村西望の「平和祈念像」を掲示し、鑑賞の次元を一段高めたい。2つの作品は共に戦争モニュメントであり、さまざまな共通点があるが、抽象表現と具象表現という造形方法の違いだけでなく、その背景やメッセージ性についても相違点がたくさんある。比較して鑑賞することで生徒の中に「根拠」を考える力を育てたい。

このような手立てによって鑑賞が深まつたと思われる時点で、「無限柱」の正式名称を明らかにする。我々日本人は戦争モニュメントに対して、敗戦、悲劇、死、恐怖などネガティブなイメージを想起しがちだが、国やどんな戦争だったかなどの違いによってすべての戦争参加国が同じ思いをもつわけではない。作品の違いだけでなく、両国の歴史的文化的背景などにも焦点を当て、その違いにも気付かせたい。

作品の正式名称を知ったとき、これまでバラバラに存在していた作品のイメージが生徒の中で一つに繋がったり、まったく別物に見えたりする感覚を味わう生徒もいると思う。鑑賞のおもしろさを深く味わってもらいたい。同時に、モニュメントとしての抽象彫刻の鑑賞の楽しみ方は、一つの正解にたどり着くことではなく、作品に込められた一つのメッセージを元にしながらも、創造的で造形的な表現味わい、歴史や文化の違いなどを理解することによって、より豊かに広がることに気付かせたい。

この鑑賞は、地歴や国語総合教科書(現代文「少女たちの『ひろしま』」東京書籍)など、他教科との関連性もある。それぞれの学習内容を結び付け、理解を深めることにも役立ててもらいたい。

## 7 全体計画（本時の計画）（1／1時間） ※総時数1時間の題材のため、本時の計画に同じ

(1) 本時の目標 ※総時数1時間の題材のため、題材の目標と同じ

(2) 学習過程

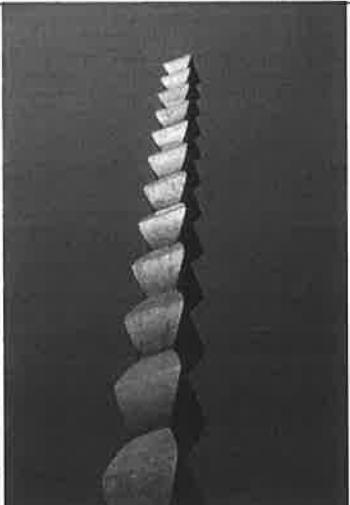
過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入 4分	1 前時までの「彫刻基礎」の学習内容を確認する。	グ	・制作した彫刻の表現技法や表現方法について特徴とともに思い出せるよう助言する。	・彫造と塑造の違いや具象と抽象の違いを理解している。(観察)
展開	2 「無限柱」の鑑賞① 情報なしで、人と話し合わずに鑑賞する。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">目標(1)</span>	個	・作品の特徴をとらえられるよう画像を遠近2枚掲示する。 ・題名と作者を明らかにしてから発問する。	・積極的に考えたり発言している。(観察)
	発問：「無限柱」という題名のこの作品は何をあらわしたものか。			
	3 「無限柱」の鑑賞② ・何を表現したものか、何を感じるか自由に意見を出し、疑問点を出し合う。 ・グループ毎に発表する。	グ	・グループワークシートが見やすいようにグループを同じ向きに座らせる。 ・根拠や理由も添えて発表するよう助言する。	・疑問点を出し合い、深く考えようとしている。(観察・プリント)
	4 「平和祈念像」の鑑賞 ・作品について知っていることを挙げる。 ・作品の解説を聞いて、背景やねらいを理解する。	グ	・比較作品として「平和祈念像」の画像を掲示する。作品の背景、表情、ポーズなどを注目させながら、二つの作品が戦争モニュメントであることに導く。	・二つの作品の表現形式の違いや作者の意図などを比較しながら鑑賞している。(観察・発表)
	5 「無限柱」の鑑賞③ ・戦争モニュメントとして「無限柱」があらわしているものを探査する。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">目標(2)</span>	グ	・「無限柱」の画像を追加して提示し、思考の手がかりとなる情報を与える。 ・作品の正式名称を板書する。	
41 分	6 振り返り ・今日の鑑賞で気付いたことや感じたことをプリントにまとめる。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">目標(3)</span>	個	・振り返りのプリントを配付する。 ・発問の「何をあらわしたのか」「どのように」を加えて考え、まとめるよう助言する。	・問い合わせに対する考え方や気付き、彫刻への理解の深まりがある。(プリント分析)
まとめ 5分	7 他の生徒の振り返りを聞き、鑑賞の目的を再確認する。	全	・何人かにプリントを読ませる。 ・プリントを回収する。 ・地元のモニュメントを挙げさせて鑑賞してみるよう助言する。	

## 8 協議の視点

(1) 生徒どうしが互いの考えを述べ合い共有する場面が適切に設定できていたか。

(2) 学習課題を生かした振り返りによる、思考力・表現力の定着が図られていたか。

資料 鑑賞題材と比較作品について

	鑑賞題材	比較作品
作品画像		
作者(国籍)	コンスタンティン・ブランクーシ(ルーマニア)	北村西望(日本)
作品名	無限柱	平和祈念像
素材	鉄	青銅
大きさ	高さ29.35m	高さ9.8m 台座3.8m 重量約22t
完成年	1937年	1955年(制作期間4年)
表現形式	抽象表現	具象表現
設置場所	ルーマニア トゥルグ・ジウ市	長崎平和公園
設置目的	戦争モニュメント	戦争モニュメント
対象の戦争	第一次世界大戦(戦勝国側)	第二次世界大戦(太平洋戦争)(敗戦国側)
補足説明	<p>作品の正式名称  「終わることなき感謝の柱、英雄たちの記念碑」</p> <p>ブランクーシはルーマニアのオルテニア地方ゴルジュ県ペシュティシャニ村に生まれた。作品は作者の生地ゴルジュ県の県庁所在地トゥルグ・ジュ市に、ルーマニア婦人連盟ゴルジュ支部が依頼して実現したと言われている。ルーマニアの戦没者は74万8千人(人口の9.33%)。うち軍人25万人。国としては戦いに負けたが連合国側に属したため戦勝国となった複雑な背景をもつ。</p>	<p>平和祈念像作者の言葉(彫刻の説明板)</p> <p>「あの悪夢のような戦争 身の毛のよだつ  凄絶悲惨 肉親を人の子を かえり見るさ  え堪えがたい眞情 誰か平和を祈らずに  いられよう 茲に全世界平和運動の先駆と  して 此平和祈念像が誕生した 山の如き  聖哲それは逞しい男性の健康美 全長三  十二尺余 右手は原爆を示し左手は平和  を 顔は戦争犠牲者の冥福を祈る 是人  種を超えた人間 時に佛時に神 長崎  始まって最大の英断と情熱 今や人類最  高の希望の象徴」</p>

## 10 教科協議会記録

期日：令和元年10月18日（金）

指導助言者：秋田県総合教育センター 田森 舞 指導主事

### （1）授業者から

抽象表現について、平面より立体のほうが取り組みやすいので、彫刻を取り上げた。生徒の価値観や先入観を次々と変えるためにモニュメントを用いた。本来、テンポよく進めるのだが、今日は生徒がしっかり考えて発表したので、振り返りの時間が短くなってしまった。ただ生徒は振り返りシートをよく書いていたので、シートを見ながら、協議をすすめてほしい。

### （2）各班の発表

#### （1班）

視点1：パワーポイントが小さかった。研究授業ということで限られた時間であり、時間が足りなかつた。進め方については、段階的助言をしていたことがよかつた。

視点2：振り返りの共有の時間がもう少し長い方がよい。

#### （2班）

視点1：グループの座り方が3人横並びだったことについて、コの字で、顔をみて話す方がよいという意見があつたが、3人でワークシートを共有し、まとめることで視覚化できていた。グループ内で新しい意見も生まれていたようだ。進め方としては、何もないところから、情報を与えていき、生徒の考えも深まつた。

視点2：振り返りで、生徒から多様な考えが出ていた。もう少し時間を取ってもよかつた。スライドが多いので生徒が見終わらずに次に進んだ場面もあったので、スライドの使い方には工夫が必要だ。第1次世界大戦時のルーマニアについては生徒はほとんど知らないと思われる所以、スライドを活用することで時間をかけずに進めることができる。振り返りは有効で、書かせた後に発表させたことがよかつた。書いた内容よりも多く話していた。話をさせること、発表をさせることが大事であると気付くことができた。

### （3）授業者の感想

時間が足りず、振り返りも十分時間をとれなかつた。次の授業で時間をとりたい。横並びの座り方については、10年研の授業で取り入れていて、いろいろな意見が出ていたので参考にした。

### （4）指導助言

①新学習指導要領が年次進行していくが、共通事項に「形や色」がある。本時の子どもたちは美術の視点でモニュメントを見ていたし、話し合いも進めていた。抽象は難しいが、生徒のイメージが想起されていた。

②「個→グループ→全体→個」という形態で活動を行う中で、生徒が揺さぶられていた。振り返りをすることで考えが整理される。深井先生は机間巡回をし、子どもたちの様子をよく見ていた。授業全体が和やかな雰囲気で進んでいた。今後、批評し合う活動へ発展できたらよい。

③鑑賞を通して、環境に気付くようになる。本時はゴールの示し方が効果的で、生徒と共有されていた。これらの作品づくりや生活の中で、モニュメントに気付くだろう。振り返りの時間を確保するためにもワークシートを工夫してもよい。例えば、「無限柱」のみを中央に置き、その周りに自由に書かせてもよい。子どもたちはモニュメントの永遠性、普遍性に気付いていた。情報は精選すべきである。自分の意義や価値を伝え、他の生徒のいろいろな考え方を聞き、考え深めることができる。

# 高校 第3学年C組 外国語科（コミュニケーション英語III）学習指導案

日 時 令和元年9月4日（水）  
授業者 佐藤 亜希子（T1）  
Bryce Fowler（T2）  
場 所 高校 3年C組教室

## 1 単元名 Lesson9 Praying Hands

### 2 単元の目標

- (1) 絵画「祈りの手」がどのような経緯で描かれたかを読み取れるようになる。【外国語理解の能力】  
(2) 自己を犠牲にして他者へ協力する生き方について自分の考えを英語で他者に伝えられるようになる。  
【コミュニケーションへの関心・意欲・態度、外国語表現の能力】

### 3 CAN-DO 形式での学習到達目標との関連

相手の意見に対し個人で理由や根拠を示しながら簡潔に反論することができる。【GRADE 5 SPEAKING(Production)】

### 4 単元観

本単元は、絵画「祈りの手」がどのような経緯で描かれたかについての話である。兄のために自己を犠牲にして支えた弟に対する感謝の気持ちを表したもので他者への協力、敬愛を重んずる大切さを考える。このような生き方に共感できるかどうか、自分の考えをまとめ他者に伝えるとともに、他者の意見を批判的に考える態度を育成したい。

### 5 生徒観

このクラスは、男子25名、女子15名の計40名のクラスである。そのうち、理系が8名、文系が32名の文理混合クラスである。ペアワークやグループワークに積極的な生徒が多く、協働的な学習を通して互いに高め合う姿が見られる。自分の意見を分かりやすく相手に伝え、英語で適切に発信する基礎的な能力を養ってきた。難しい内容になると日本語に頼ることもあるが、最終的には英語で自分の考えを伝えようとする姿勢が見られる。

### 6 単元計画

- 1時間目 …Introduction、ComprehensionA1、A2  
2時間目 …Reading Comprehension①  
3時間目 …Reading Comprehension②  
4時間目 …ComprehensionA3、New words、Reading Practice  
5時間目 …Story Retelling  
6時間目 …Discussion（本時）

## 7 単元の評価基準

A コミュニケーションへの関心・意欲・態度	B 外国語表現の能力	C 外国語理解の能力	D 言語や文化についての知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> <li>学んだ内容やそれに基づく考え方、自分自身の言葉で伝えようとしている。</li> <li>話し手は積極的に伝えようとしており、聞き手は理解に努めている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己を犠牲にして他者へ協力する生き方について自分の考えを表現することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>読んだ内容を理解している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新出単語の使い方を理解している。</li> </ul>

## 8 本時の計画（本時6／6時間）

### (1) 目標

- 兄と弟のそれぞれの立場について考えることができる。【外国語理解の能力】
- 本文の内容に関連して賛成／反対の意見を英語で伝えることができる。【外国語表現の能力】

### (2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価
導入 5分	・ warm up	一斉		
展開 40分	<p style="text-align: center;">【学習課題】</p> <p style="text-align: center;">他者のために自分の夢を諦めることについて 賛成、反対の意見を述べることができる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>賛成の立場→反対の立場で理由を考える。</li> <li>立場を明確にして原稿を作成する。</li> <li>グループで意見を発表し、他者の上手な点をまとめ、一番上手な生徒を決める。</li> <li>数人発表する。</li> </ul>	個 個 グループ 一斉	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の目標を提示する。</li> <li>机間指導しながら、支援する。</li> <li>agree / disagree を決めさせ、自分の主張を論理的に書かせる。</li> <li>自分の意見をグループ内の生徒に分かりやすく伝えさせる。</li> <li>フィードバックしつつ、他の生徒の上手な点を学ばせる。</li> </ul>	B     A
まとめ 5分	・振り返りを記入する。	個	・振り返りシートに本時の学習を通じて学んだことや身に付けたことを記入させる。	

## 9 研究協議記録

授業者：佐藤亜希子先生・Bryce Fowler 先生

助言者：高校教育課 英語教育推進班 指導主事 小林正英先生

### 授業者より

佐藤亜：3年生は通常 ALT との TT の授業は行っておらず、今回で3回目であった。いつもレッスンの最後にディベートを行っているが、その場合は立場を教師側から指定している。今回は様々なものの見方をさせたいという考えがあり、自分の考えを自由に述べる形にした。また、本授業はテーマが難しいため、ディベートではなくディスカッションの活動を行った。

Bryce：生徒たちはとても元気で、活動に楽しんで取り組んでいた。ブレインストーミングやライティングの活動にも意欲的であった。英語の正確さに関してもっと支援してあげられればと思う。最後に挙手して発表する生徒がいたのはよかったです。

### 参観者より

高橋和：ALT が生徒と馴染んでいてクラスの雰囲気がよかったです。JTE の英語が明確で、生徒の動かし方も上手だった。Agree、disagree 両方の意見を書かせたこと、ディベートではなくディスカッションにしたのも正解だった。グループでの話合いの中で、「誰が一番か」も英語できればなよかったです。全体的な授業の流れ等、参考になるところが多くかった。

伊藤孝：ALT の活躍が随所に見られた。Warmup の活動が advanced learners 向けになっていたが、生徒もしっかりとできていた。教科書を生かした personalization のようなやり方もあったかもしれないが、ディスカッションを使う位置によっても変わってくる。

深沢：タイムマネジメントやクラスマネジメントが素晴らしい。活動の示し方も明確で、生徒の頭もフル回転していた。Bryce 先生は来たばかりなのに前からいたようだった。

Agree と disagree を書く順番を指示していたが、まず自分が選んだ方を書かせる方が自然で、生徒にとっても書きやすいかもしれない。Sharing の欄は、何を書くか分からない生徒もいた。Procedure について、書いてからグループで発表というやり方よりも、4人で意見を共有してから final decision を書く、という方法もある。Bryce 先生の最後のまとめにあった rewarding などの表現はよいインプットになると感じた。ALT とのやりとりがもっとあればよいと感じた。

戸坂：内容のレベルが高いので、これを 50 分におさめるのは大変だったと思うが、しっかりとまとめていた。こういった授業を受けることで、生徒の話す能力も向上するだろう。

金：生徒の声が大きくて、元気でよい授業だった。深沢先生からもあったが、書きやすい方から考える、話し合ってから書く、メモを見て話す、というやり方もあったと感じた。全員意見が同じ班があったが、異なる意見を聞くことも大事なので、その場合は席を少し移動させて話し合わせてもらよかったです。アイコンタクトと言っても、一度英文を書いてしまうとスクリプトを見てしまう生徒もいるので、メモの取り方を工夫させてもよい。

高橋智：3年 C 組は元気なクラスで、Bryce 先生も溶け込んでいたようだった。Agree/disagree を考える順番は、やりやすい方からでよかったです。今回の授業でも生徒は十分変容しているが、人の意見を聞くことでもっと変わることができる。他者の意見を聞いてメモする時間があつてもよかつ

た。

佐藤明：生徒が全員活動に参加していてよかったです。皆さんが言うように、理想は意見を共有してから英文を書くことだが、メモだけを見て発表するのは大変かもしれない。Retelling でキーワードを使って話しているが、教科書を見てしまう生徒もいる。今日も書き始めるのが遅い人がいた。

副校長：楽しい授業だった。雰囲気がよかったです。一つのトピックについて、賛成、反対の両方を考えるのはよい。意見を日本語でメモしている生徒がいたが、それをすぐに英文に直すことができていた。このようなことができるは南高の強みだと思う。また、発表者のよいところを認め合うことができていた。生徒が書いている文章の内容も素晴らしい。

#### 助言者より

最初に Bryce 先生へ。説明や指示が明確であった。教室の雰囲気もよく、教師のクラスマネジメントも巧みであった。ALT と JTE の協力体制がしっかりとしていることが、生徒のモチベーションや授業の質の向上に結びついている。ALT の役割としては、demonstration、interaction、feedback が挙げられる。Interaction や feedback があることで、生徒の自信につながっていく。

本日の授業に関して、生徒は高校 3 年生とは思えないくらい元気だった。生徒の高い英語力も見ることができた。フォローアップの成果が出ていると思う。最初はディベート活動をするということで指導案を提出してもらっていたが、難しいので変えてもらったという経緯がある。ディベートはどちらかの優位性を議論するものだが、今回は個人の感想が入ってくるので、定義付けが難しい。ディベートは、利害関係がクリアになっているかということが重要。生徒は「自分の立場」でしか考えないため、立場が個人的なものになってしまふ。定義や立場が限定的にならないように気を付ける必要がある。

# 高校 第2学年F組 外国語科（コミュニケーション英語Ⅱ）学習指導案

日 時 令和元年10月17日（水）  
授業者 伊藤 孝紘（T1）  
Bryce Fowler（T2）  
場 所 高校 2年F組教室

## 1 単元名 Foreign Workers in Japan

## 2 単元の目標

- (1) 日本における外国人労働者の現状と課題について理解することができる。【外国語理解の能力】  
(2) 日本における外国人労働者の現状と課題を踏まえた上で、自分の意見を英語で述べることができる。【外国語表現の能力】

## 3 CAN-DO 形式での学習到達目標との関連

学習した語句や内容を含む英文を聞いて理解することができる。【GRADE 4 Listening】  
社会の話題等について60語程度で書くことができる。【GRADE 4 Writing】

## 4 単元観

本単元は、日本の外国人労働者の現状と課題について書かれたエッセイである。人口減少が問題となっている一方で、労働人口が増えている背景を説明し、その中でも外国人労働者が直面している課題や政府の政策、今後の展望について述べられている。労働人口の減少など日本が抱える課題について、他者と意見交換することを通して、主体的に捉える態度を育成したい。

## 5 生徒観

このクラスは、男子17名、女子21名の計38名の文系クラスである。授業内容に対する理解度は高く、定期考査でも良い成績を収めているが、ペアワークやグループワークについては消極的であり活発に意見交換はされていない。授業では英問英答を原則に授業を進めており、意見や答えを求められれば、きちんと述べることができる生徒が多い。課題の難易度を調整し、協働しなければならない環境作りが必要である。

## 6 単元計画

- 1時間目 …Introduction, Comprehension  
2時間目 …Story Retelling  
3時間目 …Productive Activity(本時)

## 7 単元の評価基準

A コミュニケーションへの関心・意欲・態度	B 外国語表現の能力	C 外国語理解の能力	D 言語や文化についての知識・理解
コミュニケーションに関心をもち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとしている。	英語で話したり書いたりして、情報や考えなどを適切に伝えている。	英語を聞いたり読んだりして、情報や考えなどを的確に理解している。	英語やその運用についての知識を身につけているとともに、言語の背景にある文化などを理解している。

## 8 本時の計画（本時3／3時間）

### (1) 目標

- ・習った内容に関連した対話を聞き、内容を理解することができる。
- ・習った内容を踏まえて、テーマに対して自分の意見を述べることができる

【外国語理解の能力】

【外国語表現の能力】

### (2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価
導入 5分	・ warm up	一斉		
展開 30分	<p>【学習課題】</p> <p>日本で仕事を探している外国人にどのような支援ができるか、自分の意見を述べることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対話の最初の数行を読み、内容を推測する。</li> <li>・Key phraseに注意しながら対話を聞く。</li> <li>・Comprehension Qsに答える。</li> <li>・スクリプトを見ながら対話を聞き、答えを確認する。</li> <li>・学習課題についてブレーンストーミングする。</li> <li>・ペアで意見を交換する。</li> <li>・数名の意見をクラス全体で共有する。</li> </ul>	<p>ペア 個 ペア 個 ペア 一斉</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机間指導しながら、支援する。</li> <li>・agree / disagreeを決めさせ、自分の主張を論理的に書かせる。</li> <li>・自分の意見をグループ内の生徒に分かりやすく伝えさせる。</li> </ul> <p>メモをとりながら聴くように指示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・適切なフィードバックや質問をし、内容を深めさせる。</li> </ul>	C
まとめ 15分	・自分の意見を60語程度の英語にまとめて書く。	個	<ul style="list-style-type: none"> <li>・構成に気を付けて、理由や根拠を必ず書くように指示する。</li> </ul>	B

# 高校 第2学年A組 外国語科（英語表現II）学習指導案

日 時 令和元年10月17日（木）  
授業者 高橋 和也（T1）  
Bryce Fowler（T2）  
場 所 高校 2年A組教室

## 1 単元名 Lesson 13 制服に賛成？反対？

## 2 単元の目標

- (1) 数量を表す語句と名詞を修飾する表現を適切に用いて表現できる。 【外国語表現の能力】
- (2) 制服について自分の考えを他者に伝えることができる。 【外国語表現の能力】
- (3) 他者の意見を聞き、様々なものの見方を学んで自分の考えを深めることができる。 【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

## 3 CAN-DO 形式での学習到達目標との関連

- ・自分のスピーチに対する質問に英語で答えることができる。
- ・相手の理解度を意識しながら、口頭でわかりやすく丁寧に説明することができる。

【GRADE 4 SPEAKING(Interaction)】

## 4 単元観

高校生の制服の是非というテーマで、論拠や例を加えながら自分の意見を展開する方法を学ぶことをねらいとしている。単に、制服に対して賛成か反対かを明らかにしてその根拠を述べるだけでなく、そこからさらに論を展開し、他者の意見を聞くことによって制服に対する考え方や理解を深めさせたい。また、他者の考えをポジティブにとらえ、異なる視点から物事を考えようとする姿勢、表現が困難なことを英語で表現し他者に伝えようとする姿勢を育成したい。

## 5 生徒観

このクラスは、男子25名、女子15名の計40名の全員理系クラスである。温厚な生徒が多く、落ち着きがあり学習にしっかりと取り組む。しかし、発話には消極的で、個別の活動には集中して取り組むことができるが、グループワークなどで協働的に学習する能力はまだ十分に養成されていない。この授業を通して積極的に発話し、互いに高め合う学習態度を育成したい。

## 6 単元計画

- 1時間目 …モデル文の内容を理解する。文法事項と語句を確認する。
- 2時間目 …例文を運用して表現練習をする。練習問題によって学習事項を確認する。
- 3時間目 …単元のトピックに関連した論題でディスカッションを行う。（本時）

## 7 単元の評価基準

A コミュニケーションへの関心・意欲・態度	B 外国語表現の能力	C 外国語理解の能力	D 言語や文化についての知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> <li>ペアワークやグループワーク、教師とのやりとりにおいて、積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の語彙や表現を用いて適切に表現できる。</li> <li>制服に対する自分の考えを、既習の英語を用いて他者に伝えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の概要や要点を適確に捉えている。</li> <li>他者が伝えようとしていることを理解することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>基礎的な語彙や表現、または単元の語彙や表現を身に附けています。</li> </ul>

## 8 本時の計画（本時3／3時間）

### (1) 目標

- 他者の意見を理解し、自分の考えを深めることができます。【外国語理解の能力】
- 制服の意義について自分の考えを英語で伝えることができます。【外国語表現の能力】

### (2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価
Warm up 5分	・与えられた質問に対する自分の考えを互いに伝える。	ペア	積極的に発話ができる雰囲気を作る。	
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の目標の確認</li> </ul> <p style="text-align: center;"><b>【学習課題】</b> 制服の意義について考えを深め、自分の意見を述べることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>モデル文を読む。</li> <li>制服に対して賛成か反対かを明らかにし、理由と共に述べる。</li> <li>制服に対するALTの考え方を聞く。</li> </ul>	一斉 ペア	<ul style="list-style-type: none"> <li>読んだ後に、概要を伝える。</li> <li>表現のフォーマットを与える。</li> <li>机間指導しながら支援する。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>概要や意図を伝える。</li> </ul>	B
展開 30分	<ul style="list-style-type: none"> <li>服装の自由化を提案する動画を見る。</li> <li>服装の自由化に伴う弊害について議論し、発表する。</li> <li>服装の自由化に伴う弊害を踏まえて、制服の意義を考えメモをする。</li> <li>グループ内で自分の意見を発表する。</li> <li>数人発表し、クラスで共有する。</li> </ul>	一斉 グループ 個	<ul style="list-style-type: none"> <li>概要や意図を伝える。</li> <li>2つの議論の焦点を与えて、具体的に議論しやすくする。</li> <li>理由と共に書くことを意識させる。</li> <li>机間指導しながら支援する。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見をグループ内の生徒に分かりやすく伝えさせる。</li> <li>概要や意図を伝え、フィードバックする。</li> </ul>	B
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>制服に対する新たなALTの考え方を聞く。</li> <li>自分の意見を書いて提出する。</li> </ul>	一斉 個	<ul style="list-style-type: none"> <li>簡単な英語を使う。</li> <li>机間指導しながら支援する。</li> </ul>	B

## 9 研究協議記録

授業者：高橋和也先生・伊藤孝紘先生・Bryce Fowler 先生

助言者：高校教育課 英語教育推進班 指導主事 草階健樹先生

### 授業者より

伊藤孝（2校時・コミュニケーション英語Ⅱ）：今日の授業はリスニングに焦点を当てて行った。外国人労働者を扱った単元。副教材の NEWSBREAKS を使用。QA を通して本文を理解し、自分の意見を話して書く。このスタイルは 2 年生の英語表現では定着している。

Bryce（2校時）：生徒からよい意見が出ていた。外国人労働者へのサポートにも着目していた。創造的な話し合いができたと思う。

高橋和（3校時・英語表現Ⅱ）：指導案やハンドアウトを変更して実践した。話してから書かせるというやり方を行っている。最後に書く作業に至るまで、ステップを踏んで行った。今回のトピックはよく使われているものだったので、もう少し深く考えさせたくて本時の授業を行った。生徒はよく頑張ってくれていた。

Bryce（3校時）：トピックが面白かった。タイムマネジメントで課題が残る。即興的な話ができた。制服に賛成する生徒が多かったのは意外だった。

### 参観者より

戸坂：（3校時）ボードに書かせたのがよかったです。あのボードを黒板に貼ればよかったです。

高橋智：（3校時）声も小さかったので、前に出て発表してもよかったです。

木村：（3校時）流れについて。最後の「制服はよいものだ」という流れにもついていたかったのかと思う。どういう意図があったのか。

高橋和：最初は浅い話をする生徒が多いと思い、この流れにした。授業を通して最初と最後の意見が変わっている生徒もいたと思う。

戸坂：仮想の条件をつけるのは面白いと思った。Bad effectだけを考えさせるのも新鮮。

深沢：なぜ 2 つの点に絞ったのか。他にもあったのではないか。伊藤先生の授業ではサポートする点がたくさんあった。

高橋和：最初は枠なしで考えさせようと思ったが、意見が出てこないこともあると思い、ポイントを絞ることに決めた。

深沢：教科書にもあるようにコストの面もポイントとしてある。

高橋和：心理的なものに着目させたかった。

木村：（2校時）イントロで、働くこととは関係なく「行きたい国」について話していた。生徒たちは「海外で働く」イメージができていないのでは。生徒からもう少し「働くこと」に関する意見がほしかった。

伊藤孝：この後自分だったらどんな仕事をしてみたいのかということにも触れていきたい。

副校長：(2校時) いくつかのステップに分かれていた。生徒たちはしっかりと理解していた。

上手く組み立てられた授業だった。(3校時) 同じようなステップだった。生徒の考えが授業の活動を通して深まっていった。Casual dress code と Introduction of casual dress は違う。

**助言者より**

Bryce 先生へ： You are like an experienced teacher. Your comment motivates students.

You talked about LGBT and ethnic.

2校時・伊藤先生へ：短時間で終わる帯活動を入れるのはよいと思う。ダイアログを使った点は昨年度の研修でも扱った。Brainstorming のやり方、mind map の作り方は慣れているようだった。4技能統合型でよかったです。

3校時・高橋先生へ：前よりシンプルになってよかったです。最初のカードはよかったです。賛成・反対を列ごとに決めていくのもよかったです。一人でやっても深まらない。動画の時分かっていない生徒がいたので助け合うことができた。発音はしっかりと教えた方がよい。

南高としてどうやって生徒を育てていくのかという共通認識が必要。投げ込み教材をやっていると思うが、もっとレベルの高いものを与えてよいのではないか。南高生には English Camp にも参加してもらっている。引き続き頑張ってもらいたい。

## 第1学年2組 数学科学習指導案

実施日 9月12日（木）3校時  
授業者 大友 和也  
場 所 1年2組教室

### 1 単元名 変化と対応

### 2 単元の目標

- ともなって変わる2つの数量に着目し、比例や反比例の関係を見いだそうとする。  
【数学への关心・意欲・態度】
- 比例や反比例の数量の変化や対応の様子を、表や式、グラフなどを関連付けて考察できる。  
【数学的な見方や考え方】
- 比例や反比例を表や式、グラフなどを用いて、それらの特徴を表現できる。  
【数学的な技能】
- 比例や反比例の特徴や変数、変域、座標の意味が分かる。  
【数量や図形などについての知識・理解】

### 3 生徒と単元

#### (1) 単元観

具体的な事象の中から2つの数量を取り出し、それらの変化や対応を調べることを通して、比例、反比例の関係についての理解を深めるとともに、関数関係を見いだし表現し、考察する能力を養う。

比例、反比例については、小学校では身近な例を取り上げ、ともなって変わる2つの数量の関係として取り扱っている。中学校では同様に2つの数量を取り出して、2つの変数 $x$ 、 $y$ で表し、 $y$ が $x$ の関数であることを定義し、比例、反比例へと進んでいく。

学習指導要領にはこの単元で指導すべきこととして、「比例、反比例の変化や対応の特徴を見いだすこと」があげられている。表や式、グラフの特徴について理解を深め、目的に応じて適切な数学的表現ができるようにし、今後学習する関数の基礎事項の定着を図りたい。

また、この単元は、表や式、グラフから得られる情報の中から必要なものを取り出し、問題を統合的・発展的に考え、解決を図ることが求められるという点で重要であると考える。比例、反比例を用いて具体的な事象を捉え考察する問題を積極的に扱い、協働を通して論理的な思考力や表現力を育成したい。

#### (2) 生徒観

大変活発で志も高く、将来の進路に明確な目標をもつ生徒が多く、学習への意欲が高い。授業では大半が積極的に発表し、互いに教え合って学び合うことができる集団である。難しい問題に直面した際も、投げ出さずに粘り強く考えることができる生徒が多い。

4月に実施した学力推移調査（ベネッセ）では、学年全体の平均点偏差値が48.7と例年より約1ポイント低く、最上位層は例年に比べて少ない。また、数学（算数）に対する印象として「授業は分かっているが少し不安」が61.5%と自信があまりない生徒が多い。基礎的な事項の定着をしっかりと行うことと、応用問題を解いたときの達成感を与えることで、数学を楽しみながら、自信をもって取り組めるようにしたい。

方程式に関する県単元評価問題については、クラス平均得点率93.5%と、文字式に関する基礎は定着しているため、日常生活と関連した事象で導入を行った後は、数学的な事象についての問題も積極的に取り上げたい。

また、問題の答えを出すことはできても、他者にうまく説明することができない生徒もいるため、学習形態を工夫し、説明する機会を積極的に取り入れているところである。

### (3) 指導観

この単元では、比例や反比例についての意味や性質を理解することと、比例や反比例の特徴を数学的に表現すること、そして、比例や反比例を用いて具体的な事象を捉え考察することなど、これから先の関数の学習の基礎となる部分を学習する。特に、関数に関連した基礎的な概念である座標の意味を理解することや、比例や反比例の関係をグラフに表すことを通してその特徴を把握することは、今後の学習でもよく扱われる大切な内容であるので、その手法をきちんと理解させたい。

また、座標平面にあるグラフを見て、様々なものを求めるときの考え方には、論理的思考力を育むのに適している。説明する力が十分ではない生徒もいるため、この単元で頻出する表やグラフについては説明の手段として利用できることを理解させ、積極的に利用するよう働きかけたい。その際には、ペアやグループでの学習を取り入れていきたい。

解き方を教えてもらったことのない初見の問題に対しては、解法の糸口すら見いだせないまま解決に至らない生徒もいるので、生徒相互の学び合いの充実を図るとともに、考え方の指導を十分に行ってきたい。

#### 4 全体計画（総時数 14 時間）

	学習活動	評価規準	時数
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「<math>y</math> は <math>x</math> の関数である」とは何かを確認する</li> <li>・関数を表やグラフで調べる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的な事象の中にある数量の関係を調べ、関数の関係を見いだそうとしている。【数学への関心・意欲・態度】（観察）</li> <li>・関数、変数、変域の意味が分かる 【数量や図形などについての知識・理解】（ノート・評価問題）</li> </ul>	2
2	・「 $y$ は $x$ に比例する」ときの、 $x$ と $y$ の関係を表す式を求める。	・与えられた条件から比例の式を求めることができる。【数学的な技能】（ノート・評価問題）	2
3	・座標の意味を確認し、点を座標平面上に表す。	・座標の表し方を理解している 【数量や図形などについての知識・理解】（ノート・評価問題）	1
4	・比例のグラフを特徴を確認し、その特徴を基にグラフをかく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・比例のグラフの特徴とかき方を理解している。</li> </ul> <p>【数量や図形などについての知識・理解】（ノート・評価問題）</p>	2
5	・「 $y$ は $x$ に反比例する」ときの、 $x$ と $y$ の関係を表す式を求める。	・与えられた条件から反比例の式を求めることができる。 【数学的な技能】（ノート・評価問題）	1
6	・反比例のグラフを特徴を確認し、その特徴を基にグラフをかく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・反比例のグラフの特徴とかき方を理解している。</li> </ul> <p>【数量や図形などについての知識・理解】（ノート・評価問題）</p>	2
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的な場面の問題を、表や式、グラフを用いて問題を解決する。</li> <li>・座標平面にあるグラフの問題を解決する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的な事象から取り出した 2 つの数量の関係がどんな関数であるかを判断し、表や式、グラフを用いて問題を解決できる。 【数学的な見方や考え方】（ノート・評価問題）</li> <li>・グラフから問題解決に必要な情報を読み取り、それらを基に論理的に考え、解法を適切な数学的な表現を用いて説明できる。 【数学的な見方や考え方】（観察・学習シート・評価問題）</li> </ul>	3(本時) /3
8	・基本の問題、章末問題を解き、確認する。		1

## 5 本時の計画（13／14）

### (1) ねらい（本時の目標）

- ・グラフから問題解決に必要な情報を読み取り、それらを基に論理的に考え、解法を適切な数学的な表現を用いて説明できる。【数学的な見方や考え方】

### (2) 展開

段階	生徒の活動	学習形態	教師の支援	評価（方法）
導入 (5分)	<p>1 問題を把握する</p> <p>2 課題を確認する</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">           難しい問題ではどんな考え方をすればよいのか？         </div> <p>3 見通しをもつ</p>	個別  全体	簡単に解けそうにないことを確認し、学習課題を提示する  何が分からないから解けないのかを掴ませる	
展開 (35分)	<p>1 自力で解決する</p> <p>2 考えを伝え合う</p> <p>3 発表する</p>	個別  集団  全体	活動が進まない生徒には助言を与える  グループになって、なぜそのように求めたのかを説明させる。  解き方でなく、どのようなことを考えて解いたかに着目させる	グラフから問題解決に必要な情報を読み取り、それらを基に論理的に考え、解法を適切な数学的な表現を用いて説明できる【数学的な見方や考え方】（観察・学習シート）
まとめ (10分)	<p>1 本時を振り返る</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">           (想定されるまとめ)            分かることと分からぬことを整理し、必要なものが何かを考える         </div> <p>2 評価問題を解き自己評価をする</p>	全体  個別	生徒の言葉をつないでまとめるようにする  問題が解けない生徒にはまとめを利用し、分からぬことを整理するよう助言する	

## 6 協議の視点

- (1) 協働的に問題を解決するための手立ては適切であったか
- (2) 思考力を育むための場面の設定はよかつたか

## 7 分科協議会記録

日時：9月12日（木）

指導助言者：中央教育事務所指導班 小澤 進 指導主事

### （1）授業者から

普段の授業から思考力を高めることをねらいとして授業をしている。高校で長く教えて来たこともあり、大学入試を念頭に置いて指導している。本時で、分かることと分からぬことを整理するよう助言したところ、解き方に気付いた生徒が出たのがうれしいことだった。グループ学習を進めることで気付く生徒が増えた。数学が苦手な生徒も今日は発表し、活躍した。

### （2）感想等

中学校の指導と違った視点で行われた授業が見られ、同じ学校にいるメリットを感じた。英語では「ふれて、気付いて、また使う」という手法を用いるが、数学でも同じだと思った。

### （3）研究協議

【協議の視点】 ① 協働的に問題を解決するための手立ては適切であったか。

② 思考力を育むための場面の設定はよかつたか。

① 協働的に問題を解決するための手立ては適切であったか。

・「協働的に問題を解決すること」を本時の授業にどのように組み入れたか。

→グループ学習をする場合、早く解いた生徒が話し手になり、解けない生徒に教えることが多い。本時では、解法が分からぬ生徒を話し手としたいと考え、段階的に教え合うように意図した。

・他の解法もあったと思う。他のものが出できたら採り上げてもいいのではないか。

→実際、今日の授業で採り上げたものと異なる解法を考えている生徒はいた。しかし、1時間の枠があるため盛り込むことができなかつた。

・「協働的」というと、同程度の理解度のメンバーが集まって話し合いをするイメージをもつている。今日はそのグループ分けではないのだが、いきなり答えを教えない話し合いがどのグループでも成立していて、そのスキルがあることに感心した。

・協働的な学びをするときの形態はペアやグループがある。グループの人数、教科用の編制など、いくつか判断するべきことがある。今日子ども達のがんばる様子から、グループ学習のベースに学級経営が生きていることが感じ取れた。

② 思考力を育むための場面の設定はよかつたか。

・「思考力を育む」とは、「分かることと分からぬことを出してそれを活用しながら解くこと」という捉えでいいのか。

→（協働的に解くことがあっても）最終的には1人で考えることになる。解く過程でやり方を身に付けなければならない。そのため「分かること分からぬこと」を自覚させようとした。

→簡単な応用問題は1人でも解けるように、難しい応用問題は協働で考えるという形式をとっていた。

・振り返りは1人でやるように机の向きを変えたほうがよかつた。

→一般的にはそうである。最後は個に返さないといけない。グループでやって「できた」となる。最後は1人でやっても「できた」となるようにする。

- ・本時の課題は1年生にとってまさしく難しい問題だった。
- ・思考力がついているか、はかりかたはどのようにするのか。問題を多く解いていくと、思考力を働かせるというより「経験」の有無が鍵のような気がしている。  
→「思考力をはかる」とは、初見の問題を解くことができるかどうかにあると考えている。  
どんな問題にも「初見」の段階がある。それを繰り返すと技能が身に付く。解き慣れると反射的に解ける。考えることも技能を定着させることもどちらも大事である。
- ・分かるところと分からぬところを整理できて、解決に臨むにはどうするかを考える力が思考力だと考えた。

#### (4) 指導助言

子ども達が協力して問題を解いていく姿を見ることができた。今日の授業は進めるうちに「分かった」「できた」という言葉が、教室のあちらこちらから聞こえてきた。これが「数学はおもしろい」という気持ちにつながる。振り返り問題（適用問題）はほとんどの生徒ができていた。

「主体的・対話的で深い学び」に向けて生徒や学校の実態に応じて授業改善を図ることが大切。本時はそれが成されていた。「主体的」に取り組むためには見通しをもつこと、自己の学習活動を振り返って次の学習に進むことが大切である。そして、振り返った学習が今日の学習に生きて問題解決できる生徒になっているようにすることである。

「対話的な学び」で気を付けたいことは、単なる発表会にならないこと。友だちの考えを聞いても「なるほど」と思わなければ深まらない。「深い学び」とは、自力解決する場面で、できなかつたことができるようになったら、「変容」であり深い学びである。また、1つのやり方を考えていた子どもが、1時間の授業で多様な考え方につどり着いたらそれは深い学び。さらに、いくつかの方法を思い付いていたが、最終的に洗練された解決方法にたどりついたとなれば深い学びである。そういうことが思考力を育む。

授業の成果は次のことである。1点目は、比例と反比例について基本的な学習内容を学習している生徒が、それらや図形を組み合わせた複合的な問題に果敢に取り組んでいること。できないことをまず実感させてから段階を追って解決方法の見通しをもたせた。それとともに、答えの大きさの見通しをもつこともある。Pの座標はだいたいいくらかつつかませるとよい。

2点目は、協働的に取り組む生徒集団であるということ。グループの学び合いの中で協働的に学習していく姿があった。対話的な学びの時には、話し手・聞き手がいる。聞き手が主体的に聞いているかがポイント。「もう一回説明して」と言わされた生徒は2度目は洗練された説明になる。考えに変容がみられたか、対話を通して確認できる。数学の目標に「論理的に考察する」「論理的に考え方数学的な表現を用いて説明する」がある。聞き手は次回は自分で説明できるようになる。複合的な問題に初めて取り組んだ生徒が「分かる情報」「分からぬ情報」を整理して問題解決の方法を新たに獲得した。方法知を学んだといえる。

3点目は、数学的活動を重視していること。「数学的活動」とは、次の3つである。①日常の事象や社会の事象から問題を見出して解決する。②これまで学習した数学の事象から問題を見出して解決する。③数学的な表現を用いて説明する。本時では③が見られた。これまでの指導の成果である。

今後の授業づくりでは次のことを生かしてほしい。黒板に提示する学習課題は、本時は生徒の実態をつかんだものであった。子どもは黒板を何度も見ることからすると「比例と反比例を学習して発展問題を解こう」など、もう少し具体性があるとよいのではないか。今日何をするかはっきり見えるようにするとよい。これまでの数学授業の典型は、先生が教える→生徒が活用して解くの形。教師は生徒の実態をつかんで授業を構成する。困難な課題に対して生徒が自ら考えを出して、協力して解決する、本時のような授業をこれからもつくってほしい。

## 第2学年 音楽科学習指導案

実施日 9月12日（木）2校時  
授業者 小林 明人  
クラス 2年1組  
場 所 音楽室

### 1 題材名 十二音技法を使ってトーンチャイムで音楽づくりをしよう

### 2 題材の目標

- トーンチャイムの音の重なり方や反復、変化、対照によって生み出される雰囲気と、自分たちが表したいイメージとの関わりを理解し、創意工夫を生かした表現で音楽をつくるために必要な、条件に沿った音の組合せの技能を身に付ける。 【知識・理解】
- 速度、強弱、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、まとまりのある創作表現を創意工夫する。 【思考・判断・表現】
- 無調音楽がもつ独特な響きに関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に創作の学習活動に取り組む。 【主体的に学習に取り組む態度】

### 3 生徒と題材

#### (1) 題材観

即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、音を音楽へと構成していく体験を通して、生徒同士が協働しながら探求する楽しさや喜びを味わわせたい。無調音楽の響きに触れることで、音楽に対する価値意識を広げ、音楽文化の豊かさに気付き、多様性を尊重する態度を育てたい。2年生の後期以降は、印象派や古典派、バロック音楽と比較したり関連付けることで、音楽の共通性と固有性を捉える学びに発展させる。

#### (2) 生徒観

男子13名、女子14名、計27名のクラスである。男女間のチームワークがよく、意欲的に学習に取り組もうとする雰囲気がある。音楽に対して興味・関心があり、能力が高い生徒もいる。1年生の創作の学習では、場面に合った音楽づくりに少人数グループで取り組み、思いや意図をもった表現活動ができていた。

#### (3) 指導観

生徒同士の主体的な対話を通じて、創作表現を探求する喜びを実感させたい。男子と女子のグループに分けてリーダーを置き、活発に音と意見を交流させ、全員が音楽づくりに参加できるよう促す。

音楽を形づくっている要素を焦点化することで、生徒が速度の変化や保持、緩急の対比、音の重なりが生み出すさまざま強弱が与える印象の違いに気付き、まとまりのある創作表現を創意工夫できるようにしたい。自分たちの思いや意図を、プリントやホワイトボードに記録して共有する活動を通して、他者にも分かるものになるような方法の工夫について考えるきっかけにする。

#### 4 全体計画（総時数2時間）

学習活動	評価規準 【A表現(3) アイ(イ)ウ】			時数
十二音技法を使ってトーンチャイムで音楽づくりをする。	知識・技能 トーンチャイムの音の重なり方や反復、変化、対照によって生み出される雰囲気と、自分たちが表したいイメージとの関わりを理解し、創意工夫を生かした表現で音楽をつくるために必要な、条件に沿った音の組合せの技能を身に付けています。	思考・判断・表現 速度、強弱、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、まとまりのある創作表現としてどのように表すかについて思いや意図をもっています。	主体的に学習に取り組む態度 無調音楽がもつ固有の響きに関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に創作の学習活動に取り組もうとしている。	2

#### 5 本時の計画（1／2）

##### (1) ねらい（本時の目標）

速度、強弱、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知識や技能を生かしてまとまりのある創作表現を工夫している。

【知識・理解】【思考・判断・表現】

##### (2) 展開

段階	生徒の活動	形態	教師の支援○と評価●（方法）
導入 (10分)	1 トーンチャイムで音列を作る。	全体	○即興で音を出すことを重視し、音楽を形づくっている要素（速度、強弱、テクスチュア）を焦点化する。
展開 (30分)	2 十二音技法の仕組みと音楽づくりの条件を確認する。	全体	○学習シートを配付し、ピアノで音を出しながら仕組みを解説する。 ○創作表現に必要な条件を提示する。  ①作品にタイトルを付ける ②右回転⇨左回転⇨右回転の順に演奏する ③速度と強弱を変化させながら即興的に音を出す ④和音を入れる ⑤リーダーとのコール&レスポンスを1回以上入れる ※裏面【音楽設計図】に、絵や図形などで記録しよう
	3 対話を通じてまとまりのある創作表現を工夫し、記譜する。	グループ	●速度、強弱、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知識や技能を生かしてまとまりのある創作表現を工夫している。（観察、演奏、学習シート）
まとめ (10分)	4 中間発表 5 振り返り	グループ 個人	○表現の工夫を音楽設計図にメモ・記録させる。 ○思いや意図を表現できたか確認させる。

#### 6 協議の視点

- (1) 他者との関わりを通して、協働的に創作表現する活動の充実が図られていたか。
- (2) 知覚したことと感受したことの関わりを基に、意図をもって表現する活動ができていたか。

## 7 分科協議会記録

日時：令和元年9月12日(木)

指導助言者：中央教育事務所指導班 田口 牧 指導主事

### (1) 授業者から

発問、間の取り方、説明の言葉の使い方に課題が見られた。また、段取りよく授業できたとは言い難かった。しかし、生徒が生き生きと楽しそうに授業に取り組んでくれたのでよかったです。終了5分前に中間発表に入りましたが、男女ともによい雰囲気で創作に取り組んでいて止めることができず、振り返りができなかったので、次の時間に振り返りをしてもらいました。授業の目標は達成できたように思う。男子は、3つの場面をつくる変化をつけていた。女子は曲の始まりに大作曲家と同じような工夫を取り入れていた。課題は、男子は音列(音の並び)をもう少し変えてみてもよかつたのではないか、女子は、やや単調で規則的になりすぎていた部分があった。思っていたよりも音楽的によい気付きにあふれた、面白い作品に辿り着くことができました。

### (2) 協議の視点の確認

- ① 他者との関わりを通して、協同的に創作表現する活動の充実が図られていたか。
- ② 知覚したこと感受したことの関わりを基に、意図をもって表現する活動ができていたか。

### (3) 協議

金：昨年担当していた生徒だが、とても成長を感じた。全員で輪になって創作していく、とても雰囲気がよかったです。男女で分かれた時、男子はリーダーがすぐに決まり、リーダーを中心に話し合いを行っていたが、女子は全員で意見を出しながら話し合っていた。女子は音の高低の違いに気付いて席替えをするなど、自分たちでポイントを見つけて、作曲活動を行っていました、すごいと思った。男子は曲のタイトル決めに時間がかかっていたが、コンセプトが決まってからは、ものすごい速さで曲を作り上げていました。創作の仕方の違いが男子と女子とで全然違っていて、そこに面白さを感じた。協議の視点にある、「協同的に創作表現する」という点に関して、力を合わせることによって新しいものを生み出すことができました。また、「知覚したこと、感受したこと」を丁寧に積み上げ、表現することができました。

大渕：この学年の生徒とは関わりがないが、楽しんで取り組んでいた姿が印象的だった。子どもたちの素直な好奇心が刺激されていた。男子と女子でやり方が違っていた点が面白かった。「音楽＝音を楽しむ」ということができました。

長谷部：生徒が生き生きと活動していました。純粋に創作することの楽しさを感じていたように思う。音楽に詳しい生徒が話すと、それにまた新たな意見が加わり、見ていて面白かったです。音楽の得意、不得意に関係なく、話し合いに参加できることがトーンチャイムの魅力ではないかと思った。1つの楽器で1つの曲を演奏するのではなく、みんなの音が合わさって曲ができる点がよいと思った。全員がタイミングよく音を出させていました。

金森：音の重なりを感じることができた授業だった。協同的な授業のアプローチとして、円を作るというところから入っていた点、円を作る際の指示の出し方が分かりやすかった。生徒たちが生き生きと楽しそうに取り組んでいた。男子と女子でアプローチが違っていたが、人との関わりを大事にしているように思えた。トーンチャイムを利用することで、協同的に創作、表現することができました。トーンチャイムと

いう教材と、体制づくりがこの授業を大成功に導いたと思う。男子と女子を混ぜてみても面白いかもしれない。

舟木：温かい雰囲気で授業ができていた。先生からの助言を基に、さらに自分たちの色を入れて創作活動を行っていた。普段人前に出たがらない生徒も、自分の意見をどんどん出していて、多くの生徒に活躍の場が与えられていた授業であった。意見をまとめる人、サポートする人が自然とできあがつていって、とてもよい雰囲気だった。

門間：テクスチャーという言葉が印象的であった。とても楽しそうな授業だった。話し合いがきちんとできる学年なので、ある程度方向性を示した上で、生徒に自由に取り組ませると、何とか工夫しながらゴールに辿り着くことができる。その機会がきちんと与えられていた。答えがないものをみんなでつくり上げる授業であったが、このようなことを他教科でも実践できたらよいのではないかと思った。

田口指導主事：男子と女子で曲のつくり方に違いが見られたが、小林先生であれば、タイトルを決めてから曲をつくる場合と、曲をつくってからタイトルを決める場合とどちらの方法をとるのか？

小林：どちらでもよいと思うが、音を出し、曲ができ上がっていってからタイトルをつけると思う。

門間：生徒がどのような感想をもっていたのか、知りたいのでいくつか紹介してほしい。

小林：・次の課題は音の前後の強弱のバランス。

- ・次回は和音と全体の流れを工夫したい。
- ・次々と変わる森の表情を表現できるよう、リズムを変えた。
- ・音を増やしたり、減らしたり、強弱をつけるなどたくさん工夫した。男子の演奏に関しては、曲のタイトルがとてもよかったです。静かな雰囲気と適当な音がうまくかみ合っていた。終わりがわかりづらかったので、次回はしっかりと音を切るようにしたい。思った通りの音量を出せるように練習したい。
- ・最後は間をあけてから、音を少しずつ出すようにしたい。
- ・人を増やしたり、減らしたりすることで音の強弱がうまくつくれるのではないか。またパーティーから帰って行く様子を音を減らしていくことで表せるのではないか、と思った。男子はリズムの変化を単調にならないよう、変則的に表していた。音をいかに弱く鳴らすかが次の課題である。

#### (4) 指導助言

音楽の授業は、合唱、楽器演奏がメインで、創作の授業は学習指導要領に位置付けられていながら、なかなか取り組むことができていないのが現状である。合唱、楽器演奏は楽譜に上がっているものを作り出す活動だが、創作は自分の思いを表現する活動であり、とても大事な要素がたくさん含まれている。

協議の視点①「他者との関わりを通して、協働的に創作表現する活動の充実が図られていたか。」に関しては、他教科であれば話合いをして終わりがちだが、音楽の場合は出た意見を基に全員が表現者になって演奏に生かすことができるので、誰も傍観者にならない。話合いで終わる授業であれば、傍観者が必ず出てきてしまうが、今日の授業は傍観者を一切出すことがなかった。

協議の視点②「知覚したことと感受したことの関わりを基に、意図をもって表現する活動ができていたか」という点に関しては、楽器を演奏することと、思いや意図をつなげることが大事であると思う。そのため、タイトルを決めてから創作活動に入った、男子のやり方の方がやりやすかったかもしれない。何を表現したいかによって、演奏の質が変わってくるのではないか、そのことが知覚したことと感受したことと関

わらせることにつながるのではないか、と思う。

指導案に設計図のことが記載されていたが、設計図を残しておくと子どもたちが、授業で何をやったかがすぐに分かってよい。次回の授業で書いていただきて、今後の授業に生かしてもらいたい。また、子どもたちが楽しんで取り組んでいたことが印象的である。今日の授業は、音楽は思っていたよりも簡単につくれるということを実感するよいきっかけになったと思う。知識・技能のところに「トーンチャイムの音の重なり方や反復、変化、対照によって生み出される雰囲気と、自分たちが表したいイメージと関わりを理解する」と書かれているが、学んでほしいことが多すぎると、生徒の学びがかえってぼやけてしまうのではないかと思う。もう少し厳選してもよいのではないかと思った。指導案の文末を「〇〇している」と記載している点がよかったです。このような表記の仕方をぜひ、意識していただきたい。今後も創作の授業をどんどん行って、子どもたちが楽しいと思える授業をつくってほしい。

## 第3学年 総合的な学習の時間 学習指導案

実施日 9月12日（木）4校時  
授業者 大渕 牧人（T1）  
工藤 道人（T2）  
小澤 寿子（T3）  
金 敬子（T4）  
場 所 中等部アリーナ

- 1 題材名 社会とのつながりを感じ、働くことの意義を考えよう
- 2 題材の目標 職場体験学習により、健全な職業観を育てるとともに、協働的な学習を通して社会とのつながりや働くことの意義について考えることができる。
- 3 題材と生徒

### (1) 題材観

8月末、3年生は2日間にわたる職場体験学習を実施した。これは見学や質問を主とする「職場訪問」ではなく、現場で働く人々と共に、実際に職業を体験することを主眼としたものである。「一人一職場」を基本とし、電話でのアポイントメント取りから依頼状書き、体験、礼状書きまですべて一人で行うものである。班単位でなく個人の活動とすることで、職場に臨む責任と自覚をもたせるためである。

実際に仕事を体験し、働く人々と接することで、生徒たちは職業について体感的に学び、自分の進路を考えるよい機会とすることができた。ここで学んだことの振り返りを学年全体で共有し、「社会とのつながりや働くことの意義」について話し合うことで、生徒一人一人が自分の進路に真剣に向き合い、健全な職業観の醸成を図るための場を設定する。

具体的には、パネルディスカッションと、それを受けた小グループごとの話合いを、学年集会の形式で企画する。パネリスト同士の討論を通して新たな課題を発見・探究・解決し（探求力）、グループでの話合いによって班員とともに新たな価値観を探究・創造する（協働力）学習の場とする。

### (2) 生徒観

男子40名、女子39名の学年である。素直で穏やかな生徒が多く、授業に臨む姿勢も真面目である。

事前調査によると、授業や学活で積極的に発言することに苦手意識をもつ生徒が51.3%と半数以上おり（「あまり得意でない」35.5%「苦手」15.8%）、その理由としては「人前で話すことが嫌い」が46.9%（学年全体では19.7%）を占める。グループでの発言について苦手意識をもつ生徒は27.6%（「あまり得意でない」18.4%「苦手」9.2%）であり、その理由である「人前で話すことが嫌い」は38.1%（学年全体では10.5%）となっている。

しかし、授業や学活での発言や質問については、ほとんどの生徒が「プラスの効果がある」と感じており（「自分自身の発言に対して」77.7%「他者の発言に対して」92.1%）、グループでの発言についても同様である（「自分自身の発言に対して」76.3%「他者の発言に対して」92.1%）。

以上から、授業での積極的な発言は苦手でも、グループでの発言であれば抵抗感は薄れると感じていることがわかる。しかも発言することの有用性については、授業での発言・グループでの発言とともに9割以上の生徒が認めている。そこで、グループでの話合いを活性化させることで、人前で話すことへの苦手意識や抵抗感を減らし、自信をもって発言する姿勢を伸ばしていくことができるはずである。

### (3) 指導観

学年全員がそれぞれ異なる職場での体験をしているため、パネリストの語る内容を自分自身に置き換えて考えることができる。各グループにおいても、職種の異なる一人一人の体験が「話すべき内容」「興味深く聞ける内容」となって、活発な話し合いが期待できる。

身近にある職業、その地域ならではの職業、興味・関心のある職業、進路選択の対象となりうる職業、などについて語り合うことで、健全な職業観を育み、将来の進路を考える契機とする。

パネルディスカッションの司会者とパネリストを事前に指名し、討論の進め方や、テーマに関して話す内容と方向性について指導しておく。グループについても、クラスに関係なく、職種の異なる体験をした4人編成を基本とし、各グループの司会者となる生徒を事前に指名・指導しておく。さらに、事前調査で「人前で話すことが嫌い」と答えた生徒を中心に、支援の必要な生徒をピックアップしておく。授業では、学年職員4人がTTを組み、各グループの話し合い活動が円滑に進むよう助言と支援を行う。

## 4 全体計画（総時数11時間）

	学習活動	評価規準	時数
1	・ガイダンスで職場体験学習のねらいと流れを確認する。	・職場体験学習の意義を理解している。	1
2	・職場リストを基に職場を探す。	・関心のある職種を中心に、積極的に職場を探している。	2
3	・職場にアポ取りの電話をかける。	・礼儀正しい言葉で、職場の担当者に分かりやすく要件を伝えている。	3
4	・当日の行動計画を作成する。	・交通手段を含め、無理のない計画を立てている。	1
5	・職場への依頼状を書く。	・時候のあいさつなど、マナーを確認して丁寧に書いている。	1

### （職場体験　二日間）

6	・新聞制作	・体験時の様子や担当者の話、体験を終えての感想などを分かりやすくまとめて書いている。	2
7	・職場体験学習から学んだことをテーマにパネルディスカッションを行う。 ・ディスカッションを踏まえて、フロアも小グループに分かれて話し合いを行う。 ・グループの代表が話し合いの結果や感想を発表する。	・テーマに沿って意見を述べ、相手とのやり取りの中で自分の考えを深めようとしている。  ・ディスカッションの流れを受け、グループの生徒と意見交換をして自分の考えを深めようとしている。  ・他グループの発表を聞き、自分の考えを深める参考としている。	1 本時

## 5 本時の計画（11／11）

### (1) ねらい（本時の目標）

パネルディスカッションやグループでの話し合いを通じて自分の考えを深め、職業についての意識を高めることができる。

### (2) 展開

段階	生徒の活動	学習形態	教師の支援	評価（方法）
導入 (3分)	1 本時のめあてと学習の流れを確認する。 (PowerPointでスクリーンに投影して示す)	集会隊形	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あらかじめ司会者と打ち合わせをしておく。</li> <li>・PC等の機材を準備しておく。</li> </ul>	
展開 (40分)	1 パネリストとテーマを確認する。  2 パネルディスカッションを聞く。  3 パネリストとフロアで質疑応答をする  4 グループに分かれ、パネルディスカッションを受けた話し合いをする。  5 各グループ代表からの報告や感想を聞く。	集会隊形  集会隊形  集会隊形  4人グループ  4人グループ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PC等の機材を準備しておく。</li> <li>・ディスカッションの流れを確認しておく。</li> <li>・建設的な意見交換ができるよう、パネリストへの助言をしておく。</li> <li>・話し合いの滞りそうなグループを幾つか事前に抽出しておき、教師4人で分担して助言や支援をする。</li> <li>・話し合いの様子を見て、発表するグループを選定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意見交換をしながら自分の考えを深めようとしている。（観察）</li> </ul>
まとめ (7分)	1 本時の振り返りを用紙に記入する。	個人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の様子を見て回り、振り返りが進まない生徒に適宜支援する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ディスカッションや話し合いを踏まえ、自分の考えを深めている。（観察、振り返り用紙）</li> </ul>

## 6 協議の視点

(1) 他者との関わりを通して、協働的に問題を解決する活動の充実が図られていたか。

(2) 事前調査を基にした、話し合いを深めるために最適なグループの編成は妥当であったか。

## 7 分科協議会記録

日時：9月12日（木）

指導助言者：中央教育事務所指導班 京野 真樹 指導主事

### (1) 授業者から

生徒たちに健全な職業観をもたせたいというねらいのもと、8月末の2日間で1人1人にアポ取りから依頼状・礼状等の作成を行わせた。そこで1人1人が感じたことを全体で話し合うことによって、仕事の意義や社会とのつながりを考えさせた。また、生徒たちの身近にあり、興味のある職業を体験できるようにし、1人1人が話すネタをもって話し合い活動に臨めるようにした。本校3年生の生徒たちは積極性が少し足りず、話し合いに苦手意識のある生徒が多い。特に人前で話すことが嫌いだと答える生徒は5人に1人の割合でいるが、話し合いの意義は認めているため、全体の場でパネルディスカッションをする授業を設定した。事前の意識調査に基づき、司会のできそうな生徒と話し合いの苦手な生徒を組み合わせたグループ編成にすることで均等な話し合い活動ができるように配慮した。

### (2) 研究協議

#### 【1班(1年部)から】

視点1について、活動場所がアリーナでよかったです。もう少し狭い場所であれば声の届き方も違い、全体での発表や生徒個人の考え方を述べる活動を通して生徒同士の話し合いの中から協働的に問題を解決する活動に繋がったのではないか。

視点2について、話し合い活動はもっと活発にできるのではないか。「働く意義(職業観や勤労観)」に最初から教師側が絞り込みすぎてしまっていたため、生徒が体験で感じてきた様々な思いを生かし切れず、同じような考え方になってしまったように感じた。生徒が感じたことを談笑等から始めていって深めるやり方があったのではないか。

#### 【2班(2年部)から】

視点2について、パネルディスカッションを全て生徒が行い、聞く側も生徒という活動は厳しいため、パネラーを工夫する必要がある。例えば職場体験先の方、保護者、まもなく進路選択を迎える高校3年生等、様々な人にパネラーになってもらうことで活発な意見が出てくるのではないか。

#### 【3年部から】

パネルディスカッションのやり方の工夫、聞き方の工夫、またはディベカッション等方法の工夫等が必要だと感じた。全体の場で発表すると同調する。もっと時間的な余裕があれば子どもたちがどのようなことを考えているのかすくい上げて準備をすることができたように思う。今回の授業に限らず、生徒の本音の部分をいかに引き出せるか、今後その工夫を考えていく必要がある。

### (3) 指導助言

#### 【パネルディスカッションの意義】

パネラーの4名がよいモデルを示してくれた。どういう理由で選抜されたのか理由を聞いてみたかった。パネルディスカッションの効果をより一層高めるためには、次の三点に留意することが大切である。

一点目は「パネラーの役割」である。ディスカッションというくらいであるから、立場や考えの違いが明らかになっていることが必須条件である。今日はグループ別の話し合いの焦点が「収入、やりがい、社会貢献」という価値観のうちどれを重視するかという話題のグループが多かった。これは、パネラー4人の話の

内容にこのような要素が盛り込まれていたため、聞き手側の意識付けに繋がったからである。このことから話題提供の視点の明確さが重要であったことが分かる。その上で誰をどのような理由でパネラーとして選抜するかが重要になってくる。

二点目は「テーマの設定」である。直接人との関わりのない裏方的な職業について社会との繋がりをよく述べている生徒がいた。ただ、テーマ設定がそうだった。もし、「私たちはこれから仕事を通じて社会とどのように繋がっていくか」というテーマ設定だとしたらもう少しこの生徒たちは悩んでいたかもしれない。今回は「社会とのつながりがある」ということが前提となったテーマ設定であった。生徒に問い合わせたり、考えさせたりするときに最も気を付けるべきことは、大人の主観や価値観、授業者の想定している結論を課題の中にうつかり示してしまってはいけないということがある。一步引いたところの課題設定が必要である。

三点目は「司会の役割」である。進行役の生徒が上手で、共通点の整理という点についても見事であった。これをどの生徒も、他の教科の授業でもできるようにしてあげることが大切である。異なる結論を示した生徒同士を意図的に指名し、対立点を明確にした進行を行った生徒もいてよかったです。一点、残念だったことはパネルの段階で進行役の生徒が大事だと思う点をかなり明確に述べてしまい、グループの話合い活動に影響を与えててしまったことである。パネルディスカッションをやる意味や、パネラーの発表のあとグループの話合い活動をなぜ設定しているのか等を、事前に司会者やパネリストへしっかりと伝えておくことが大切である。

#### 【学習過程の各段階において個人の物語をみると】

生徒の感想の中に、「本屋に入った瞬間、まだ挨拶も済ませていないのに、店員さん同士が支え合っていることがよく伝わってきた」とあった。こういった個人的な実感を述べる姿がよかったです。今回は体験の意義を共有するというパネルディスカッションであったが、全体の場(パネルディスカッション)で意義や概念のような大きなまとまりの話をすると、一人一人の物語が詐称されてしまって、個人的な意味として成立していたものが薄れてしまうため、パネルディスカッションをやる上で危険なことである。パネルをやる意味はもちろんあるが、個人的な物語性を失わせないような配慮が大切であり、これまでの単元の学習過程の中でそういった取組が重要である。そのチェックリストとして次の項目が挙げられる。まず、「職場を選択する」段階では、個人的な背景をもって選択している生徒は何人いるか、それはどのような内容か、またそういった背景は明確にはないが、稼げそうや好きなことが生かせそう等、何らかの先入観をもって職場を選択している生徒はどのくらいいるか等、職場選択の基準の背景を探っておくことは物語を捉える上で重要である。また、「職場体験に行く前の下調べ」も重要である。何も知らないまま職場に行くのは相手に失礼である。こんな理由から行きたかったんだという熱意を職場に伝えることが重要であり、その熱意次第で相手の対応が変わってくる。最低限のリサーチが重要であり、生徒がどんなこだわりを見付けたのかを捉えておくことが大切である。依頼状でもその熱意をどう伝えたのかがポイントとなってくる。「職場体験中」では、楽しかったこと以外にも心が折れそうになったこと(もう帰りたい、選ぶ職種を間違えた)等、ネガティブな体験を引き出しておくことも重要である。このパネルディスカッションの前には新聞制作の時間が設けられていた。新聞には自分が体験した個人的な職業体験としての物語が述べられていたか、さらに、新聞という媒体が適切であったのかを検討する必要がある。新聞にするのであれば、社会面記事のように書くのか、コラムのようにするのか、社説のようにするのか、連載小説のようにするのか等、自分の体験を一番よく綴れる文種は何なのかを選択させ、エピソードに応じて文種を考えさせることも大切である。

### 【探究的な学習を充実させる上で大切なこと】

一点目は「ややお互いを尊重しすぎている感じがすることである。様々な地域から来ているからこそ、忌憚のない意見をぶつけ合うことは総合的な学習の時間以外でも大切であり、特に今日は学級を超えた学年単位での活動であったため、より一層そういった意見交換が必要であった。本校は県内各地から生徒が集まっているため、例えば各地域に1日訪問してみる活動をしてみてはどうか。その地域に住んでいる人がホストになり、自分がオススメしたい場所や思い入れの場所を案内する。その後学校に戻り、訪問した生徒が自己紹介を行う。こういった活動を通してお互いが住んでいる地域や文化を知り、相手の地域についての理解を深めるという活動はどうだろうか。

二点目は、「学び直しの機会が充実しているか」ということである。生徒が鉄道局や空港の紹介をしていたが、公の場だからか、小学生向けの図鑑に載っているような、現地に行かずとも調べれば分かることの発表が多く、体験に行って個人的に感じた内容が薄れていた。実際にやってみると自分がもっていた予備知識や先入観と全く違っていたことがあったかもしれない。そういう時、「もう一度訪問できないか」と思う生徒がいるかもしれない。先方の都合もあるが、職場体験を1日に縮めて少し時間を置いて2回行く、または職場体験の日数を増やして2日と1日に分け、空けた期間の間に振り返ったり次の計画を立てたりするなど、「学び直す」機会を作ることが大切である。場合によっては課題そのものや訪問先そのものを見直してもよい。総合的な学習の時間の特質は、「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」がスパイラル状に繰り返されながら学びの質を高めることである。いつどこでも何の段階でも「学び直す」ことを保証する学習過程とし、今回のように一過性にしないことが大切である。

三点目は、「グローバルリーダーの育成」についてである。職業体験を軸とした総合的な学習の時間はかなり多くの地域で行われている。しかし、どの授業を拝見しても「企業の論理に子どもたちをどのようにフィットさせるのか」という、職場ではこういう人が求められているから自分もこういう人になりたいという論理に当てはめられてしまうことが残念である。あと十数年もすれば私たちが想像もしなかった職業が6割増えていると言われる時代である。この変化の激しい時代に、現在の企業の論理が子どもたちが実際に職業に就くときに成立するのかは不透明である。だからこそグローバルリーダーを育成しているのである。変化の激しい時代に、新しい価値を他と協働して創造していくような子どもを育てるため、企業の論理に自分をどうフィットさせるのかではなく、この企業に自分の持ち味を生かしてどう貢献できるかを考えさせる、つまり「自己理解を深めさせる」ということが本当のクリエイティブな学習である。クリエイティブの鍵は自己理解である。自己理解が深ければ深いほど、何度も失敗しても立ち上がる粘り強さや、新しいアイディアをどんどんと思い付くしなやかさが育っていくはずである。ぜひ皆さんで、「総合的な学習を通して育てるグローバルリーダーとはどのような人材か」を考えていってほしい。

# 第1学年G組 国語科 学習指導案

日 時 令和1年11月19日(火) 2校時  
授業者 樽田 雪子  
場 所 1年G組教室

## 1 単元名 唐代の詩文

### 2 単元の目標

(1) 漢詩の文学史的位置、形式、詩人について、基本的知識を身に付ける。

【知識・理解】

(2) 詩情を味わうとともに、漢詩と日本文学で共通する心情について読む。

【読むこと】

(3) 漢詩の内容を理解し、面白さを味わう。

【関心・意欲・態度】

## 3 教材

国語総合古典編(東京書籍)

唐代の詩文 唐詩 - 十首

## 4 本単元で育成しようとする「思考力・判断力・表現力」

複数の古典作品を読み、書かれた状況や心情を考えながら読み味わう力。

## 5 評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
漢詩の内容を理解し、面白さを味わおうとしている。	内容や表現の仕方について評価し、書き手の意図をとらえて、漢詩と古文の文章を関連づけて読むことができる。	漢詩のきまりを理解している。

## 6 生徒と単元

### (1) 《生徒の実態》

授業に対してはどの生徒も顔を上げて参加し、活発な発言がみられる。知的好奇心の旺盛を感じるが、その一方、授業の予習、ノートの取り方、課題への取り組みなどの地道な努力を怠りがちな生徒も複数いる。テクストに対して、大まかにとらえる力はあるものの、文法や単語などの基礎事項が定着していない。

### (2) 《本単元(教材)について》

「漢詩」は中国の古典でありながら、長い時間を経て日本の古典として定着しているものである。国語総合の教科書に採用されている近体詩から漢詩のきまりが明確で現代の高校生にも親しみやすい友情や望郷の念を扱った五言絶句、五言律詩、七言絶句、七言律詩を取り上げる。また、中国と日本に共通する心情を読み取るにふさわしい教材として、「月」を扱った漢詩と古今和歌集から阿倍仲麻呂の和歌を取り上げる。

(3) (1) (2) を受けた、本単元の指導について

複数の作品を読み、違いや共通する点に気付くようにさせる。対話を通して自らの気付きを深め言語表現するように援助する。

副教材「漢文必携」を使用して漢文の近体詩のきまりを理解させる。疑問点は副教材を利用して自ら調べる方法を具体的に示す。基本的なノート作りや発展的な自学力を身につけさせることを意図している。

7 全体計画（総時数4時間）

時	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価
1	・漢詩のきまりを知る。	・漢詩を正しく音読する。 ・五言絶句、七言絶句、五言律詩、七言律詩のきまりを知る。	・正しく音読できるように範読する。 ・漢文必携等の利用の仕方を助言する。	・漢詩を声を出して正しく音読しようとする。 【関・意・態】 (観察)
2	・絶句と律詩から状況や心情を読み取ることができる。	・対句、押韻等のきまりを理解しながら漢詩を読む。	・作者の視点に留意して読むよう助言する。	・対句、押韻等の表現の仕方を理解している。 【知識・理解】 (ノート)
3	・漢詩と和歌における「月」についての共通する認識を読み取ることができる。	・李白「静夜思」を読む。 ・古今和歌集阿倍仲麻呂「天の原…」の和歌を詠み「静夜思」との月についての共通する認識を読み取る。 ・白居易「八月十五日…」を読み、三首の「月」についての認識の共通点について考える。	・既習の知識を用いて読むように助言する。 ・複数の作品から読み取ったことや、他者の発言を総合的に考えるよう助言する。	・他の生徒との学び合いに積極的に参加し読み取ろうとしている。 【関・意・態】 (観察) ・「月」についての認識について読み取り、考えている。 【読むこと】 (観察)
4	・漢詩を読み、詩に表現された状況を理解することができる。	・異なるテーマの漢詩を読み、詩に表現された状況を理解する。 ・漢詩のリズムと内容を理解し、学習したものうち一つを暗唱する。	・詩にあらわされた内容に適した読み方をするように助言する。 ・漢詩のリズムを大切にし明瞭に大きな声で暗唱するよう助言する。	・詩に表現された状況に合った読み方で漢詩を暗唱している。 【読む】(発表)

## 8 本時の計画（本時 3／4 時間）

### (1) 本時のねらい

詩情を味わうとともに、漢詩と日本文学で共通する心情について読む。

【読むこと】

### (2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入	「静夜思」を音読し、漢詩のきまりを確認する。	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>近体詩のきまりを確認させる。</li> </ul>	
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>「静夜思」のおおよその意味をつかむ。</li> <li>古今和歌集 阿倍仲麻呂「天の原…」の歌を読む。</li> <li>二つの韻文における「月」が呼び起こす心情を考える。</li> <li>「月」が呼び起こす共通する心情が「望郷の念」であることに気づく。 話し合い</li> <li>七言律詩「八月十五日夜、禁中独直、対月憶元九」を読む。</li> <li>三つの韻文に共通する「月」の性質を考える。 話し合い</li> </ul>	個 ペア 個 ペア 全体 ペア 全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>作者が見ているものに留意させる。作者の気づき、視点の移動、思念の深まりに続いていることを理解させる。</li> <li>詞書き等から歌の成立を考えさせる。</li> <li>作者仲麻呂が見ているものに留意させる。</li> <li>二つの詩が、月をきっかけとして望郷の念を抱いていることに気づかせる。</li> <li>話し合いが進むように適宜助言する。</li> <li>「八月十五日夜…」を範読する。詩形、押韻、対句を確認させ、注を使いながら大まかな意味を伝える。</li> <li>作者白居易が見ているものに留意させる。</li> <li>月の性質「あたりを照らす」「鏡のよう」「遠くからでも見える」「離れた地域からでも同じものを見ている気持ちになる」などに気づかせる。</li> <li>対話の中で得た気づきを拾い上げ全体に共有するように発言させる。</li> </ul>	<p>【読むこと】 (観察)</p>
まとめ	本時の学習を振り返る。	個	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の学びを自分の言葉で整理するようにさせる。</li> </ul>	

## 9 研究協議会記録

### (1) 授業者から

本校の国語科では、これまで新聞記事の読み比べ、メディアからの情報の読み取り等、中高とも新指導要領の傾向を踏まえて「情報を相互に関連付ける」ことを狙いとした授業研究を継続して行ってきた。今回は国語総合の古典分野で、「唐詩」の単元を用い、古今和歌集を対比教材として、非連続的複数の教材の読み取りの授業を構築した。

短時間のうちに深い読解に向かわせるために、中学校で触れてきた漢詩を用い近体詩のきまりを復習することからはじめて本時につないだ。国語総合4単位という少ないコマ数の中での扱いにも工夫した単元であった。

国語科の教員の皆から意見をもらって作った授業である。

### (2) 参観者感想・意見

#### ●お忙しい中、研究授業を呈示していただきありがとうございました。

・先生と生徒との関係がとても良いことが一目でわかりました。生徒は規律ある学習態度でしたが、リラックスした雰囲気が感じられ、落ち着いて授業に参加していました。

・先生の問いかけ等にすぐ生徒が反応したり、頻繁に隣同士で意見を交わしたりすることに慣れていて、そういったやりとりを通してクラス全体に「みんなで学ぶ」という雰囲気が感じられました。日頃の指導のおかげだと思います。

・板書の構成、先生の立ち位置などは、ベテランらしく計算されていると感じました。

・教科書の漢詩を一つ扱うだけではなく、和歌や別の漢詩も同時に扱って中国と日本で共通する心情について考えさせようという取組を興味深く思いました。

・挑戦的な授業だっただけに、先生がこの時間にやろうと思ったこと、達成したいと思ったものができただろうか、という疑問が残ります。最終的に、先生が共通する心情を黒板に示しましたが、先生の意図した終わり方ではなかったのではないかと思います。

・授業の途中に何度か、「これは生徒に答えさせたいな」と思うことがありました。先生が質問をしても生徒の答えを待たずに先生が正解を言ってしまっている場面がありました。もう少しじっくり考えさせたい場面もありました。時間が気になっていたのでしょうか。活躍するのは「先生」でなく「生徒」に活躍の場をもっと与えてほしいと感じました。先生が答えを言ってしまうと、生徒は考えなくなります。

・生徒同士が意見を交換する場面がたくさん設けられていました。自分の考えを確認したり、教え合ったりしていてとても有効だと思いました。欲を言えば、生徒が「まずは一人で考え」て、考えをまとめ、それを友だちに「責任をもって伝える」(すなわち思考して、表現するような)場面が1回くらいあればよかったです、と思いました。生徒の「頭」を動かしたいものです。

・いずれにしても、題材を3つ扱い、チャレンジングな授業展開だったと思います。生徒にとっては分量が多くて大変だったかもしれません、今後も挑戦していただきたいと思いました。ありがとうございました。

●生徒を授業に引き込んでおり、生徒がよく情景や心情等を考えながら、詩歌の鑑賞をしていた。漢詩の情景を絵に描かせたり、動作をさせたりしながら、生徒が主体的に場面や視線の移動を捉え、心情に思いをめぐらせるのを促した。また、要所で生徒にペアで相談させ、ポイントを確認するとともに、既習事項と関連付け、学習内容の確認と定着を図った。

発問については、効果的であったが、答えを言うのが少し早い場面があり、もう少し考えさせ、「おいしいところ」は生徒に答えさせたい。助動詞に関する発問には反応が鈍かつたので、今後さらに復習が必要に思われた。

●樽田先生と生徒のラポールができており、信頼感と知的好奇心に満ちあふれた授業でした。普段の授業での様がきちんとしており、既習事項の確認などがテンポよくできる教室内の親和感が素敵でした。参観している私にも生徒のワクワク感が伝わってきました。

「見ているもの→思い、どこで」でどの教材も一貫して読解する手法や生徒にアクションをさせるなど分かりやすく、楽しむことができました。生徒もさすが南高生で、あれだけの情報量をこなして確実に読解を進めていくことができていました。ここ数年の国語科の研究授業の成果も踏まえた、多様な情報の中から読解をする…古典バージョンができたなと感じています。新課程にも十分対応できる内容の授業になっていました。

ただ、キーワード「月、故郷、望郷」や月の文学的普遍性を生徒に述べさせててもよかったです。特に「元九」の部分はもっと考えるポイントを絞り、生徒に考えさせる時間を与え、グルーピングしてもよかったですかなと思いました。

●お疲れ様でした。考查前の忙しい中で、ありがとうございました。

- ・テンポがよく、生徒を厭させない授業でした。
- ・「月」という言葉を生徒に答えさせる場面がもっとあつたらよかったです。
- ・私も樽田先生の指導案をなぞる形で授業をさせていただきましたが、「月が人と人をつなぐ」という定型は、生徒に対して説得力がありました。絢香の『三日月』も同型だという感想がでました。

### (3) 授業者感想

複数教材の読み取りという主テーマの他に、中国と日本の文学作品を扱うことで、「人間」の認識、感性の共通するもの、あるいは異なるものに思いを至らせたいという思いもあった。

「月」という分かりやすいモチーフを扱うことで、自分のお気に入りの詩やポップスなどを思い浮かべた生徒もいた。本時に関しては後半から取り上げた白居易の詩について、省略する予定の内容を扱ってしまい、生徒自身に考えさせる時間を奪ってしまったという大失態であった。今回の授業には教科を超えた多くの先生方に授業を見ていただいたことに感謝している。

(2) 《本単元について》

「農林水産業」の分野は「自然環境」の次に位置づけられている単元であり、様々な場面で、地形や気候について学習した知識を用いて考察していくことになる。地理の学習では「なぜそれがそこにあるのか」を考えることが重要であるが、その手法として自然的要因と社会的要因の両面からとらえる必要がある。これ以降の単元においてもこのとらえ方が求められるので、本単元でしっかりとその技能を身につけさせたい。

(3) 《(1) (2) を受けた、本単元の指導について》

農業に関する問い合わせに対して、まずは生徒一人一人が文章で解答を記入する。それぞれの解答をグループで持ち寄り、グループ内で対話的・協働的に検討したうえで、グループとしての解答を作成する。作成した解答は全体の前で発表し、全体で共有する。それぞれの解答について、一人一人が批判的かつ共感的に評価するようにしていきたい。

**7 全体計画 (総時数 9 時間)**

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準(評価の方法)
1 時限	・農業地域の形成要因について、自然的要因と社会的・文化的要因の両面が関わることを理解する。	・世界の諸地域で行われている農業になぜ違いが見られるのかを考える。	・日本の例を用いて、考えるヒントを与える。	・農業と自然環境との関連性を理解できたか。 【関心・意欲・態度】 【知識・理解】
2 ~ 5 時限	・世界の諸地域の農業について、その特徴を理解するとともに、それぞれの形成要因の違いや共通点を説明できる。	・前時に学習した知識を用いて、アジア、ヨーロッパ、新大陸における農業の形成要因について考える。	・各地域の自然的・社会的条件の違いをしつかり踏まえさせて考えさせる。	・各地域における農業の違いがどこから来ているか、考えることができたか。 【思考・判断・表現】 【知識・理解】 【地理的技能】
6 ~ 7 時限	・世界の林業や水産業について、各産業の特徴や地域、それぞれが抱える問題点について考えることができる。	・各産業の成立要因や各産業地域が持つ特徴について考える。	・ワークシートを用意し、地図を通して理解させる。	・各産業が抱える問題点について、多面的・多角的に考察できたか。 【思考・判断・表現】
8 時限	・世界の食料問題に対して、地球的視野でとらえることができる。	・食料問題の地域性をとらえる。 ・食料援助の適切なあり方について考える。	・先進国と途上国という観点や、日本の立場などを意識させる。	・世界が抱える食料問題に対して、日本はどのようなことができるか、考えることができたか。 【思考・判断・表現】
9 時限 : 本時	・農業分野のまとめとして、既習事項を元に、農業に関する問い合わせについて考え方表現することができる。	・グループワークを通して、より適切な解答を作り上げ、発表する。	・適切な問い合わせを用意する。 ・時間管理に注意する。	・よりよい解答を作成しようとしているか。 ・自分の考えをしっかりと発表できたか。 【関心・意欲・態度】 【思考・判断・表現】

# 地理歴史科 地理B 学習指導案

日 時 11月29日 3校時  
学 級 2年C組 28名  
場 所 2年C組教室  
授業者 佐藤 寿志

## 1 単元名 第2章 資源と産業 第1節 農林水産業

### 2 単元の目標

- (1) 農業地域（あるいは林業・水産業地域）の地域的特性や分布について関心を持つことができる。 【関心・意欲・態度】
- (2) 農業地域（あるいは林業・水産業地域）の形成要因について、自然的要因と社会的要因の両面から考察し、各地域の特徴を適切に表現できる。 【思考・判断・表現】
- (3) 世界の農業地域（あるいは林業・水産業地域）について理解するうえで、農林水産物の分布図や統計データなどを正確に読み取り、その特徴を把握できる。 【地理的技能】【知識・理解】

### 3 取り上げる教材

教 材：「新編 詳解地理B 改訂版」（二宮書店）

### 4 本単元で育成しようとする「思考力・判断力・表現力」

学習済みの地形や自然といった自然環境に関する知識・理解を下敷きに、各農業地域の形成がどのような条件の下でなされたのか考察し、説明することができる。

### 5 評価標準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	地理的技能	知識・理解
なぜその農業地域がそこにあるのかにということ関心を持ち、意欲的に探ろうとしている。	自然環境に関する知識を使い、農業地域の形成要因や分布などについて考察し、説明できる。	農業地域区分図や農作物の統計データなどを正確に読み取ることができる。	農業に関する用語を正しく理解し、それを適切に用いることができる。

### 6 生徒と単元

- (1) 《生徒の実態》 地理B選択者 男子13名 女子15名 計28名

理系の選択クラスで、うち21名は国際探究Ⅱ選択の生徒（D組）である。理系ということもあり、全般的に地理への関心は高いとは言えないが、学習への取り組む姿勢や授業態度はおおむね良好である。発問に対する反応は見られるが、自分の考えや意見を積極的に発表しようという面では物足りなさを感じる。今回の授業では、表現の元になる本人の考えを文章で書かせることから始めたい。

## 8 本時の計画（本時 9／9 時間）

### （1）本時の目標

これまで学習した農業に関する様々な事柄（問い合わせ）について、自分の言葉で文章として表現する。グループワークを通して、よりよい解答を作り上げる。他のグループの解答に対して批判的かつ共感的に評価できる。

### （2）学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入 7分	1. グループごとに割り当てられた問題に対し、まず個人で取り組み解答を作成する(各グループにつき2問)。	個人	<ul style="list-style-type: none"> <li>適切な問題を用意する。</li> <li>1つの問題につき、4グループで検討させる。</li> <li>ノートは見ても良いと指示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>意欲的に解答作成に取り組んでいるか 【関心・意欲・態度】 (個人のワークシート)</li> </ul>
展開 38分	2. グループ内で、個人が作成した解答を持ち寄り、お互いの良いところ、誤っているところなどを確認し合う。 3. グループの答えとして、グループ内で話し合いながらよりよい解答を作成する。 4. 作成した解答を黒板に書き発表する。 5. 黒板には1問につき2つの解答が提示されているので、どちらが良いか、全員で検討する。	グループ	<ul style="list-style-type: none"> <li>他のメンバーの解答を適切に評価するよう促す。</li> <li>どのような表現が適切で望ましいか考えさせる。</li> <li>大きな声で発表するよう促す。</li> <li>日本語の表現として正しいか、語句の使い方が適切かなど、良い解答の基準について考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>積極的にグループでの活動に関わることができたか。 【関心・意欲・態度】 (個人のワークシート)</li> <li>論理的で説得力のある解答が作成できたか。 【思考・判断・表現】 (グループの解答)</li> </ul>
まとめ 5分	6. 論理的でわかりやすい表現とはどのようなものか、学ぶ。	個人	<ul style="list-style-type: none"> <li>良いとされた解答について、改善点などを示す。</li> </ul>	

## 9 研究協議会記録

### (1) 授業者から

これまでの授業で習った事柄・知識を用いながら、与えられた間にに関して自分なりに文章表現する力を身に付けさせたい。そのため、グループでの話合いの前に、個人で解答を作る時間を設けた。個人の解答を持ち寄ってグループとしての解答を作成させたが、最初の個人の解答がかなりブラッシュアップされたようだ。ここにグループで取り組ませた成果の1つが見て取れる。また、他のグループの解答と見比べることで自分たちの解答に足りないところやよいところを明確に掴むことができたのではないか。時間がなくなってしまい、各解答についての授業者の解説が不十分になったところは次の時間に補いたい。

### (2) 参観者感想・意見

#### ○授業について

- ・各班とも話合いをリードする生徒が見られていた。
- ・どの班もメンバーの意見を傾聴する姿勢が印象的だった。
- ・授業者の指示を受けて、自分の意見を明確に述べる生徒が多くかった。
- ・自分の考えを書いてから協議したこと、グループ活動が活発になったように思う。
- ・導入の際、ノートを見ずに取り組ませてもよかつたのでは。
- ・授業者が全体の協議の様子を把握している点がよかつた。
- ・生徒に与えた問題の設定やその表現によって、授業の流れや生徒からの発言が変わってくるのではないかと思った。
- ・国語的な視点での表現と、地理的な視点での表現では何か違いがあるのかが気になった。
- ・評価規準にある「論理的で説得力のある解答」でない場合、どのように指導するのか。
- ・設問数を厳選して、もう少し話合いの時間を多くしてもよかつたように思う。
- ・自分が最初に書いた内容（表現）を修正する場面があつてもよかつた。

#### ○指導案について

- ・今年度の1か月前課題を意識したねらいが設定されていてよかつた。
- ・「全般的に地理への関心は高いとは言えない」の表現が気になった。
- ・評価規準の内容が適切であった。
- ・今回の授業を受けた生徒が具体的にどのようにになっているのかが分かるような表現があればいいのではないか。
- ・本時のねらいがどの程度達成されたのかを評価していく必要があるのではないか。

### (3) 授業者感想

生徒たちの自己評価を見ると、自分としての解答がしっかりと書けたという生徒は7割くらいであり、十分とは言えない。先生方からいただいた課題や問題点をクリアしながら、今後も、図表を読み解いたり、それをしっかりととした文章で表現したりする力の育成に焦点を当てるような授業を試みていきたい。

# 保健体育科学習指導案

日 時 令和2年1月28日（火）4校時

会 場 第一体育館

授業者 佐藤雄大 金森康臣

対 象 2年A組、2年D組男子 44名

## 1 単元名

球技 バスケットボール（ゴール型）

## 2 単元の目標

### 【技能】

ゴール型では、状況に応じたボール操作と空間を埋めるなどの連携した動きによって空間への侵入などから攻防を展開する

### 【態度】

球技に主体的に取り組むとともに、フェアなプレイを大事にしようすること、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、合意形成に貢献しようとすることなどや、健康・安全を確保することができるようとする。

### 【知識・思考・判断】

技術などの名称や行い方や、体力の高め方、課題解決の方法、競技会の仕方などを理解しチームや自己の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫出来るようにする。

## 3 単元と生徒

### （1）単元観

球技の単元では、作戦や状況に応じた技能や仲間と連携した動きを高めてゲームが展開出来るようになることが求められる。そのため、勝敗を競う楽しさや喜びを深く味わうとともに、学習に主体的に取り組み、フェアなプレイを大切にしようとすることや仲間を尊重し、合意形成に貢献することに意欲を持ち、技術の名称や行い方、課題解決の方法などを理解し、チームや自己の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫することが大切である。

### （2）生徒観

2AD男子44名

クラスの雰囲気は明るく、意欲的に活動しようとする生徒が多い。また、課題に対しての取り掛かりや、指示に対しての反応、行動の切り替えの速さなど集中力が高いクラスである。

ゲームの際も勝敗を競い合うことを楽しむことができ、仲間を尊重しながら協力してバスケットボールに取り組むことが出来る。

### （3）指導観

グループ練習等の学び合いを通して課題解決を目指す。運動部や経験者がリーダー的な役割を担い、互いに高め合えるような環境を設定することでリーダー的資質を高めていく。

#### 4 単元の評価基準

関心・意欲・態度 (A)	思考、判断、表現 (B)	運動の技能 (C)	知識、理解 (D)
・球技に主体的に取り組むとともに、フェアプレイを大切にしようとしていること、自己の責任を果たそうとしていることなどや、健康・安全を確保して学習に取り組もうとしている。	・チームや自己の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫している。	・球技の楽しさや喜びを味わうことが出来るよう、球技の特性に応じて、ゲームを開拓するための作戦に応じた技能や仲間と連携した動きを身につけていく。	・技術の名称や行い方、体力の高め方、課題解決の方法、競技会の仕方を理解している。

#### 5 指導の計画…バスケットボール：13時間

- ・ボール操作 5時間
- ・ボールを持たないときの動き 6時間（本時11／13）
- ・ゲーム（競技会） 2時間

#### 6 本時の計画（11／13）

(1) ねらい 仲間と連携した動きによって空間への侵入などから攻防を開拓する。

(2) 展開

過程	学習活動	指導内容及び指導上の留意点	評価
導入 (7分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ、出欠確認</li> <li>・本時の確認</li> <li>・準備運動、体操</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の流れを説明する。</li> <li>・体育館2周、体操</li> </ul>	
展開 (38分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チーム練習① (シュート練習)</li> <li>・チーム練習② 3 on 3 ハーフコート</li> <li>・チーム練習③</li> <li>・ゲーム</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正確なシュートができるように助言をする。</li> <li>・状況に応じたシュートが出来るようにシュート位置を変化させる。</li> <li>・連携した動きで空間を埋めたり、侵入したりするイメージをつかませる。</li> <li>・②の条件が変わった場合どのようにして、攻防を開拓するかグループで考えさせる。</li> </ul>	<p>(A) 自己の責任を果たそうとしているか。（観察）</p> <p>(A) 課題解決のアイディアを伝え合ったりしているか。（観察）</p>
まとめ (5分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・後片付け</li> <li>・本時のまとめ</li> <li>・あいさつ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時のねらいを達成できたか話し合う。</li> <li>・話し合った内容を発表する</li> </ul>	<p>(B) 取り組んできたことを検証しているか。（観察）</p>

「評価の観点」 A：関心・意欲・態度 B：思考・判断・表現 C：運動の技能 D：知識・理解

## 7 教科協議会記録

### (1) 授業者から

本校の保健体育科では、これまで生徒が自ら考え、他者の意見や感情に配慮しながら自己やグループの課題を解決していく内容の授業を行ってきた。また、SGHとの関連からプレゼンテーション能力を伸ばすために運動時間を確保しつつ、言語活動を充実させるようにしてきた。

今回の授業では、仲間と連携した動きによって空間への侵入などから攻防を展開するために、グループに分かれて個人の技能の練習から空間を埋めたり、空間に侵入したりする動きの練習をした。その際、グループ活動が活発になるように工夫した。具体的には、グループ練習②で、決められた動きをする場を設定し、バスケットボールが苦手な生徒も仲間と連携した動きをイメージしやすくした。これは、グループ練習③でアイディアが出やすくなることを狙ったものである。そして、練習した動きを実践するためにゲームの時間を設定し、終了後に振り返るために生徒同士の話合いの時間を設けた。

### (2) 参観者感想・意見

#### ○授業について

- ・あらかじめ、目標や進め方が示されており、分かりやすかった。
- ・先生の声かけもあり、練習が進むにつれて進化が見られた。
- ・途中の先生の指示が短く適切でよかったです。
- ・3 on 3 の途中でも生徒同士の声の掛け合いが見られた。
- ・3 on 3 をやったことで活動に参加しない生徒がいないことにつながった。
- ・みんなよく動いていた。
- ・最後に話し合せたことで、次の課題が明確になった。
- ・状況に応じたボール操作のためにパス練習やドリブル練習を取り入れた方がいいのではないか。
- ・チーム練習①のシュート練習が②、③にどのようにつながっていくのか、②、③でよりよい動きができるようにもう一工夫必要ではないか。たとえば 2 on 1、3 on 2 など。
- ・生徒に学習した知識や習得した技能、動きなどを明確にし、振り返りを充実させるために授業ノート等を準備したらよりよくなるのではないか。
- ・グループ作成は授業の中でも非常に重要な部分。A組とD組で人数の偏りが見られたが、意図はあるのか。→同じクラスの方が声かけや話合いがスムーズに行われていたので、今回の活動ではクラスごとのグループ編成にした。
- ・体操を先生はしないのか。

#### ○指導案について

- ・この授業では特にどの目標を重視するのか、目標を精選した方がよい。
- ・単元の評価基準についても、特に何を重視するか精選し、より明確にした方がよい。
- ・ねらいについて、達成できたかどうかを評価しなければならない。
- ・生徒が話し合った内容を指導者が評価する必要がある。
- ・空間をつくりだすというのは入学年次の内容ではないのか。→訂正済み

### (3) 授業者感想

仲間と連携した動きで攻防を展開することは、バスケットボールの醍醐味であり、個々の技能もある程度必要とされる部分である。個々の能力に差があるので、経験者や運動部が技術や体力の違いに配慮してボールを運んだり、まわしたりすることが一つの鍵であった。グループ練習では、お互いに声を掛け合い、課題解決する姿がよく見られてよかったです。しかし、ゲームになると、5対5、4対5など練習していくなかったシチュエーションで仲間と連携した動きができず、速攻での得点や個人技が多く見られた。最後の話合いの中でも、実際のゲームになると「速攻」と「個人技」に頼ることが多く、落ち着いて攻防を展開できなかったという感想が出ていた。

今後の課題としては、個々の技術を向上させること、仲間と連携した動き、ボールを持たないときの動きに加えてチームとしての作戦をしっかりと立てさせることが重要だと感じた。引き続き、グループ学習や言語活動を取り入れ、バスケットボールの魅力や楽しさにより一層触れられるよう指導を続けていきたい。

# 今年度のクリエイティブサイエンスを振り返って

教諭 工 藤 道 人

## 1 はじめに

クリエイティブサイエンス(以下CS)は本校独自の教科として、「日常生活や社会との関わりなどから数学や理科に関する課題を見付け、探究的な学習のプロセスを通して課題の解決に取り組むことで、数学や理科への関心を高めるとともに、科学的な思考力や表現力を養う」ことをねらいに、中3生が週1時間行っている。本校1期生が3年生となった昨年度から実施され、今年度は2年目となる。

## 2 昨年度の反省から

昨年度CSを実施した中で、大きく次の課題が挙げられた。

- ① 中間発表会・校内発表会の時期について
- ② 指導体制の見直しについて
- ③ 生徒の発表の仕方や資料の作り方、研究のまとめ方について

①については、昨年度が実施初年度であったため、手探りの中で実施の時期を決定したが、中間発表会と校内発表会の間隔が短く、中間発表を通して新たに見付かった課題や疑問を深く追究できなかつたり、校内発表会に向けて準備時間が足りなかつたりといった課題が挙がっていた。

②については、一人の教員に対する担当する生徒が多いこと、高3生に関わっている教員の負担が大きいこと、時間がかかる実験が必要な分野においては水曜日5校時以降も引き続き行わせたいが、時程の関係や教員の授業の関係でうまくいかない等の課題が挙がっていた。

③については、発表資料となるポスターやスライドの作り方についての生徒への事前指導が足りなく、改善点が多く見られたことや、発表や質疑に対しての応答の仕方等の練習が足りなかつたといった課題が挙がっていた。

## 3 昨年度の反省を受けて

今年度CSを実施するにあたり、昨年度の基本的な考え方や評価の仕方等を踏襲しながらも反省にあつた点を考慮し、次のように進めていくことを年度初めに担当者と確認し、共通理解を図った。

- ・3クラス同時展開で、学級を解体して水曜日5校時に実施する。また、教務部や学年部と相談して、必要に応じて5校時終了後も活動できるようにする。
- ・生徒は4～5人グループで課題研究に取り組む。一教員あたり2グループ程度とし、課題研究に対する指導を行う。
- ・ガイダンス等、79人が同時に同じ内容を行うときは、中等部棟大教室等79人が入る教室または、アリーナを使用する。また、グループごとに課題研究を行うときは、中3の3教室、中等部理科室、物理実験室、化学実験室、生物実験室、地学実験室、高校PC室、中等部PC室を用いる。
- ・中間発表会を10月中に行い、中間発表会終了後から校内発表会までの期間を昨年度より長くすることで、課題追究や発表に向けての時間を確保する。また、発表会に向けて、プレゼンの仕方についての指導の充実を図っていく。

- ・一年間の課題研究のまとめとして、5～10枚程度(A4)のレポートにまとめる。
- ・評価については、前期と後期の2回、観点別評価を行い、通年で評定を出す。評価の観点として①数学や理科に関する課題を設定し、課題の解決に向けて意欲的に取り組んでいるか【数理探究への関心・意欲・態度】、②探究的な学習を通して、事象を論理的・実証的・客観的に考察したり、表現したりするなど数理的な見方や考え方を身に付けているか【数理的な思考・表現】の2つとする。

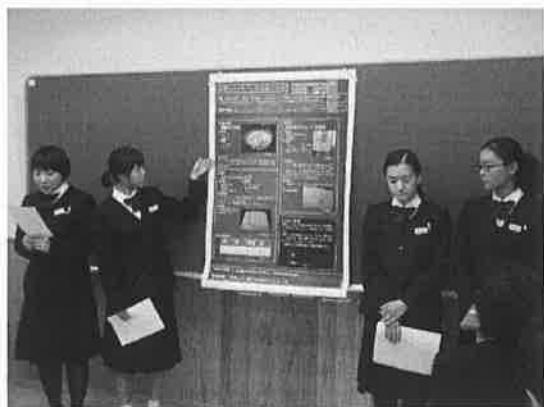
#### 4 今年度のCSの実際

生徒の課題研究に対する指導は、数学分野が4人、理科分野6人の計10人が担当した。また、中等部の数学主任と理科主任は、CSの全体計画やガイダンス・発表会等の企画・運営にあたるとともに課題研究のサポートを行った。「分野希望調査」を中2年時に行って、それを基に生徒の学習する分野を決定し、4月の授業をスムーズに入れるようにした。最終的には数学10、理科11(物理2、化学5、生物2、地学2)のグループに分かれた。

4月に全体で課題研究の進め方についてのガイダンスを行い、その後、各分野ごとに分かれてグループ編成、課題、テーマの設定を行った。昨年度とは違い、教員側である程度一年間の見通しが立っているため、スムーズに授業を開始できたことに加え、生徒は昨年度の校内発表会をみているためか、どんなことを研究したいかについて具体的な考えをもってスタートを切れた生徒が多くいた。

5月以降は、グループごとの探究活動となった。担当教員の指導を受けながら実験や観察を行ったり、参考となる文献を探したりといった活動を熱心に行っていた。また、CSの授業のない日や長期休業中も担当教員の指導を受けたり、研究を行ったりする生徒も見られた。特に、数学分野のグループには夏季休業中の課題としてMATHコン(=算数・数学の自由研究 主催:一般財団法人理数教育研究所)に向けてのレポート作成を夏季休業中の課題とし応募した。そのうち、一グループが奨励賞を受賞した。

10月31日に中間発表会を実施した。発表形式をポスター発表とし、生徒はA4サイズ1枚の発表資料を作成した。それをAOサイズに拡大印刷し、発表資料とした。発表時間は10分以内とし、その後質疑応答の時間を設けた。これまでの研究成果を堂々と発表する生徒とともに、それに応えるように、参観者からも感想や質問、アドバイスなどたくさん出され、充実した発表会であった。発表を聞いた生徒はアドバイスカードを記入し、中間発表会終了後に交換し、1月に行われる校内発表会への参考としていた。



中間発表会後は、1月の校内発表会に向けて、さらに研究を深めたり、再検証したりといった活動が中心となつた。昨年度より、中間発表会の時期が早かったため、時間をかけて研究することができた。しかし、校内発表会の発表準備も並行して行うため、時間が十分であったかについては検討が必要である。

1月21日に校内発表会を実施した。中3生の保護者、中1・2生のほか、高1・3生にも参観していただいた。発表は、プレゼンテーション・ソフト(パワーポイント)で作った発表資料を用いて行った。発表時間は10分、質疑応答は5分とした。原稿を見ずに身振り手振りを交えて発表する生徒、文献や資料、実験データを基に説得力のある発表をしたグループ、質問にも慌てることなく、丁寧に応答する生徒など、一年間の学習、研究を通して成長した多くの生徒の姿があった。また、参観者からも質問のほか、感想や今後の探究活動に対するアドバイスをいただき、生徒たちは達成感を味わい、今後の学習への意欲をさ

らに喚起できた。

校内発表会後は、一年間の課題研究の振り返りと、高校での探究活動への意欲の持続をねらいとして、まとめのレポート作成を行った。このレポートには昨年度同様、「研究の動機」「研究の内容と成果」「まとめ」「今後の課題と反省」「参考文献・資料」という内容を必ず入れることを指導した。

## 5 成果と課題

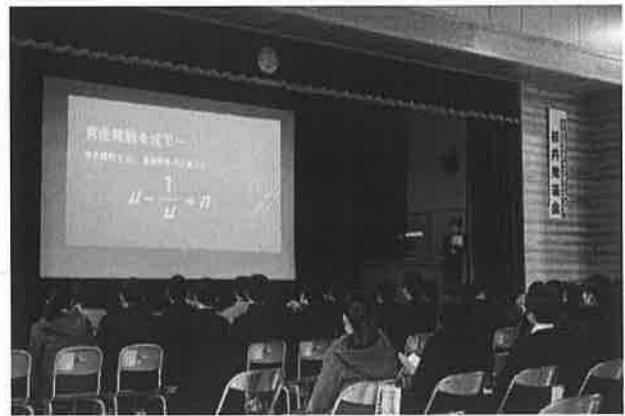
今年度のCSを振り返って、以下のような成果と課題があったと考える。

### 【成果】

○課題設定で十分時間をかけて考えさせたり話し合せたりさせ、また、担当教員が適切な助言や指導を行ったことで、生徒の研究に対する意識が高まり、意欲的に研究を進める生徒が多くいた。また、課題追究の過程で、新たな疑問が生まれたり、再検証が必要であると気付いたりなど、探究活動の楽しさや奥深さを知ることができた。

○中間発表会と校内発表会の2回の発表会により、生徒の研究成果をたくさんの方々に披露することができた。校内発表会を参観した保護者からは、「興味深い内容が多く、よく研究されている」「中学生の時からこのような体験をさせていただけるのはよい」といった好意的な感想も寄せられた。

○CS実施2年目であったが、たくさんの先生方の指導と協力のおかげで、実りある活動ができた。また、CSの一年間の流れや進め方を理解して指導に当たつていただいた結果、スムーズに実施することができた。



### 【課題】

▲4～5人グループで課題研究に取り組むことを原則にしたが、研究したい内容や追究したい課題の相違、人間関係等によってグループ編成がうまくいかないこともあった。その結果、課題追究する時期に差が生まれたり、少人数で研究を進めなければならなかつたりということがあった。

▲担当教員の負担が大きい。放課後や長期休業中も指導していただいた先生もおられ、感謝申し上げたい。ただ、CS以外にたくさん授業時数がある先生やいろいろな分掌をもっている先生に、あまりにも負担がかかりすぎでは、今後CSが存続できるのかということにもなりかねない。

## 大学入学共通テストに向けて

昨年度に引き続き、高校では大学入学共通テストで予想される傾向を取り入れた、定期考查問題の作問を試みた。以下、各教科・科目の実践例を掲載する。

教科：国語　　科目：現代文B　　対象：第3学年

### 問題省略

#### 1. 出題の意図

共通テストの新出題傾向でよく見られる、テキストについての複数の話者の意見を読み、適当な内容のものを選択する、という形式の出題である。問題本文の内容の的確な読み取りができていることと、選択肢の各意見の内容と比較対照させて考え選択する思考力を試される。また、選択肢の意見内容によって、文章の表現・構成の工夫についても的確に把握する力を問うこともできると考えた。

#### 2. 実施した結果の分析

比較的よく正答できていたが、人物設定や表現の特徴を捉えることができず、不正解となった答案もあり、基本となる小説の内容読解力の不足が見受けられた。

#### 3. 今後の課題

考查の復習において、選択肢の内容チェックをしながら小説本文の内容の読み取り確認をする。読解演習を多く積み、この形式の出題に慣れることと、表現の特徴の叙述内容を的確に理解する練習を積む。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

学習した教科書の本文を問題文〔I〕とし、〔II〕に初見の別の著者による文章を挙げ、その内容を問う記述問題で読解力・表現力を、〔I〕・〔II〕の複数のテキストを比較・関連づけして読み取る読解力・思考力を、はかることをそれぞれ意図した。

### 2. 実施した結果の分析

(1) の理由の記述については、時間不足であったからか解答できなかつたものも多かったが、成績上位層の生徒は解答の核をとらえて述べることができていた。(2) の選択問題では、正答イに類似したアを選択する者も少なからず見られた。

### 3. 今後の課題

問題文を速く読み、文章のテーマを把握する練習が必要である。また、記述の解答に必要なキーワードを見極める力、論理的に理由を説明・叙述表現できる力の向上を意識して指導にあたりたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

漢文を読解した内容を、指定された字数でまとめ叙述する。比較的短い字数で、的確に主張の核を捉えて表現することを求めた。

### 2. 実施した結果の分析

「清廉潔白を貫く」「世俗の不正に屈しない」という主張は捉えているものの、比喩のままの叙述で「不正を働くより魚のえさになろう（死んだほうがよい）」と答える者が少なからず見られた。

### 3. 今後の課題

記述問題の解答の仕方について、文章の要旨や主張を短い字数で述べる際の、より一般化・抽象化してまとめる練習が必要である。独りよがりの解答にならないよう、自己採点や、ペアでの相互添削などで、自分の解答を客観的に採点・添削をする活動を通じて記述力を高めたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

提示された文章や資料等を読み解き、必要な情報を組み合わせて思考・判断する力をはかった。

### 2. 実施した結果の分析

問題慣れしておらず、先に設問を読み必要なポイントをつかんでおくといった臨機応変な対応ができなかった生徒は、各資料を読み込むのに時間を取りられてしまったようである。

### 3. 今後の課題

問題演習や考查、テストを利用して複数資料を組み合わせた問題の解答に慣れておくことが必要である。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

マーク式問題における新たな解答形式の導入を意識し、当てはまる選択肢を全て選択させる問題を通して知識の正確性や定着度をはかった。

### 2. 実施した結果の分析

一つは答えられるが二つ目が答えられない、または間違っているという回答が目立った。重要語を取り上げた際、周辺の語をあわせて覚えるという意識の差が表れた。

### 3. 今後の課題

今後とも授業で繰り返し重要語の確認をしていくとともに、課題等を用いて基礎基本の確実な定着をはかる必要がある。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

古文を題材とし、文章を読み取る力、添付資料を的確に読み取って得られた情報を解釈する力をはかった。また、言語活動の過程を重視するという共通テストの方針に沿う出題とした。

文章の文体に合わせて、用いる資料（この場合は古語辞典と漢和辞典）を選択し、必要な箇所を読む、という過程を経ると正解にたどり着く。

### 2. 実施した結果の分析

問六は、添付資料として古語辞典と漢和辞典を示したため、出題側としては解答をそのまま提示している感覚でもあったが、意外にも正答率は低かった（大問全体では 11.7 点/20 点満点）。

電子辞書を使用する生徒が大多数であり、画面をスクロールして情報を読み取ることに慣れた生徒にとっては、紙面から必要な項目を探すことが難しかったのかもしれない。また、古文の現代語訳は暗記事項であるという感覚の生徒は意外と多いかもしれない。

### 3. 今後の課題

引き続き、資料や図説、複数の題材に慣れさせていく必要がある。プレテストでは、添付資料によって与えられる情報量は大きくても、そのすべてが問題を解くのに必要なわけではなかった。必要な情報をねらって資料を読む姿勢を身につけさせたい。

## 問題省略

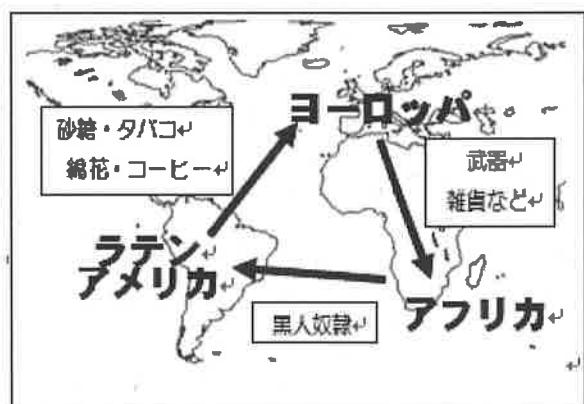
### 1. 出題の意図

17～18世紀のヨーロッパ諸国の海外進出と貿易体制が、ヨーロッパ人の生活にもたらした変化について類推し、大西洋三角貿易の構造について理解できているかを、地図を用いて問う出題であった。共通テストにおいて問われる資質・能力では、「諸地域世界の接触や交流などが歴史的事象にどのように作用したのかを明らかにすることができる（事象相互のつながり）」にあたる。

### 2. 実施した結果の分析

40名の受験者中、正答できたのは5名のみであった。三角貿易の構造について、授業では右図の空欄補充のような問題であれば正答できる生徒が多かったことを考えれば、非常に残念な結果であった。

砂糖やタバコなどの商品作物が植民地のラテンアメリカで栽培され、ヨーロッパ人の生活を潤していくという近世以降の世界の構造について、マクロな視点をもった理解が不十分であったといえる。



### 3. 今後の課題

地図や図版、統計資料等を用いて、具体的なイメージを持った理解を導く指導がさらに必要である。

## 問題省略

### 1. 出題

センター試験日本史Bの2019年追試験の第2問の問6を改変したものである。マーク式の問題を「文章で説明させる」ことによって、答えの番号を暗記して理解したと錯覚するのではなく、思考力の向上をめざしたいと考えた。

### 2. 実施した結果の分析

実際には定期考査では出題できず、センターの過去問演習に本格的に入ってまもなくの文系クラスの授業時に、グループで話し合わせ、その様子から1人の生徒（今回のセンター試験の自己採点71点）に口頭で発表させ、文章による的確な発表ができた。

### 3. 今後の課題

次年度からの「共通テスト」では、マーク式ではあっても、これまで以上に思考力が問われることが予想される。また、試行テストや模試の問題を見ても、歴史的思考力を問うよりも、複雑な問題文から、いかに的確に「課題」を見出して解答を作成するかという、「国語力の向上」も意識して取り組む必要があると考える。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

初見の図表に対して、これまで習った知識を用いながら考察する力をみる。

### 2. 実施した結果の分析

既習事項として、アフリカのOPEC加盟国や南アフリカ=BRICS、中南アフリカの低い経済レベルといったことがあげられる。特にOPEC加盟国は必須であることから、「原油産出量」については正しく判断してもらいたいところである。

正答率は50.6%であり、6割を割ってしまった。また、「原油産出量」を正しく判断できなかつた解答が約13%もあり、残念な結果となった。

### 3. 今後の課題

基本事項の定着がまだ不十分である。センター試験の地理では6択の問題が多く出題され、新テストでも継続すると思われるが、3つの事柄のうち1つでも分かっていれば選択肢は2つに絞れる。基礎基本の習得は新テストにおいても変わらず重要である。また、日頃の授業から、「なぜそうなるのか」ということを常に意識させるような取り組みをしていかなければならない。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

近代ヨーロッパ史の展開についての理解。

地図資料の読み取り、歴史的事象を時系列的にとらえる考察力を問う。

### 2. 実施した結果の分析

集計対象とした83名中、完全解答は56名(67.5%)。4枚の地図から1枚を選ばせる問題に比べ難易度が低いこと、他の大問の出題文から解答のヒントを得られる部分もあることを考慮し、正答率は70%以上を想定していたが、そこまでは至らなかった。

### 3. 今後の課題

地域や時代を区切った定期考查の出題には対応できる基礎力を持つ生徒が多い。資料・史料を用いた、同時代史の思考・判断力を問われる問題に対応できる力を育てたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

図中の言語で誘導しながら、知識の整理をしながら論理的に表現できているのかを問うた。

### 2. 実施した結果の分析

正答率は9割であった。それでも論理的な思考力に欠く生徒がいる。

### 3. 今後の課題

たいていの指導者がスルーしがちな図である。授業や考查の場面では次のような主題を考えられる。

1. 日本のJAがもつ組織のうち、この図にないものを複数あげる。
2. これから日本の農業はどうあるべきか、の図を用いて考えを述べる。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

1940年代から1970年代にかけてのアメリカの対外関係を考察させ、資料の年代を判断させる。  
ベトナム反戦運動についての理解を問う。

### 2. 実施した結果の分析

集計対象とした37名中、正解は10名。誤答はアを選択し、第二次世界大戦の反戦運動と説明したもののが多かった。冷戦の展開を一つ一つの事象としては覚えていても、大まかな年代とともに流れとして把握するところまではなかなかできていないようであった。

### 3. 今後の課題

歴史的背景を知ることで、現代の国際情勢の理解に役立つような内容を意識しているが、資料の読み取りなどを授業の中で十分に取り上げられずにいる。資料を用いた出題を増やしていくたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

史料分析能力と地理的考察力を図る。ポーツマス条約でA地点（長春）以南の満鉄の利権が日本に認められたことで、鉄道交通の要所でもある奉天の地が確実に日本の影響下に置かれることになった。このことに気づくかどうかによって、思考力を判断したい。

### 2. 実施した結果の分析

- i の地名を答えられた者：2名（9人中）
- ii の意義を説明できた者：0名（9人中）

### 3. 今後の課題

課題等の提出率は非常に良好で、いわゆる受験科目ではない日本史Aという科目に対する取り組みの姿勢もよい。定期考査の出題範囲の問題等の演習も各自がしっかりと行っている。

しかし、思考力を問う応用問題（問題集にない出題）になると、ほとんど答えられないという残念な結果であった。世界史Bへの補強にもなると考えての出題であったが、歴史的（社会科学的）思考力を育てきれていないことが判明した。

次年度以降のB科目での反省材料としている。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

荀子の思想についての理解

各先生の教育方針・内容を読み取り、荀子の思想の本質を選択する。

### 2. 実施した結果の分析

解答：エ (ア：孟子 イ：老荘思想 ウ：ソクラテス)

2点

	人数（割合）		
	全体（102）	SGHクラス（36）	非 SGH クラス（66）
ア	10 (9.8 %)	2 (5.6 %)	8 (12.1 %)
イ	13 (12.7 %)	5 (13.9 %)	8 (12.1 %)
ウ	12 (11.7 %)	4 (11.1 %)	8 (12.1 %)
エ	67 (65.7 %)	25 (69.4 %)	42 (63.6 %)
無回答	0 (0.0 %)	0 (0.0 %)	0 (0.0 %)

※ SGH クラスでは、荀子（性悪説）と対極にある孟子（性善説）を選択する生徒数（割合）が少なかった。一方の非 SGH クラスでは、誤答を選択する生徒数（割合）が一定であった。

### 3. 今後の課題

基本的な事項を問う問題として 75% 程度の正答率を設定していたが、そこまでは至らなかった。今後は各思想家の思想を整理する場面を設けていきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

現代の諸課題に関する資料の内容を読み取り、正誤を判断することができるか。

### 2. 実施した結果の分析

	ア (××)	イ (×○)	ウ (○×	エ (○○)	合計
全体	33名 (14.1%)	136名 (58.1%)	35名 (15.0%)	30名 (12.8%)	234名 (100%)
うち 中等部生	6名 (18.2%)	64名 (47.1%)	1名 (2.9%)	5名 (16.7%)	76名 (32.5%)
うち 中等部生以外	27名 (81.8%)	72名 (52.9%)	34名 (97.1%)	25名 (83.3%)	158名 (67.5%)

### 3. 今後の課題

当初の予想よりも正答者数は少なかった。特にXについては「英國が過度な規制緩和で不当に競争力を高める事態を防ぐ」の一文などから、EU が英國の関税率の過度な低設定を防ごうとしていることを読み取れない生徒が多くいた。また、2クラスにおいて、この問題のみを掲載したプリントを配付し(別紙)「個人」「ペア」「5~6名」で考えさせたところ、多くの生徒が正答した。大学入試共通テストを見据えて、既存の知識を適切に活用する姿勢や能力を身に付けさせたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

共通テストが求めている力のうち、以下の2点をはかる。

- ・数学的思考力（問題の誘導に従い、関係式を適切に活用する応用力）
- ・表現力（既習事項を組み立てて解法を考え、また適切に表現する力）

### 2. 実施した結果の分析

111名の解答について分析。

#### 【分析】

問題全体の平均点は、7.9点／18点であった。

(1)、(2)のような、微分の計算をさせたり、不定積分の計算をさせたりする設問に対しては計算を進めることができた生徒が多くいた。しかし、(3)のように(1)(2)の計算結果を利用しながら問題解決を図ることができない生徒が目立った。

### 3. 今後の課題

数学の問題は、前出の結果を活用しながら思考を深めていくことが多い。基礎基本の定着を図ることはもちろんであるが、1つ1つの問題を切り離して解くのではなく、共通した考え方はないか、問題解決の切り口に共通性はないかと考えさせながら授業を進めていくことが今後の課題である。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

共通テストが求めている力のうち、以下の2点をはかる。

- ・数学的思考力（問題文や模範解答の式を適切に理解する読解力）
- ・表現力（既習事項を組み立てて解法を考え、また適切に表現する力）

### 2. 実施した結果の分析

111名の解答について分析。

#### 【分析】

(3)(ii)の正答率は6割弱（65名）にとどまった。模範解答を熟読せず、数字だけ追いかける習慣がついてしまっていないか懸念が残る。

(iii)は完全解答は2割強（24人）。部分点を含めた正答率は6割となった。問題がシンプルで、部分点が狙える構成だったこともあり、食い下がって粘る答案が多く、白紙は少なかった。

### 3. 今後の課題

思考力（今回は模範解答を読み解き、式の背景を理解する力）は自学自習できる力に繋がる。また、複数の解法を考える習慣は、数学の理解を多面的なものにし、深い理解と定着に繋がる。授業でこれらを育てるには、授業での問いかけや複数の解法の紹介など、時間がかかる点で難しくもあるが、教科書の記述を大事にする姿勢を教科担任が見せるなど、一つずつ取り組みたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

共通テストが求めている力のうち、以下の2点について定着度をはかる。

- ・数学的思考力（既習事項を複合的に用いて解くことができるか）
- ・表現力（数学的な用語を用いて自己の考えを他者に説明することができるか）

### 2. 実施した結果の分析

112名の解答について分析。（2）の「2通りの解法で解け」という問い合わせに対し、

- ①2通りで解いた生徒5名 ②1通りのみで解いた生徒45名 ③白紙62名

#### 【分析】

- ・②について、教科書の模範解答を丸暗記したような答案が多かった。
- ・②について、方針がたっても計算ミスで完答できなかった生徒が7割いた。
- ・③について、半数以上の生徒が白紙だった。

### 3. 今後の課題

白紙が多く、意欲に欠ける点を改善するために、まず授業が楽しくなるように「授業改善」を教科全体で意欲的に行っていく。そして、自己肯定感を高めるために、授業の様々な場面で褒める回数を増やす。また、授業中にお互いの考えを認め合う場面を多く設定し、深く考える授業を増やしていく。

計算ミス改善のため、低学年から平易な計算を繰り返し行い、チェックテストや計算コンクール等でその成果を数値として各生徒が把握し、計算力向上をデータとして実感させていく。

思考力向上と計算力向上。この二つを両輪として成績向上を図っていきたい。

## 問題省略

1. データ比較 SGH以外のクラス／SGHクラス
  - (1) 問題文から立式ができる・・・ 25. 2% / 18. 5%
  - (2) 境界線が正しくひかれている・・・ 13. 6% / 13. 6%
  - (3) 領域が正しく図示できている・・・ 4. 8% / 4. 9%
  - (4) 線形計画法の方針が正しく立てられる・・・ 19% / 19. 8%
  - (5) 線形計画法の解法で正答している。・・・ 6. 1% / 6. 2%
  - (6) 正しい解法ではないが考察し、正答にたどりついている。・ 6. 8% / 11. 1%

### 2. 分析

差が出たのは(1)と(6)。SGHクラスは(1)～(3)より、立式ができれば、境界線や領域を正しく図示できる生徒の割合が多い。さらに、(6)より解法がすぐに思いつかなくとも考察し、ひとつの答えにたどりつくための思考力が高い結果となった。

### 3. 今後に向けて

今回の結果からSGHでの探究活動が深い考察力を生んでいるという予測ができる。「表やグラフから必要な情報を読み取り、立式し解く」ことは苦手な生徒が多い。今回の結果から数学の授業の中でいかに考察させるかの工夫が必要であると感じた。

## 問題省略

### 1. 分析

読解力のある文系の生徒が序盤の問題では正答率が高かったが、それ以降計算ミスや計算方法の認識不足から理系の正答率が結果的に高くなつた。

また、クラス毎に見ると国探Ⅱを選択しているD組とE組で完答できた生徒の割合が高かつた。これは日頃から、学術的な文書や論文に触れることで読解力が育つていることもひとつの要因として考えられるのではないだろうか。

### 2. 今後に向けて

今回の出題では、読解力・認識力・把握力を意識した。特に教科書・問題集は文章力が少なめなので、手順から正確に理解することが必要な本問のような問題では計算力のある生徒でも強みを生かせない場面が散見された。

関係式を作ることと、その関係式をもとに解答を導く計算力は、数学の理解を深める両輪となる。

今後は、定期的にやや文章量が多い、旧帝大クラスの過去間に触れさせたり、複雑な計算であっても最後までしっかりと計算をやり切る練習量の確保が必要になるとさえられる。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

新聞記事を活用した問題で、一般的な文書の読み取り能力と、それを数学的に処理できるかどうかをはかる問題である。

### 2. 実施した結果の分析

タンジェントを使えば比較的簡単に解ける問題であるが、初めて見るタイプの問題のためか、情報が読み取れず、正答率は非常に低かった。

図も用意されているため、題意は取りやすいはずにも関わらず解けないのは、解きやすい見たことのある問題に先に飛びついているためかもしれない。

### 3. 今後の課題

日頃から初見の問題に触れさせることが必要。また、一般的な文書を読む訓練が必要だと感じている。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

一般的な文書の読み取り能力と、それを数学的に処理できるかどうかをはかる問題である。

### 2. 実施した結果の分析

条件付き確率、確率の乗法定理、原因の確率の求め方を理解していれば比較的簡単に解ける問題であるが、文章を正確に読み取ることができなかつたため、確率を求めることができなかつた。また、情報を読み取りそれらを数学的に表すことができなかつたことが解けなかつた原因と考えられる。正答率は非常に低かつた。

### 3. 今後の課題

一般的な文書を読む訓練とそれらを整理し、数学的に表す訓練が必要だと感じている。

## 問題省略

1. 出題の意図（何の力をはかったのか？共通テスト試行問題に照らし合わせて）

特に、大学入試共通テストで求められる思考力をはかる目的で出題した。

2. 実施した結果の分析（正答率や誤答のパターンなどから、生徒の現状を分析）

導体棒はやがてどうなるか。③の正解を選んだ生徒が最も多いかった。46%①と②はほぼ同じく27%ほどであった。

P Q間に流れる電流の大きさがやがてどうなるか。正解は②であったが、②、③を選んだ生徒が40%ほどで同程度で多かった。

国公立大学の個別試験では、よく出題される内容であり、選択問題であってもしっかりと小問を解答して定量的に考えることによって、解答できる問題であった。

電流の大きさが②を選んでいる生徒が思ったよりいたものの正答率はほぼ予想どおりであった。

3. 今後の課題

今回は試験範囲が広く、選択問題としたが、思考力を確認するには、記述式で論述にした方が、より生徒の理解度を把握できるので、今後はそのようにしたい。普段から初見の問題にも対応できるよう本質を押さえて学ぶ姿勢、粘り強く考える姿勢を身につけさせたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

ケトーエノールの異性化を、様々な化合物について問うことでその理解度および思考力を図る。

### 2. 実施した結果の分析

アセチレンの水の付加反応については理解できているが、同様の反応パターンを他の物質に応用することができない生徒が多くいた。単なる暗記に陥っている可能性がある。正答率は15%程度。

### 3. 今後の課題

内容を正しく、深く理解させることを心がける。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

既存の学習内容から発展させ、提示された状況から考えられることを問う、思考力問題を作成した。

### 2. 実施した結果の分析

正答率 30%程度

無解答 … 問題の意図を把握できない。

減点 … ヒトデが与える影響を的確に表現できない。

### 3. 今後の課題

引き続き、小単元ごとに大学入試問題を厳選・配付し、学習内容と入試問題との関連性を意識しながら復習に取り組ませる。特に実験考察等の思考問題を提供し、既存の知識に基づいた思考力の育成を図る。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

表現力

### 2. 実施した結果の分析

問(3)の正答率は30%程度。正確に論述するためには現象に対する正確な理解が欠かせない。公式に当てはめるなどの計算は表面上の理解で解答できる場合もあるが、まだまだ正確な理解ができているとは言えない正答率である。

### 3. 今後の課題

インプットだけでなくアウトプットする訓練が必要である。

## 問題省略

### 1 出題の意図

既習分野の組み合わせによる思考力を問う問題。実験結果を読み取り正確に論述できるかを見た。

### 2 実施した結果の分析

粘り強く解答する姿勢は身についてきた。論点の整理が出来ており、模範解答に使えるようなものも散見された。

### 3 今後の課題

一部の生徒に論述力が乏しく、身に付けてきた力に著しい開きがあるように感じる。基礎基本のやり直しを促したい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

既存の学習内容に基づき、提示された状況から考えられることを問う、思考力問題を作成した。

### 2. 実施した結果の分析

正答率 40%程度

無解答 … 問題の意図を把握できない。

誤答 … 拒絶反応の定義を理解できていない。

### 3. 今後の課題

教科書を繰り返し熟読することで、単元全体の概要を把握する。また、問題演習を重ねることで、様々なパターンの問題を経験し、近年センター試験でも出題されている思考力問題に対応できる学力を養成する。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

特に、大学入試共通テストで求められる思考力・表現力の定着をはかる目的で出題した。

### 2. 実施した結果の分析

電池は、直列接続と並列接続では、直列接続の方が大きな電圧がかかるので、同じ抵抗であれば、直列接続の方が消費電力は大きい。また、抵抗は両端が同じ電圧であれば、直列接続の方が一つあたりにかかる電圧が半分になることもあります、消費電力が小さい。並列接続の方は、その電圧がそのままかかるので、消費電力が大きくなる。よって、電池は直列、抵抗は並列に接続するとよかったです。

結果は、電池の直列が正しく描けている生徒は、42.3%。抵抗の並列が正しく描けている生徒は38.2%。すべて正しく描けている生徒は28.9%であった。

予想より正答率は低かったが、今回の問題はテストの最後の問題であったことからか「記入なし」の解答も結構あった。時間があれば、解答できた生徒は10%ほど増えたと思われる。

### 3. 今後の課題

抵抗と電池のそれぞれについて、並列と直列の場合の消費電力がどうなるかを考えると考えやすかったのだが、普段から初見の問題にも対応できるよう本質を押さえて学ぶ姿勢、粘り強く考える姿勢を身につけさせたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

思考力

### 2. 実施した結果の分析

問(4)の正答率は10%程度。1年生の第2回考查の段階なので、当然ながら知識を活用するという習慣はまだできていない。

### 3. 今後の課題

化学的な観点、思考力を身に付けさせる。

## 問題省略

### 1 出題の意図

自然界における物質循環を考えて、二酸化炭素濃度の変化を正確にグラフ化できるかを見た。

### 2 実施した結果の分析

なぜこのようなグラフになるかといった事由を踏まえて解答できたものは少なかった。なんとなくグラフを書く生徒が大部分を占めた。

### 3 今後の課題

論理的に思考して、解答欄をつくるといった姿勢を身に付ける訓練を繰り返す必要を感じる。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

大学入試（国公立二次試験・私立大学）で実施される小論文・口頭試問・筆記試験等を見据え、データ（今回はグラフによる資料）を読み取り、分析・考察する力が養われるような作問をした。

### 2. 実施した結果の分析

- (1) : 知識問題であり、正答率は高かった。教科書を勉強した生徒は問題なく解くことが出来たと考える。正解率9割。
- (2) : グラフの自然死産率から妊娠適齢期を読み取る問題。さまざまな回答があったが正答率は(1)の知識問題ほどではないが高い傾向が見られた。だが、問題文を正確に読み取る読解力が低い生徒は間違う傾向にあると考える。正解率7割

### 3. 今後の課題

問題文を正確に読み取り、答えを導く読解力が低いということは、保健に限らず、全教科にも影響する。保健体育の授業で、読解力を養うことができるような機会を設定し、生徒の読解力を高めるよう授業改善を行っていきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

[問2] で、知識の活用と思考力と判断力をはかった。(思考力・判断力)

事例を読んで、文章から事故原因を3つの要因から分類し(知識)、

①どうしたら防ぐことができたかを考える(思考力)。

②事故を防ぐ方法を要因ごとに考える(思考力)。

### 2. 実施した結果の分析

[問2]

・正答率は約60%であった。65%程度と予想していたので、概ね狙い通りと考える。

※満点で3点。3点が約60%。2点が約29%。1点が約10%。0点が約1%。

・平均すると約2.4点(3点満点の80%)となった。

・2点の29%には、「車両要因」と防ぐ方法が答えられない人が多かった。

・約10%程度だが、上手く表現できない人、思考力を発揮できない人、求めた知識が身についていない人もいた可能性がある。

### 3. 今後の課題

昨年度の反省を基に、記述式の問題を作成したが、更に、判断力・思考力を基に「論理的に文章を書く力」をはかる作問を考えたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

問1) 知識を問う基礎問題。

問2) 入試の小論文では家庭生活分野の内容が扱われることも多いことから、テーマ型の小論に取り組ませた。出題内容は福祉分野「バリアフリー」とした。

### 2. 実施した結果の分析

問1) ほとんどの生徒が正解であった。

問2) 概ね自分の生活経験や社会的出来事から発想し、社会全般に目を向けて述べることができていた。一方で、意見の根拠が不確かなままの生徒もいた。

### 3. 今後の課題

今後は、1年次での学習内容が受験の小論文の題材になるということを意識付けながら取り組ませることに加えて、学習活動の中で正しい根拠を元に思考する力を育むことができるようにしていきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

生徒の思考力・判断力・表現力を判断するため、文章・図・資料などの複数の情報を提示し、必要な情報を読み取る力や課題を解決する力を問うことを意識した問題。

### 2. 実施した結果の分析

ほとんどの生徒が、解答例に沿った考えを述べていて、データ分析の能力はあると判断できた。文章表現も簡潔にまとめている生徒が多かった。間違いや減点などもあったが、データを読み解こうとする努力の跡はうかがえた。

### 3. 今後の課題

教科書では日々進展している情報社会に対応できない事例もあるので、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータなどを基に考察する場面などを意識した授業。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

#### 英文読解力

英文の内容と一致するものを選択させる問題を出題した際、一致する数を特定しないで答えさせ、より深く英文を読み、考えさせることを意図した。

### 2. 実施した結果の分析

英文に書かれていることだけで、判断しなければならないが、生徒が自分の経験で選ぶという誤答があった。たとえば、英文に、数学の先生が、生徒たちがうまくいってないと感じて、クラスの生徒の長所を生徒たちに書かせた、とあるのを、ホームルームで書かせた、ととらえてしまった。

### 3. 今後の課題

読解問題に答える時には、ヒントも解答も英文にあるということを演習を通して徹底させる必要がある。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

文法力や単語力という基礎的な力を基に表現力をはかる。

### 2. 実施した結果の分析

内容点（3点）と表現点（3点）で採点した。時間が足りずに空欄の生徒もいたが、ほぼ全ての生徒が解答し4～5点が多かった。毎回このような形式で実施しており生徒は慣れている。

### 3. 今後の課題

分量を増やすとともに、自分の伝えたいことを論の飛躍が起こらないように書く指導を行う。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

正確に英文を読み取る力

発問の意図を理解する力

正答数が述べられておらず英語読解以外のヒントがなくても正答にたどり着く力

### 2. 実施した結果の分析

指示文が英語であるため、解答に時間がかかったようであった。

正答数が分からぬいために、一部解答が正解であっても完答することができない生徒の方が多かった。

### 3. 今後の課題

このような発問形式に慣れて、焦らずに解答を導き出せるよう今後演習の機会を増やしたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

- スピーキングテストの実施
  - 共通テストの枠組みではなく、新学習指導要領の「話すこと」に関する指導に照らし合わせて評価規準を設定し実施した。
  - 発表とやりとりの2つの観点から、上記のループリックを用い評価した
  - 自分の意見を理由や例を交えて的確に伝える力と、その内容についての質問にその場で考えて受け答えをする力を測った。

### 2. 実施した結果の分析

- 平均点は第1回 17.75/20点、第3回が 18.00/20点
  - 全体的に点数が上がったが、比較的英語を苦手とする生徒の点数が回を追うごとに伸びてきており、スピーキングテストの波及効果が生徒のスピーキング能力にポジティブな影響を与えているように思う。

### 3. 今後の課題

- トピックの難易度を上げながら実施していく。次はディベート大会でトピックとなったテーマを扱い、より論理的に説明できる力を高めさせたい。
- G T E Cなどの外部試験の結果も比較しながらスピーキングの力を多角的に分析していく。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

いずれも、「テキストの構成を理解する力」をはかるための出題である。文中に入る文を並べ替える問題では、前後関係から代名詞や時間を表す副詞の意味をとらえ、文脈を考えながら答えることがポイントである。また、ディスコースマーカーを選ぶ問題は、文の流れをとらえて、論理的に理解できるかどうかを問うものであった。

### 2. 実施した結果の分析

文の並べ替えは比較的よくできていたが、ディスコースマーカーの完解率が低かった。単文のレベルでは理解できても、文の前後のつながりや段落をまとまりとしてとらえる力が不足している。

### 3. 今後の課題

英語の4技能を向上させるためにも、論理的思考力は不可欠である。文脈や状況に合わせて文が構成されていることを意識させるための指導を工夫し、読解力を上げることで、リスニング力の向上も図りたい。また、テキストの構成を理解する力を身につけさせるためにも、単文での理解ではなく、段落ごとを要約する活動を取り入れていくことができれば、ライティング力の向上にもつながっていくはずである。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

共通テスト試行問題では、「読むこと・聞くことの能力をバランスよく把握」し、また「実際のコミュニケーションを想定した明確な場面、目的、状況の設定を重視し」とあることから、リスニング問題では、聞いた英文や会話の中の特定の情報を聞き取るだけではなく、会話がどこにおいてなされているのか、またどのような状況が起きているのかなどを問う問題を含んだ作問をした。

### 2. 実施した結果の分析

上記の考查で出題した問題は、CEFRのA2～B1（実用英語技能検定では準2～2級）レベルの問題である。No.1やNo.2のような状況の設定を問う問題では各問とも概ね正答していたが、No.3やNo.4のような具体的な内容を問う問題の方で、誤答が多く見られた。

### 3. 今後の課題

実際のコミュニケーションを想定した多くの場面設定でのリスニングを行うことにより、状況を的確に判断し、要点を把握しながら聞くことで設問に正しく答えられる力をつけさせたい。また、イギリス英語や英語を母語としない話者による読み上げにも対応できるよう、様々な種類の英語を聞く機会を設定したい。

## **II. 校 内 研 修**

## 校内職員研修会

【日時】令和元年9月27日(金) 15:45~16:45

【場所】会議室

【目的】河合塾仙台高校舎における東北大学AO入試に向けた指導について、志願理由書の書き方や面接指導などの事例を紹介していただき、本校における指導のあり方についてヒントを得る。

【対象】全職員

【講師】河合塾 東北営業部 東北営業チーム 小山 善久氏

【内容】

### 1. 河合塾での東北大AO入試への出願を志す生徒への対応

出願指導を大きく捉えた場合の3つの柱「志望理由書作成」「面接指導」「学力養成」に関するアドバイスを行っている。活動報告書では盛り込みたい内容が定まっている生徒が大半なので、推敲アドバイスや記載優先順位を講じるアドバイスのみとなっている。

### 2. 志望理由書 アドバイスのポイント

#### (1) “3つの条件”が明確に書かれているか。

1 なぜ「この私」なのか(夢・目標の実現に関し、自身の持つ強み(または目下の課題)は何か、志願動機)

2 なぜ「この学部」なのか(これからの時代に、実社会においてその学問を学ぶことがどのような意義を持つか、学んだことがどこに生きるのかのストーリー)

3 なぜ「この大学」なのか(いまの世の中に無いものを世に送り出すための学びが、どんな形で提供されているか、他の大学にも同じ学部があるのになぜか)

志願理由書では、この3つ条件をクリアしているかをチェックする。どれだけ学力に富み、人間性も魅力的な生徒であってもこのポイントを外している志願理由書ではよい結果につながらない。「その動機であれば、他の大学でいいのでは？」と言われることのない内容を書かなければならない。その後、これら3つの条件をおさえたと思った段階で今一度「アドミッションポリシー」をしっかりと読み直すことが重要である。

#### (2) “説得力”のある文章になっているか。

志願理由書は、本質的に受験生自身の内面を著出する文章なので、ほとんどの場合抽象的で共感が得づらい文章に出来上がってしまう。これを克服するための工夫が十分に尽くされた時にはじめて「説得力のある」文章ができる。河合塾における指導の場面でも「より具体的に客観的に」と、生徒へ書き直しを指示することが多々ある。

具体的な事実・体験、および、その意味の説明を述べ補強する。次に、自分にとっての特別の意味を述べ、更に補強する。難関大志望者の志願理由にはある程度のスケール感が必要。自分自身にとって重要な意味を持つことから出発して、将来的には「世の中にとって有用な物事、状況」へつながるストーリーを志願理由書の書類上で表現してほしい。

#### (3) その他の注意点

字はきれいに書く。また、断定なのか考察なのか推量なのか、表現を選択する際に迷った箇所は必ず確認し、最適な表現を用いること。表現が苦手な人は志願理由書の内容にぶれがでる。

### 3. 面接試験 アドバイスのポイント

AO 入試の募集要項では、学部全体のアドミッションポリシーに加えて、より期待している学生像を具体的に提示するような AO 入試独自のアドミッションポリシーが書き加えられている。アドミッションポリシー自体は抽象的な表現であるが、入試の詳細を注意深く見てみると、この内容に従って各々の出題・質問ができることが見えてくる。

面接試験では、志願理由書に收まりきらない掘り下げる質問が多く出てくる可能性を考慮しておくべきである。それに加えて、「高校生活を振り返る質問」、「一般的な面接マナー・作法・態度」が問題ない水準で準備できているかを確認するための面接練習を行う。また、実戦と同じく複数の面接官担当者(2~3名)が準備できる場合は、面接官ごとにジャンル、切り口が異なる質問となるように事前に打ち合わせておく。

### 4. 最後に

- ・必勝法はなかなかない。学部や学科が求めているものが違うから難しい。
- ・AO 入試で勝つためには、高1~2年の過ごし方が重要。
- ・キーポイントは「研究・探究の経験値」、「論理的思考力(簡単に明確な答えが出せない類の問いや、筋道が示されていない類の問いに対しても、最大限に頭を使い活路を開けているか)」、「人との対話(自分と異なった価値観・考え方をする相手と話す。他者の言い分を聞き、自分の意見や現状を見直し、自身をプラスアップするきっかけを掴めているか。)」これらの育成は高3からでは難しい。

(記録:北島 義大)

## 教育相談職員研修会

【日時】 令和元年11月6日（水） 15時45分～

【場所】 会議室

【対象】 本校職員

【講師】 スクールカウンセラー 横尾裕紀子先生

【内容】 テーマ 発達障害の特徴を持つ生徒の対応について

### 1 障害について

自閉症スペクトラム ※広汎性発達障害などを自閉症スペクトラムに統合

- ① 自分の世界と他人の世界の境界がわかりにくい
- ② 「こだわりが強い」は長所にも短所にもなり得る
- ③ 感覚への鋭敏さ・鈍感さは周囲が気づきにくい
- 嘘がつけない正直者。“空気の読めない”場にそぐわない発言をしてしまうことが多い。
- 好きなことはとことん突き詰める。逆に興味のないことは全く無関心になる。
- 寡黙。考えを表に出すことが苦手で意図のないおしゃべりを嫌う。
- 多弁。人見知りせず。

(コミュニケーション能力・社会性・創造性の困難さ)

### 注意欠如多動性障害

- ① ”不注意” “タイプや” 多動・衝動タイプ “が特徴
- ② 感情のコントロールが難しい
- 好奇心旺盛。注意が散りやすく、忘れ物が多くて片付けができない。
- おっとりしている。ぼーっとして話を聴いていないように見られる。
- 活発で元気。着席は苦手で落ち着きがない。
- 行動力がある。衝動性が抑えられず、突発的な行動が多い。

### 学習障害

- ① 知的障害や勉強嫌いとは違う
- ② 聞く・話す・読む・書く・計算する・推論するなどの特定の能力の習得に困難が見られる
  - 日常生活で理解力に不安はないが、勉強だけができない。
  - 文字がぼやけて見えたり、反転して見えたりする。
  - 本を読むのは好きだが文字が全く読めない。
  - 暗記力はあるが数字に関するだけは覚えられない。

## 高校生の発達障害

将来について具体的に考えなければいけない時期。  
「何がしたいのか・何ができるのか・何ができない  
のか」を把握し、自分に会った将来を考える。

- 自己管理：遅刻・欠席せずに通学できているか？
- 自尊心：気持ちのコントロールができるか？
- 対人関係：冗談と愚口の区別がつかか？
- 進路選択：自分の希望を言語化できるか？



## 発達障害のある学生・生徒への具体的対応 (一例として)

- ◆自己管理や社会的スキルを指導・援助する。
- ◆クールダウンのための場所を用意する。
- ◆指示は具体的にする。
- ◆必要な単位や必修科目、時間割などを一緒に考える。
- ◆授業中の一時退室を認める（回数制限などがある場合は具体的に伝える）。
- ◆課題やレポートの提出期限の延長を認める。
- ◆定期試験に別室を用意する。
- ◆カウンセリングを行う。
- ◆家族支援。

## 【質疑応答】

- ・高2男子 不安傾向が強い。腹痛の症状を訴えている。通学中に腹痛が起こったらどうしようとか、進路について不安を抱えている生徒にどう対応していけば良いか。
- ・S C 取り除ける不安は、取り除くために何をするかを考える。不安を抱える生徒の中には、完璧主義な生徒がいる。0か100という考え方をしてしまうが、自分の特性に気づくと納得できることもあり気持ちが楽になる。不安を表現し共有できていることは大きな一步である。気付きからのスタートである。
- ・高1男子 診断はされていないが、自閉症スペクトラムの特性を十分持っていて内服治療を行っている。薬を止める方向でいたが、内服しなくなったらトラブルが増えた。クールダウンする場所を保健室と本人と確認するも、保健室までたどり着かず、職員で数回校内を探して歩くということがあった。居場所がわからないことが困るので、どう指導したらよいか。
- ・S C パニックになるといろんな刺激がつらいという生徒のようだから、クールダウンの場所も保健室ではなく本人の行きやすい場所、トイレでもいいからいる場所を教えてほしいということをやってみてはどうか。

(記録：長山 葉子)

### **III. 研修講座等受講報告**

# 生徒指導推進研修講座参加報告書

教諭 中 山 つづか

## 1 はじめに

本研修は不登校・いじめをはじめとする生徒指導上の諸課題に対応するために、理論や実践について理解を深めることを目標として行われた。不登校については原因よりも「今何ができるか」に主眼を置くこと、いじめ問題では予防となる考え方を学んだ。どちらもグループワークを交えて実践的な研修を行った。

## 2 研修内容

### 【 公開講演 「教員として児童生徒の不登校状況に何ができるか？」】

#### ① 不登校問題へ取り組む際の教員としての基本姿勢

- ア 原因論にあまり立ち入らない。まずは「本人が元気になるために、学校・家庭で何ができるか」を考える。次に「本人が何ができるか」を検討・実行する。この順番を間違えない。
- イ 子どもの希望を引き出す。当面の目標は、「子ども自身が元気を引き出し、周囲との関係を育む」こと。その次は「嫌なことを避けて、元気になる」こと。それから、「少しくらい嫌なことに触れつつも元気になる」ようにしたい。
- ウ 教師は「節度ある押しつけがましさ、強引さ」をもって、子どもの逃げ場をつくりつつ関わり続けるというスタンスをとる。「積極的に関わりをもちたい」という姿勢は見せるものの、決して追い詰めないように配慮する」は、思春期の子どもへの関わり方の基本姿勢である。
- エ SCを始め、様々な外部機関と連携し専門家とのつながりをもつ。

#### ② よい人間関係をつくるには、“うまくいっているなら、それをなおそうとするな　うまくいっていることが分かったら、もっとそれをせよ　うまくいかないのなら、二度と繰り返すな何か違うことをせよ”である。

### 【 講義・演習 「いじめ問題に教員ができること」】

#### ① 人間関係の考え方

「人は、あなたが気にしている程、あなたに关心がない。自分のことで精一杯！」ということを生徒にも伝える。人との相性が、「良い」：「普通」：「悪い」の比率はだいたい2:7:1である。

#### ② アドラー心理学が考える「勇気を高める」

ア この「勇気」は、「自分が何かに貢献しているし、貢献していくことができる」「人は信頼できるし、仲間である」と思えるような心の在り様・それに伴う行為のこと。

イ 思春期の子ども達への関わりは「勇気づけ」が必要。様々な問題を起こしている人は、勇気くじきを受けていて、「勇気」を失っている場合が多い。子どもを勇気づけるには、①感情は伝えること②誰の課題なのか、課題を分けること③子どものポジティブ要素を確認し、声に出すこと④楽観的な考え方を取り入れること、の4つが必要である。言葉を通して「勇気づけ」のコミュニケーションをする。勇気づけを通して共同体感覚を育み、いじめのない学校づくりに役立てる。

## 3 まとめ

グループワークを通して、様々な人たちから「勇気を高めて」もらってここに在ることを研修者自身が実感した。勇気づけのコミュニケーションは相手の心のエネルギーを満たしていく。親と子ども、教師と子ども、子ども同士の人間関係がよりよくなるために「勇気づけ合うこと」を実践していきたい。

# 高等学校保健体育科授業の充実研修講座を終えて

教諭 金 森 康 臣

## 1 はじめに

「学習指導要領の保健体育の目標及び内容の具現化した授業づくりのための実践力を養う」ことを目標として令和元年7月11日と7月12日の2回に渡って実施された。

## 2 研修の概要

### (1) これから保健体育の授業づくり① 講義・協議・演習

- ・自校における教科指導上の課題について〈協議〉
- ・新学習指導要領について〈講義〉
- ・単元の指導と評価の計画について〈講義・演習〉

### (2) これから保健体育の授業づくり② 実技・演習

- ・新学習指導要領について
- ・模擬授業の構想
- ・模擬授業の提示
- ・まとめ、振り返り、復元

## 3 まとめ

2日間に渡り、高等学校保健体育科授業の充実研修講座に参加し、多くのことを学んだ。

「自校における教科指導上の課題について」では、各学校の実態やそれを考慮した授業づくりを共有できた。先生方の生徒と接し、生徒のことを考えた取り組みを多く学び、これから授業改善に活かしていきたい。

「新学習指導要領について」「単元の指導と評価の計画について」では、新学習指導要領の趣旨を再確認し、趣旨を基とした「単元の指導と評価の計画」をグループごとに作成した。一種目をグループ内で意見を出し合いながら作成に取り組んだ。「作成→実施→修正」を常に意識することや、「いつ・何を・どのように」を具体的にまとめることなどを学んだ。

「模擬授業の構想」「模擬授業の提示」では、上記で学んだことを活かし、模擬授業をグループごとに考え、授業を実施した。「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」をテーマに指導案を作成し、各グループの創意工夫が見られた。球技の中で、課題を提示し、生徒が知識をつなぎ合わせて課題を解決するような場面を設け、常に考え、体を動かす授業が多く見られた。各グループの仕掛けを多く学んだので、これからの授業改善に活かしていきたい。

新学習指導要領の改訂に伴い、求められることは多いが、教員が常に学び続け、創意工夫することが大切であることを再確認できた。この成果をこれからに活かしていきたい。

# 『B研修 これからの運動部活動の在り方』の研修報告

教諭 伊藤栄治

## 1 はじめに

この研修では、①運動部活動経営の実際 ②これからの運動部活動の在り方 ③運動部活動の経営の実際 ④運動部活動指導・運営上の留意点 ⑤運動部活動での事故防止と応急手当 の5項目について、指導主事、教育専門監、秋田大学大学院准教授から指導法や対処法について具体例を交えた講話を聴いた。また、参加者同士による話し合いも行われた。

## 2 内容

### ① 運動部活動経営の実際

担当している部活動について、競技の専門性を有している教員は全体の47.8%、競技の専門性を有していない教員は52.2%となっている。約半数の教員は、専門性がない競技について手探り状態で指導に当たっていることになる。保護者との適切な関係性を構築しながら、部活動経営上の危機管理にも十分に注意を払う必要がある。

### ② これからの運動部活動の在り方、運動部活動の経営の実際

秋田県では平日の活動時間を2時間30分程度、週末の活動時間は3時間30分程度、休養日についても平日週1日、週休日は月に2日程度設定するよう基準を設けている。これは、「スポーツ医・科学の観点からのジュニア期におけるスポーツ活動時間について」(平成29年12月18日 公益財団法人日本体育協会(現在は「公益財団法人日本スポーツ協会」))において、行き過ぎたスポーツ活動を行うことによるスポーツ外傷・障害やバーンアウトなどの指摘に基づくものである。

### ③ 運動部活動指導・運営上の留意点

競技経験の有無にかかわらず、指導者には分かっていたり、できたりすることから見える世界と、生徒のように思うように上手くできない者が見えている世界をどのようにつなげていくのかが課題となる場合が多い。

### ④ 運動部活動での事故防止と応急手当

ウイルス感染の予防や、傷に対する処置の方針、ショック症状に対する対応など、部活動の活動中に想定される様々な事案についての対処法について説明があった。怪我や体調不良等に対しては冷静かつ適切な対応が求められる。知識を得るとともに、周りと協力しながら落ち着いた行動をとることが重要になる。

## 3 まとめ

これからの運動部活動の運営は、合理的でかつ効率的・効果的な活動となるように、定期的に取り組みを見直す機会をもつことが求められる。生涯スポーツの観点からも、部活動を通して生徒が大きく成長できるように、今後も部活動指導の改善を図っていく必要がある。

## **IV. 校外研修**

## 第39回東北地区学校図書館研究大会【山形大会】実践発表より

### 『伝え合う』表現活動で読書を広げる～互いに知性を育む図書館を目指して～

学校司書 杉山 美美子 教諭 三浦 弓子

【発表記録】 日時：令和元年11月7日（木）9:00～15:50

会場：山形県立酒田光陵高等学校

#### 【発表原稿より】

本校の「伝え合う」表現活動を土台とした読書指導と授業支援をご紹介していきたいと思います。本校図書館は、探究型の授業を行う進学校および、図書館活性化モデル校でもあることから、読書の魅力を伝え合う活動を行っています。文部科学省から昨年発表された「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」の中で、高校生世代への読書推進は、同世代で本を紹介し合う活動が有効であるというような記述がありますが、本校で行われる読書の取り組みもこの流れに沿って行われております。そこから、授業での図書館利用との相互作用があり、生徒たちの様々な感性を磨いております。その過程をご紹介します。

[→スライド番号1]

まず、本校の概要ですが、創立から57年、平成28年度からは中等部も開校した中高一貫教育校です。ほぼすべての生徒が大学進学を目指す進学校です。[→2]

学校図書館は、1階の生徒昇降口の向かいという、朝夕には生徒が通る場所にあり、貸出だけでなく、帰りの電車などを待つ生徒が時間まで読書する姿もよく見かけます。今年度、文部科学省より「子供の読書活動優秀実践校」として表彰いただきました。[→3]

そして生徒図書委員は全校で56名おります。高校生徒の立てた委員会目標の中で1番にある「知性あふれる図書館」これは、「さらに広い分野へ読み広げる読書ができる図書館にしよう」「読書の素晴らしさの発信基地となる図書館にしよう」という思いをこめたものであり、教職員のみならず生徒たちもこうした思いを持ち活動しています。[→4]

その活動の一つとして、本校で盛んにおこなわれているのが「ビブリオバトル」です。校内ビブリオバトルは、放課後に図書館や選択教室で行っております。今年度から図書委員の中に「ビブリオ班」をもうけ、広報や司会などを担当しています。[→5]

また、今年度は学校祭でビブリオバトルを公開し、午前・午後の2回、行いました。写真を御覧いただくと、一般の方が多いのですが、保護者の方よりも、待ち合わせなどで図書館に来たという方が興味を持って最後まで参観してくれました。校内の会でビブリオバトルの魅力を知ったバトラーたちが、大会出場もしております。全県大会でのチャンプ本に選ばれることもありました。[→6]

今年度の地区大会は先月行われ、中高ともに本校のバトラーが紹介した本がチャンプ本に選ばれました。少し様子をご覧下さい。[→7※動画40秒]

また、ビブリオバトルのような発表が苦手な生徒も表現できる場として、POP作成があります。秋田県では一昨年度から、他校の学校司書の提案で行われている図書委員によるPOP交流事業があります。ハガキにPOPを描き、他校の図書委員へと送るというものです。館内では本校から送ったPOPと他校から送られてきたPOPを掲示しています。また、本校は留学生受入れも行っておりますが、今年度は短期留学生もPOP作成にチャレンジしました。紹介文の中には日本語で一言を入れてもらいました。[→8]

次はブックパックについてです。これは秋田市立図書館などで行っている本の福袋のようなものです。市立図書館では「家族用」というテーマですが、本校では生徒それぞれがテーマを持って作っています。テーマやデザイン、キャッチコピーが重要であることを伝え、なるべくふだん手に取られにくい本の魅力を知っ

てもらうため、という目的もあり行っています。これまでのテーマには「お仕事パック」「短時間で読める有名な詩集・歌集」「瞳を閉じて…」などがあります。[→9]

次に展示です。今年度から教科展示班が順番で展示を行っているコーナーが、「授業コラボ展示」です。古典の「平家物語」のテーマにあわせて弓や甲冑を置き、「世界の音楽」のテーマにあわせて楽器の三線を置くなど、本以外の小道具も利用しています。[→10]

掲示物としては現在、作家紹介を図書館入り口のわきに掲示しています。これもキャッチコピーについて、一言で好きな作家をとらえるものである旨を指導しました。ほかにもクイズ作成などを行いました。[→11]

イベントとして「書庫ツアー」や、今年度初の企画として「図書館フェス」で読書会も行いました。問題提起など高校生が先に立って進め、中・高生が一緒に参加しました。シール作成もしたのですが、これは実はバーコードラベルの周りの白地を利用したリサイクル工作で、本にあまり興味のない生徒にも気軽に参加してもらおうと思ってやってみました。こうした活動で楽しみながら読書へのきっかけづくりをし、読書する雰囲気を全校に広めています。[→12]

また一方で、授業での図書館利用も積極的に行われています。

本校では学校設定科目に、高校1年生で行う「国際探究Ⅰ」、2年生の選択者のみの「国際探究Ⅱ」、3年生の「グローバルイシュー」があります。これらの科目は各学年とも週2時間入っており、ときには大学の先生方の指導を仰ぎながら国内外のフィールドワークや研究発表、論文作成など幅広く探究活動を行うものですが、テーマを設定する際から必要なデータを得る際まで、図書館をよく利用します。今年度はこの3科目で時間を設け、文献調査法について解説しました。写真は1年生に体育館で行っているところです。2、3年生の文献探索講座は、図書館で説明した後、実際の資料探索にうつりました。資料を使って思い描いていたテーマが、大学の先生の話を聞いたことすべて変わってしまう、ということもありますが、気にせず、資料集めをするためにレファレンスをどんどん使ってほしい、ということを強調しました。[→13]

また、本校では学校司書が赴任当初から御用聞きのように生徒の活動や授業の様子、研究テーマ等を見聞きし、必要な資料について注文を受けていました。その一部を紹介しますが、レファレンスも多くなっています。例えば「ヴィーガン、ベジタリアンなど近代の食文化について知りたい」とか「セネガルについて広く資料にあたりたい」「西アフリカの学校事情についてデータが欲しい」「シロアリの生息地域について知りたい」などです。[→14]

次に英語の学習での利用です。本校は普通科のほかに英語科が2年前まで開設されていたこともあり、Oxford Bookworms シリーズなど、多読用の図書が複数も含め数百冊あります。これらを使ったリーディングマラソンが夏休み前などに英語科の課題として出されています。また、中等部の生徒にも英語に親しんでもらうため、絵本も揃えています。[→15]

国語の学習では同じように、新書レポートの課題が出ます。本校では岩波新書など新書も積極的にすすめており、新入生への図書館オリエンテーションでも、1年生のうちから自分の進路や関心に合わせて読むことをすすめています。課題が出された後も、新書の棚をじっくり眺める生徒が数多く見られ、貸出が伸びています。また、詩歌の調べ学習では、一人の詩人・歌人・俳人をそれぞれ選び、経歴や作品について調べました。たくさんの作品に出会わせたいという思いから、県立図書館のセット貸出をはじめ、多くの図書をそろえました。これらは授業の前後一定期間、図書館内に展示をしたことで、他学年の生徒も興味をもって見ていました。[→16]

ここで、高校の実践発表の会ではありますが、中等部での授業についても紹介させていただきます。中等部での図書館利用は積極的に行われています。たとえば、竹取物語の並行読書として、生徒自らが現代語訳された古典を読み進めるため、古典のブックトークを行い、その後レポートとPOPをかけあわせたよ

うな紹介カードを作成するため古文の原文にも触れました。紹介の中には「恋する気持ちを表す和歌は現代の歌などとも共通している」「菅原孝標のむすめとビブリオバトルをしてみたい」という感想もありました。その他にエッセイの比較読みをしたり、英語と日本語の絵本を集めて園児によみきかせをしたり、まわし読み新聞を作つてスピーチをしたりという授業に、学校司書も企画から参加し、教室に出張しました。[→17]

中高生の交流は、図書館では自然な形で行われます。図書委員の文化祭準備などでは、企画を出し合いますが、中等部の自由な発想での活動が増えています。また、高校生が中等部生の相談に乗る姿も見られ、お互いの成長を促す場や機会であると感じました。昨年度は、AO入試などで進路決定した生徒によるブックトークバトルを行いました。これから学ぶ専門分野への熱い思いを2、3冊の本に込めて語るものです。決勝戦を公開すると中等部生は熱心に見つめています。また、ビブリオバトルのあとの感想交流も、中高の垣根なく語り合いのできる場となっています。[→18]

ここまででの成果として、大きく三つを挙げます。

まずは目標にもあった読書の幅の広がりです。お互いの紹介から関心が広がり、自分では選ばないような本に出会えた、という声を聞くことがあります。また、ビブリオバトルやブックパックはテーマを課すこともありますが、難しい分野へも挑戦し、それを紹介することができます。そういう経験から、本を選ぶ感性が育っていると見えられます。[→19]

貸出統計にもそれが現れ、分野別貸出図書数の統計を見てみると、課題で借りた本が多くを占めていますが、それ以外でも文学以外の分野の貸出が増えています。好きな本を読むだけの楽しむ読書にとどまらずに、幅広い興味を持つようになったことがうかがえます。[→20]

昨年度はシステム導入のため冬季間の貸出しが減少していますが、今年度前期だけでその数を超えています。[→21]

次に、様々な活動を通して、生徒たちが伝え合うための「ことば」を磨き、伝える技術が向上してきたことが挙げられます。キャッチコピー、キラーフレーズはありきたりなものでは立ち止まつてしまえません。好きな本であるから「伝えたい」という思いは強くなり、どうしたら相手に楽しく届けられるかを考えます。他の生徒に「伝えられた」ことばに触れて、磨かれることもあります。[→22]

最後に、資料活用能力の向上です。読む力、探す力など、探究のための資料活用能力を身につけた生徒たちは、専門書や論文を読みこなすことになりますが、その中で自ら社会へのアンテナを立てられるようになりました。図書館は様々な資料から社会への扉が開かれている場所として、生徒たちのニーズやレンスに応じてテーマ探究を支援します。読書や図書館利用を通じて、こうした能力や意識を養い、感性を身につけていく生徒たちの姿に、学びの深まりが感じられました。[→23]

おしまいに、今後の課題として、継続的な読書の支援があります。進学校であり、部活動や探究活動などを行う生徒たちからは、本を手にして、「読みたいけど、読書の“時間”が無い」とよく言われます。こうした対策として、本への距離を縮める「校内出張文庫」を設けたり、読書分野を広げるためゲーム感覚で様々な分野の本を借りられる「読書ビンゴ」などの活動を取り入れたりしていく予定です。

また、環境のさらなる改善のため、利用者アンケートなどを参考に、空間や雰囲気づくりなど生徒に居心地のいい図書館づくりを考えています。また、デジタル資料なども揃えていくことで時代やニーズに合った図書館を作つていただきたいと考えています。[→24]

そのためにも、司書が図書館だけでなく授業や校内活動に関わり合いながら必要な情報や支援を確かめていくこと、また、「図書館日誌」やアンケート調査等から利用状況を把握し、改善必要箇所などを汲み上げて運営に生かすことを、今後も大事にしていきたいと思います。

本日紹介した「話す、聞く、書く、つくる」など、読書をきっかけとした表現活動は、生徒自らの主体的な

読書の姿勢を養い、ほかの生徒たちへも読書を広げてきました。そういったプラスの相互作用を生み出す図書館として、これからも利用者のニーズをとらえ、「伝えあい、知性をはぐくむ図書館づくり」を推進していきたいと思います。（以上）

#### 【質疑応答・指導助言より】

質問として、山形や岩手の参加者から「読書ビンゴとはどんなものか」「文献探索講座の担当や内容を教えてほしい」「新書レポートの各学年での取り組み方はどうなっているか」「予算はこの生徒数では少ないのではないか」などあり、それぞれに回答した。

また、指導・助言として、秋田県教育委員会高校教育課・柏谷指導主事より「図書館が探究活動や学校運営の重点として位置づけられているのがわかる発表であった。秋田南高校を含め学校図書館の課題は、図書館整備と人材育成の継続・維持である。様々な成果を挙げても、担当者が変わったことで取り組みが継続できなければ意味がない。学校全体や各教科の指導計画の中に図書館活用を位置付けていくことが今後は必要である」とあり、学校運営全体の中で課題に取り組んでもらいたいとのことであった。

#### 【他校の実践発表・助言より】

①山形南高校では進学校で時間のない中、図書委員と試行錯誤しながら読書推進に取り組んでいた。図書委員会の研修として、出版社の小冊子を使った選書バトルを行い、購入したそれらを展示していた。また、大学入試改革を動機づけとして、新書と新聞を用いた想定問題を解いていた。貸出はなかなか伸びないとことであったが、学校事情に合わせ、生徒が読書に主体的に向かう企画を様々な角度から試みる様子が印象に残った。

②鶴岡中央高校の取り組みは、情報リテラシーや情報を絞っていく検索についての授業、複数の新聞を使った読み比べなどたくさん授業での利用（年間200時間以上）も、興味深かったが、デザインコースの生徒たちが、図書館のレイアウト変更・サイン掲示の作成を行っていた。図書館の運営に生徒を巻き込み、学んだことを形にする環境づくりなど、生活に役立つ多彩なアウトプット活動が印象深かった。

③盛岡第三高校の発表では、教養として学問の古典的な名著・大著と言われる本を「朝読書」（全校対象、学年主任が一人ずつ課題図書を指定し、完読率などレポートを提出させる）で読ませているという実践が紹介された。ディベートや小論文に向けての「教養のインプットをするため」という目的がはっきりしている読書指導である。高三の11月の時期にも、本の内容についてのディベートや、作家について論述する課題などに、学年主導で取り組ませていた。進学指導の一方で、読書や表現・論述などの活動を学びの中心的なものとして据え、難解な書物に正面から向き合わせる指導体制がうかがえ、非常に印象的であった。

#### 【終わりに】

今大会の各発表の助言の中で共通して出てきたのが、「学校司書は、探究型学習や学校図書館経営のマネジメントをし、図書館運営において管理職・教職員・生徒と図書館を繋ぎ、多様な深い学びをするためのプロデューサーです」という言葉であった。SSHやSGH各校の探究学習をはじめ次期学習指導要領の「総合的な探究の時間」実施に向けて、より柔軟かつ積極的に、図書館の運営と活用を学校全体の体制の中で考えることが必要となるだろう。今後も継続的な実践を通じて図書館活性化と読書活動の一層の充実を図っていきたい。また、昨今の社会の変化の中あって、子どもの思考力や学力を支え、感性を養う「読書」の意義と必要を、生徒のみならず教職員ひいては家庭や社会においても再認識し、読書推進に取り組んでいく動きを望みたい。

## 「伝え合う」表現活動で読書を広げる

～互いに知性を育む図書館を目指して～

秋田県立秋田南高等学校 学校司書 杉山英美子 教諭 三浦 弓子

### 1 テーマ設定の理由

#### (1) 学校概要と生徒の実態

秋田南高校は創立57年目となる県立高校であり、中等部を併設した中高一貫教育校としては4年目を迎えた。平成28年度から中等部が開校となり、今年度はその一期生が高校1年生に進学している。全校生徒は高校普通科各学年6クラス（高1のみ7クラス）、中等部各学年3クラスで、生徒数は高校707名・中等部238名・教職員92名から成り、ほぼ全生徒が高校卒業後の進路を大学進学として学力向上に取り組む進学校である。「高い志をもち、ふるさとや世界に貢献するグローバルリーダーの育成」を学校の重点目標に掲げ、中・高とも「グローバルリーダーとしての資質（基本的知識・技能・習慣、探究力、協働力）を発達段階に応じて養う」カリキュラムマネジメントのもとで教育活動にあたっている。また、平成27年度からは文部科学省の「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」研究指定校として探究学習活動が活発に行われている。

#### (2) 本校図書館の概要

本校図書館は蔵書数約29000冊を有し、席数は約70席を設け、生徒昇降口に面した1階に位置する。平成30年度末に蔵書検索システムELISE-Egg4を導入して現在は登録作業をほぼ完了し、今年度4月からシステム運用を開始した。学校司書1名を含む図書館運営部が校務分掌に組織されているほか、生徒会図書委員が中高各クラス2名で計56名おり、カウンター当番などの委員会活動を行っている。

平成28年度からは「秋田県学校図書館活性化モデル校（教科型）」指定を受けて教科指導での図書館活用や読書推進活動に取り組み、各教科の協働的学習や探究活動の支援、図書館活用能力の育成、図書委員会活動の活性化など学校司書を中心として積極的に実践してきた。県の読書推進事業「高校生ビブリオバトル」や読み聞かせ講座、図書館研修会等にも積極的に参加・発表し、広報や諸活動を通じて全校生徒や地域に読書の魅力を伝えている。読書推進をはじめとする学校図書館の継続的かつ意欲的な取り組みが評価され、平成31年4月に「子供の読書活動優秀実践校」として文部科学大臣表彰を受賞した。

#### (3) 目指す図書館と読書指導、知的感性を磨く生徒の育成に向けて

本校生徒会の図書委員会で、生徒たちが掲げた目標の一つに「知性あふれる図書館づくり」がある。自分の好きな本を読むだけの狭い読書ではなく「さらに広い分野へ読み広げる読書ができる図書館にしよう」「読書の素晴らしさの発信基地となる図書館にしよう」という思いが込められている。学校図書館活性化モデル校であることから、図書館を活用した学習の支援として探究型調べ学習や学校司書による出前授業など、図書館が直接授業と関わる機会も多い。教科の学習について発展的に理解を深め、進路達成に向けての教養・知識を身につけるため、読書の下地を持つことは重要である。図書館では生徒がより自分を高める読書ができるよう知的好奇心を刺激する仕掛けを設けるなど、読書の幅を広げる表現活動や交流活動の中で多様な本に触れていくような取り組みを試みてきた。本発表

ではその中から、読書の魅力を生徒が伝え合う読書推進活動や、教科指導との連携の実践について紹介する。

## 2 実践の内容

### (1) 読書推進活動、読書を広げる表現活動

#### ① 読書推進活動として

- A) ビブリオバトル（校内開催・大会参加）
- B) P O P 作成（校内コンクール、他校P O P 交流、出版社コンクール参加）
- C) ブックパック作成
- D) 館内展示の工夫（教科コラボ展示、英語展示、図書おみくじ、作家紹介、入口掲示板）
- E) 読書案内作成（図書館だより、図書館報）
- F) 図書館イベント（書庫ツアーや、図書館フェス、料理講座）

#### ② 「話す・聞く」活動で伝え合う～ビブリオバトルへの取り組み～

本校では平成28年度から図書館主催行事として学校司書と図書委員や有志の生徒が主体となって「校内ビブリオバトル」に取り組んでいる。平成30年度からは月1回程度開催し、中等部生と高校生が意見を交わして読書意欲を高め合う場として機能している。中高の国語科の授業でも表現や言語活動の学習活動として取り入れることもあり、広く全校生徒に親しまれている活動である。

発表者は選書から始まり、内容を読み深め、聴衆の関心をひくような表現や構成の工夫をし、場や状況に応じて効果的に話す力を求められる。聴衆となる側の生徒も、聴いて評価し、良さを伝えながら自身の読書の幅を広げるきっかけをつかむ。場にいる生徒たちが互いに伝え合う力を鍛えて成長していく様子が顕著に見てとれ、読書の本選びや読みの深まりなどの時間をおいての効果も得られる活動である。

本校生徒は県教委主催のビブリオバトルの大会に複数名が出場し、高校では3年連続で全県大会チャンプ、中等部も全県チャンプ・準チャンプになるなど毎年入賞し、全国大会にも連続出場している。入賞者は県内テレビ各局やラジオ番組、新聞やWEBページ等のメディアを通して本の紹介や読書に関する取材に応え、校内集会等でも発表するなど読書推進の先導者として活躍した。

さらに今年度は、生徒主体で効率的に運営できるよう図書委員会の中で「ビブリオ班」を設け、少人数かつ活動意欲の高い班員によって毎月の校内バトルが開催されている。

#### ③ 「書く」「つくる」活動で伝え合う～P O P 作成や広報物作成～

図書委員によるブックパック作成、校内P O P 展示、県内高校とのP O P 交流やコンテストへの応募などにも本校では積極的に取り組んでいる。P O P 作成においては本紹介のため効果的な言葉・イラスト・レイアウトを工夫し、はがきによる他校との交流や留学生のP O P 作成など様々なかたちで取り組んだ。ブックパックも本を詰めるだけでなく、パッケージに興味をひくイラストやタイトルを入れるなど、それぞれ表現に工夫を凝らして作成した。また、毎月の広報「図書館だより」や年1回の「図書館報」は、図書委員が中心となって企画や原稿作成を行っている。ビブリオバトルなど「話す」活動がやや苦手な生徒も、「書く・描く」「つくる」などの表現活動でそれぞれの個性や力を発揮して、本や読書の魅力を伝えるために生き生きと取り組む姿が見られた。

#### ④ 館内展示の工夫、図書館イベントによる推進活動

館内展示を工夫するほかにも、多くの人に図書館に興味を持ってもらい、読書好きの生徒にも本から広がる楽しみを見つけようということで、「書庫ツアーや」「図書館フェス」などのイベントを行った。

「本に出てくるお菓子を作る」料理講座（家庭委員と合同開催）を行った。

(2) 教科との連携、図書館の授業利用

① 授業利用の実践例

- a) 文献探索講座、相互貸借での資料提供（国際探究）
- b) リーディングマラソン（英語科）
- c) 新書レポート、詩歌の調べ学習（国語科）
- d) 古典の並行読書と紹介カード作成（中等部）

② 教科指導との連携

秋田県学校図書館活性化モデル校(教科型)の指定を受け、この数年、学校司書を中心として教科の学習指導支援と授業環境整備の充実に取り組んできた。教職員の利用促進を図るための「教職員向け・図書館利用のしおり」の作成や、図書館を活用した校内外の授業実践例・学校支援メニュー等の紹介、教科の要望を受けた図書購入や課題図書コーナーの設置など、教科と連携した図書館運営を図っている。教科指導のほかにも進路学習や総合学習での利用、学校司書の教室出張やブックトーク、留学生の指導支援なども行った。図書館の授業利用時間も増え、学習拠点として図書館が積極的に活用されるようになっている。

③ 学習単元に関連した館内展示の工夫

本校では図書館内で授業との“コラボ展示”を展開しており、『平家物語』の学習に関連して鎧武者の甲冑や弓の展示をしたり、「戦争の歴史」、「史記の世界～鴻門之会」、「源氏物語」、「世界の音楽」など、関連図書や実物を展示して、教科の学習単元テーマや教材に合わせた館内展示を行った。展示に利用した図書はよく借りられていくほか、展示を見て中等部生が高校の単元に興味を持つようになるなど、生徒の学習意欲・読書意欲の喚起や知的好奇心の醸成につながっている。

(3) その他、中高交流の場としての図書館活動

### 3 成果と課題

(1) 取り組みの成果として

こうした様々な取り組みによってより広い分野の本に興味・関心を向ける生徒が増加した。最近の貸出統計から生徒の読書傾向についての変化を見ると、分類別貸出冊数の内訳で文学以外の分野の増加が顕著である。たとえば新書を読む課題を通じて現代社会の課題を知り、さらに他の新書へ読み広げる生徒も増えるなど、課題を契機として読書の幅を広げる生徒が見られるようになった。加えて、生徒一人あたりの貸出冊数も高校生・中等部生とも増加しており、様々な取り組みが図書館の利用増加につながったことがうかがえる。

また、ビブリオバトルやP.O.P・ブックパック作成などの活動においては、生徒の読書の幅を確実に広げるだけでなく、バトラーや作成者が自身の読書体験を振り返って表現する過程で、読みを深めるとともに「伝えることば」を磨くことができ、生徒たちの「伝える」技術の向上に直接結びつくものである。さらに教科の図書館利用においては、必要な資料を読み解く探究活動や文献探索などにより、資料活用能力などの図書館活用能力の育成につながっていくと考える。

(2) 今後の課題

① 継続的な読書の支援、読書習慣の形成

読書好きな特定の生徒だけでなく、読書時間を取り余裕がない生徒や読書に关心の無い生徒にどうアプローチするか、図書館で本を借りて読む生徒をいかに育てるか、ということは常に課題である。

そのための試みとして、全校集会や校内放送等でのビブリオ広報のほか、本への距離を縮める「出張ミニ文庫」や、様々な分類の本を手に取る「読書bingo」など、楽しみながら読みを広げる工夫を今後も図っていきたい。

## ② 利用しやすい図書館環境づくり、行動する学校司書

本校は中高一貫校として新たなスタートを切ってから4年目であるが、図書館は中高で共有であるため、図書購入や利用スペースのバランス、委員の仕事の分担など、要望や利用実態を見ながら考えていく課題がまだまだある。利用者の便宜を考えた利用規程の見直し、授業利用のための館内環境の見直しなどをしてきたが、今後も利用アンケートなどを参考に図書館環境の整備を図っていく計画である。また、本校では生徒たちの授業や活動の中に学校司書が入っていき、生徒が必要な情報や図書館ができる支援を直接確かめていることが、生徒に寄り添った図書館づくりにつながっている。今後も学校司書が柔軟に学校の教育活動に関わっていけるよう校内の連携を取っていきたいと考える。

## (3) 終わりに～新しい時代や社会の変化に応じた図書館と読書指導

情報化・ネットワーク化が急激に進む時代や社会の中で、本や読書のありかたも刻々と変化しており、子どもたちの本や読書に対する意識・行動の変化に応じて、図書館の取り組みを考えていくことが今後は一層求められるだろう。蔵書管理検索システム導入や書架増設などで図書館環境の整備に加えて、情報ネットワークやデジタル資料の効果的な活用、WEBやSNS等での書評・読書交流など、読書推進の働きかけ方の新たなかたちについても可能性が考えられる。本校では「Classi」という携帯端末・PCなどによるクラウドサービスを学習活動のほか学校と生徒・保護者間のコミュニケーションツールとして利用しているが、図書館の諸活動においてもその有効活用を考えていきたい。

本発表で紹介してきたビブリオバトルやブックトークなどをはじめとした「話す・聞く」「書く・つくる」などの読書を契機とした表現活動の実践は、生徒の主体的な読書姿勢を育みながら自他の読書の幅を広げてきた。学校図書館の活性化と生徒の読書活動の充実を図るために、今後も継続的な実践を通じて「伝え合い、知性を育む図書館づくり」の推進を図っていきたいと考える。

## 「伝え合う」表現活動で 読書を広げる

～互いに知性をはぐくむ図書館を目指して～

1

## 秋田県立秋田南高等学校 概要

- ・昭和37年度 開校
- ・平成27年度～ スーパーグローバルハイスクール(SGH)研究指定校
- ・平成28年度～ 中等部開校
- ・生徒数 高校 普通科 707名 各学年6学級(1年生のみ7学級)  
中等部 238名 各学年3学級
- ・学校目標 高い志をもち、ふるさとや世界に貢献する  
グローバルリーダーの育成



2

## 学校図書館概要

- ・秋田県学校図書館活性化モデル校(教科指導型)
- ・蔵書 29,000冊 (平成31年4月1日時点)
- ・予算 県費31万円 PTA費約26万円 (図書のみ)
- ・場所 1階 生徒昇降口向かい
- ・席数 約70席
- ・職員 図書館運営部 10名  
学校司書 1名

平成31年4月 文部科学大臣表彰  
「子供の読書活動優秀実績校」

3

## 図書委員会

中等部・高校 各クラス2名 計56名

### 【目標】

1. 利用しやすく「知性あふれる図書館」づくりをする。
2. 全校の読書量を増やす。
3. 「図書館だより」、「図書館報」を充実させる。

→さらに広い分野へ読み広げる読書ができる図書館  
→ 読書の素晴らしさの発信基地となる図書館

4

## 読書推進活動 一ビブリオバトル



校内ビブリオバトル

ほぼ毎月開催

テーマ:ミステリー、国際探究、新書、アオハル、恋、新生活を始める貴方へ 等



学校祭ビブリオバトル  
午前の部、午後の部の2回開催  
テーマは赤と青  
教職員も参加

5

## 読書推進活動 一ビブリオバトル

### 大会

(地区→全県→全国)

バトル多数出場

高校

3年連続全国大会出場

中等部

一昨年度全国大会出場

昨年度県大会準優勝



6

### 読書推進活動 一ビブリオバトル



7

### 読書推進活動 一POP作成、POP交流



8

### 読書推進活動 一ブックパック作成



1パック3冊の本  
貸出期間は一ヶ月間(通常2週間)

#### 作成時の注意

- シリーズ第一巻はなるべく避ける
- 面白い本を発掘する

#### これまでのテーマ

- 「青春～中高生の恋・友情・家族～」、
- 「スポーツ」、「お仕事パック」、「猫」、
- 「短時間で読める有名な詩集・歌集」、
- 「The ミステリー」、「嘘を閉じて...」

9

### 読書推進活動 一館内・校内展示



10

### 読書推進活動 一校内展示(掲示物)



11

### 読書推進活動 一図書館イベント



12

## 教科指導との連携 一文献探索講座

国際探究Ⅰ、Ⅱ、グローバルイシュー（学校設定科目）で開催

学校図書館蔵書管理システム活用方法

県立図書館・市立図書館との相互貸借

Google scholarを使った論文検索

検索語の選び方

参考文献の使い方

奥付の見方

レファレンスサービスなどについて紹介



13

## 教科との連携 一国際探究

レファレンス事例

・ヴィーガン、ベジタリアンなど近代の食文化について知りたい。

・アフリカ（できれば北アフリカ）の農業や農園開拓の歴史について知りたい。

・セチガルについて良く笑気にあたたくない。

・移民族（南アフリカ）についての資料がほしい。

・食の安全性について調べている。食べものが原因で起こる食中毒の原因、その背景などを具体的なデータがほしい。（アジアやアフリカが多いのか、知識不足で起きるのか、など。）

・西アフリカの手始め等についてデータがほしい。

・クロアチアの生態地図について知りたい。

・米を使った食べ物についての資料がほしい。

・アカモクが水質改善するという根拠となる資料がほしい。



14

## 教科との連携 一英語（リーディングマラソン）



15

## 教科との連携 一国語（新書レポート・詩歌）

新書レポート  
高校1~3年生で実施  
選書などにあわせて新書を選ぶ  
要約と感想でレポート作成

いつも心に  
あることは



詩歌の調べ学習  
詩人・歌人・俳人の調べプリント作成  
作品に多く触れる

16

## 教科との連携 一中等部



J. E. Communication

- ・古典のブックトーク
- 並行訳書のため「更級日記」などを紹介
- 生徒が遊び、読んで紹介カードを作成
- ・よみかがせ会
- 英語の絵本を交えて園児へよみかせ
- ・新聞スピーチ
- まわしよみ新聞の作成
- 総合学習
- ・雑集調べ
- レポートへの資料アドバイス
- クリエイティブ・サイエンス
- ・科学・技術分野の調べ学習

17

## 中高交流

企画を出し合う委員会活動

自由な発想の中等部  
相談にのる高校生



進路決定者によるブックトーク

3名による決勝戦を中等部へ公開  
30名の参観・投票

チャンプのテーマ：辞書（言語の研究）



ビブリオバトルでの交流  
バトルのあとでの質問、助言  
本についての感想交流

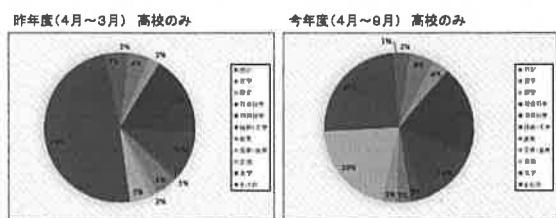
124

## 成果① 読書の幅の広がり



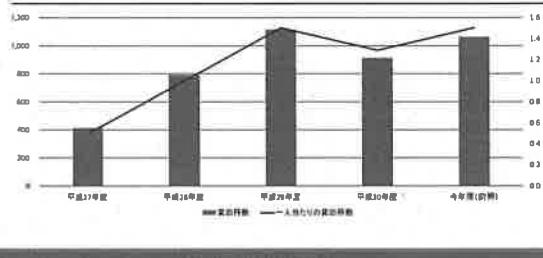
19

## 統計での比較 分類別貸出冊数



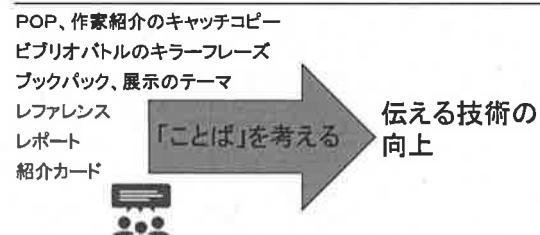
20

## 統計での比較 貸出冊数(5か年)



21

## 成果② 磨きあう「ことば」



22

### 成果③ 資料活用能力



23

今後の課題

- ・継続的な読書の支援  
図書館で本を借りる、読むことの習慣化  
→ 読書の時間のない生徒にどうアプローチしていくか
  - ・図書館環境の改善  
居心地のいい空間、授業でも使いやすい図書館  
→ 書架の増設、蔵書管理システムの効率的な活用



24

## **V. 平成 27~31 年度文部科学省指定 スーパーグローバルハイスクール事業**

# 秋田南高校スーパーグローバルハイスクール(SGH)事業の概要

教諭 關 友 明

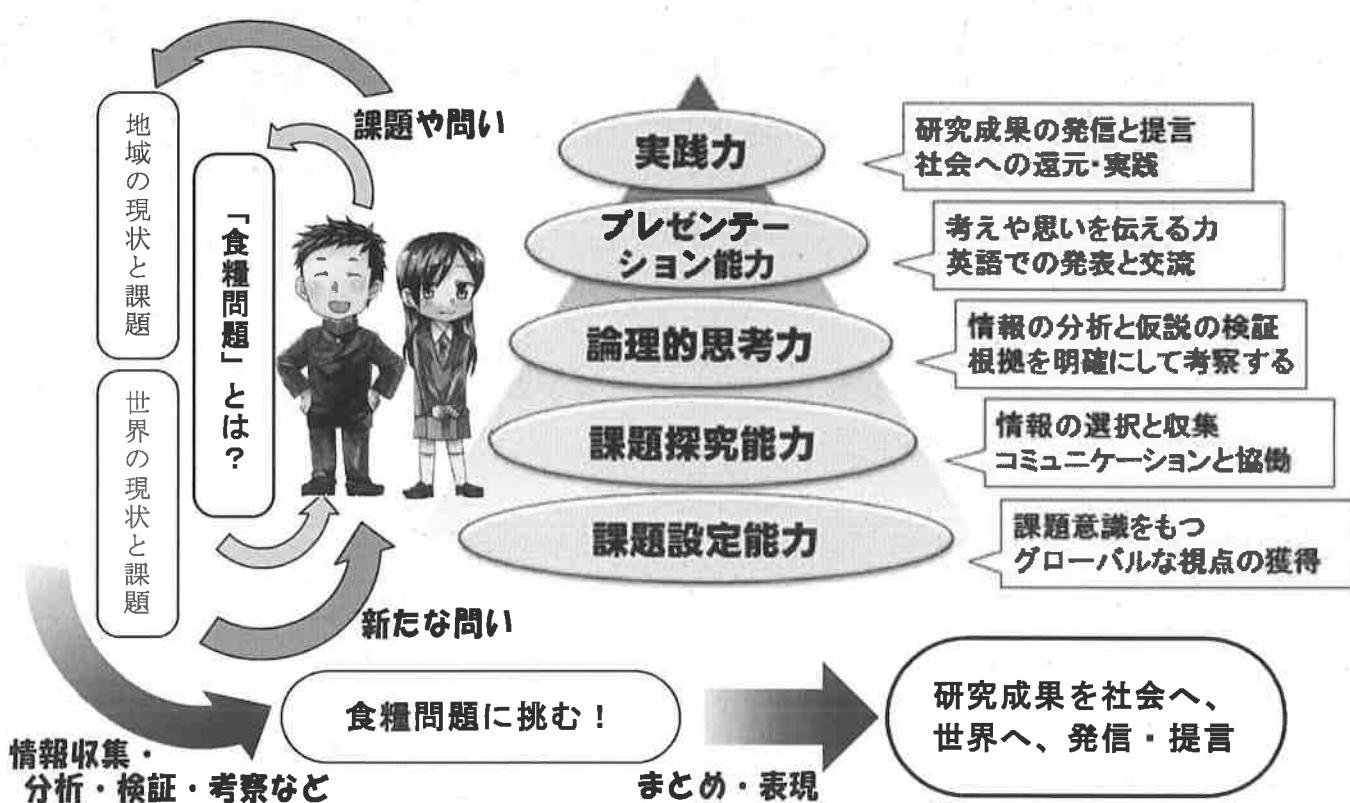
## 1 はじめに

本校は、平成27年度より文部科学省のスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定されている。また、平成28年度より中高一貫教育校として新しく生まれ変わり、その基本理念として「郷土や国家を支える高い志と国際的な視野を備えたグローバルリーダーの育成」を掲げている。この基本理念は、SGH事業の趣旨とも合致しているところである。

本校が育成を目指す「グローバルリーダー」とは、グローバルな視点から世界と郷土を見つめ直し、それらの課題を論理的に考察し、解決策を考えるとともに、社会に向けて発信や提言していくことができる人間である。具体的には「課題設定能力」、「課題探究能力」、「論理的思考力」、「プレゼンテーション能力」、「実践力」の5つの能力を身に付けた人物と捉えている。

こうした資質・能力を磨き、身に付けていくため、本校のSGH事業では、国内外の大学・高校や研究機関・企業等と連携しながら、問題解決力を育成するための授業研究・カリキュラム開発と、生徒の探究的な学習である課題研究を行っている。特に課題研究では、学校設定教科「国際探究」を設定し、郷土や日本の課題と、世界規模の問題を結び付けるグローバルなテーマとして、秋田の地域特性を生かしながら、「世界の食糧問題」の解決を掲げている。

## 2 本校が設定するグローバルリーダーに不可欠な5つの能力



### 3 本校のSGH構想

(研究開発構想名)

#### 「こまちの里」秋田の高校生が、「地球村」の食糧問題に挑む！

中高一貫教育校として新生した秋田南高校の基本理念  
郷土や国家を支える高い志と国際的視野を備えたグローバルリーダーの育成

#### グローバルリーダーの育成

##### 課題研究 「国際探究」

##### 問題解決力 育成授業研究

研究開発の  
三本柱

#### 国内外の大学や研究機関との連携

タイ  
・Bangkok Christian College  
・MahaSarakham Univ.  
Demonstration School  
・Dara Academy  
  
オーストラリア  
・St.Bridg's Catholic College

国際教養大学  
秋田県立大学  
秋田大学  
秋田県教育委員会

秋田経済研究所  
ジェトロ秋田事務所  
秋田市役所  
秋田県庁  
研究機関・NPO・企業等

##### (1) 生徒の課題研究 学校設定教科「国際探究」

学校設定教科として、高1～3の各学年で、グループでの探究活動を実施する（高1は全員履修。高2からは選択）。研究テーマは、研究開発構想に基づいて、世界の食糧問題についての課題解決を目指すものとする。その際、農業県である秋田の立地を生かし、地域の農や食の特徴や課題を見つめなおし、秋田県との交流もさかんなタイや世界各国の農と食のそれらを調査しながら、「世界の食糧問題」の解決策を提言するものとする。

##### (2) 教員の問題解決力育成授業研究

グローバルリーダーに求められる5能力の育成を目指す授業を、本校では「問題解決力育成授業」と呼んでいる。課題研究以外の通常の教科においても、探究学習的な要素を取り入れた授業改善を進め、日常の授業を通して、生徒のグローバルリーダー育成を進める。

##### (3) SGUなど国内外の各大学や研究機関等との連携

上記の課題研究と授業改善について、スーパーグローバル大学(SGU)である国際教養大学をはじめとした県内の3大学と連携し研究開発を行う。各大学からは講座講師派遣などのほか、特に国際教養大学とは、大学生や留学生との交流を通じた生徒の英語コミュニケーション能力向上について、また、秋田県立大学とは「世界の食糧問題」に関わる専門的見地からの指導について、さらに秋田大学とは教職大学院と連携した教員研修について連携する。なお、大学以外にも秋田の教育力を生かし、地域のシンクタンクや研究機関、企業や行政機関など、多様な連携機関の協力を得て、実践的な活動となるようにする。

## 4 課題研究 学校設定教科「国際探究」について

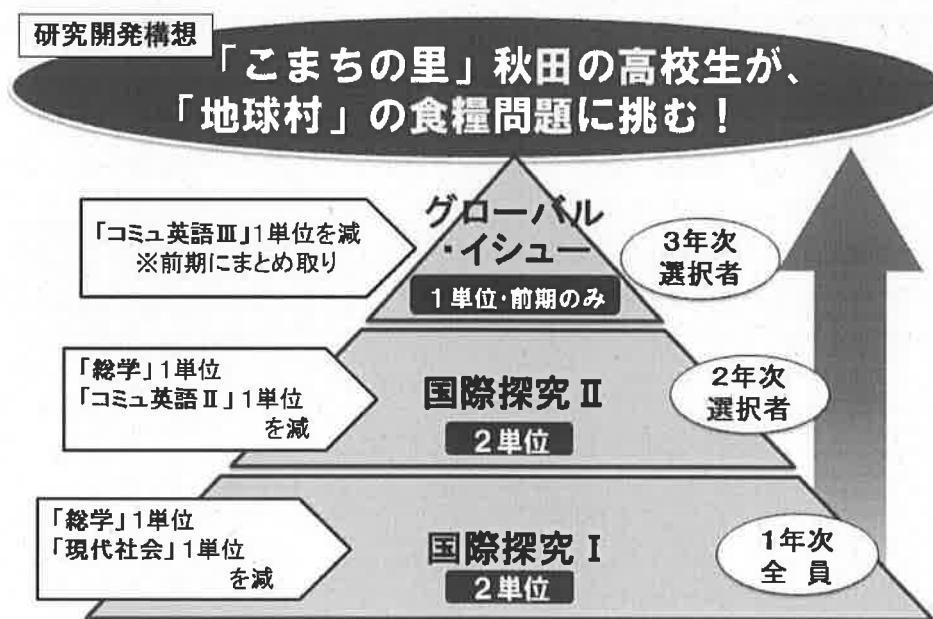
### (1) はじめに

本校は、平成28年度に中高一貫教育校として新しく生まれ変わり、その基本理念として「郷土や国家を支える高い志と国際的な視野を備えたグローバルリーダーの育成」を掲げている。この基本理念は、国のSGH事業の趣旨とも合致しているところである。

本校が育成を目指す「グローバルリーダー」とは、世界規模の問題を明確に意識して、日本の現状や郷土の課題を、海外と比較検証しながら、論理的に考察し、世界全体のために解決策を考えていくことができるグローバルな視点を備えた人間である。

そのため、課題研究のテーマは、郷土と日本の課題・海外の課題・世界規模の問題を結び付けるグローバルなテーマである必要がある。質の高い農作物をはじめとする「秋田の農と食」の特長と課題を見つめ直し、秋田県との交流が盛んなタイをはじめとする「世界の農と食」のそれらを調査しながら、「世界の食糧問題」の解決策を提言する。「こまちの里」秋田の高校生にふさわしい、繊細かつ大胆な発想でグローバルなテーマを設定し、研究を通じて自己の生き方にその成果を反映させ、実際に社会に働きかけていく発信力や実践力を備えたバイタリティあふれる人間を育成するものとする。

### (2) 学校設定教科の構成



### 《学校設定教科「国際探究」》

- ① 1年次学校設定科目「国際探究Ⅰ」(2単位－木曜6・7校時) 全員
- ② 2年次学校設定科目「国際探究Ⅱ」(2単位－木曜6・7校時) 選択希望者
- ③ 3年次学校設定科目「グローバル・イシュー」(1単位－前期木曜6・7校時) ②の選択者が継続

### (3) 教育課程上の位置づけ

- ・1年次「国際探究Ⅰ」は、「現代社会」1単位と「総合的な学習の時間」1単位を減じて、2単位を実施。
- ・2年次「国際探究Ⅰ」は、「コミュニケーション英語Ⅱ」1単位と「総合的な学習の時間」1単位を減じて、2単位を実施。
- ・3年次「国際探究Ⅰ」は、「コミュニケーション英語Ⅲ」1単位を減じて、1単位を前期のみ実施。  
※2単位の必履修科目である「現代社会」の減単については、SGHによる教育課程の特例。

#### (4) 指導体制と授業の概要

- ・指導体制は、学年部職員を中心に配置し、多様な教科の教員が関わる形とする。
- ・時間割上、3学年とも同じコマ(木曜6・7校時)に設定し、配置教員数を確保するとともに、異学年交流(上級生による支援や下級生への成果普及等)もしやすい形にしている。
- ・研究グループは、個人の研究したいテーマに基づいて編成する。原則4~5名(最大6名)。
- ・学校設定教科として、数値による評定評価を行う。評価方法は、毎時間の最後に生徒が記述する振り返りシートをもとに3段階で評価。ループリック的な評価規準を作成。

#### (5) 各学年の活動の概要

##### ① 高1「国際探究Ⅰ」

1年生全員が履修。「課題設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」という探究のプロセスを一通り経験する。講座やフィールドワークを通して世界や地域の課題を発見し、その要因・背景を分析して解決策を考察する。論理的な思考を重視した探究と発表の機会を全員に設定している。

フィールドワークは県内と海外の2班に分かれて行う。県内はグループごとの訪問先を選定し、県内各地の大学・研究機関・企業等を訪問して見学調査やインタビューなどを実施。海外については、秋田県とのつながりの深い農業国タイにて実施。国際的に活躍する企業や公的機関を訪問するほか、マーケットでの現地調査などを行い、連携校(高校・大学合わせて3校)と交流する。事前・事後指導については、ジェトロ秋田事務所や県企画振興部国際課などの支援により、タイの現状を学ぶほか、連携校とのSkype交流や、以前の訪問先である国連WFPの日本協会による講座等を実施する。帰国後は英語による報告会を実施し、他の生徒に成果を還元する。2月に成果発表の機会としてプレゼン発表を実施する。代表班はステージにて、それ以外は教室にて発表を行うこととしており、全ての班に発表する機会を設けている。

##### ② 高2「国際探究Ⅱ」

2クラス約80名の選択科目となる。グループはそれぞれに希望するテーマに基づいて再編する。本校のテーマである食と農について、専門的な見地から研究を深めるため、秋田県立大学生物資源科学科の教員と本校の教員が連携して指導を行う。グループのテーマに合わせて2~3グループに1人ずつの割り当てとなり、年5~6回来校して直接指導にあたっていただく。研究の進捗状況の連絡等はメールやクラウドサービスを活用する。

フィールドワークは夏休み中に班ごとに実施。計画・準備など全て自分たちで行う(原則として公共交通機関を利用)。成果発表は、10月に公共ホールにて英語でのプレゼン形式にて発表会を開催。プレゼンにおける英語の指導は、複数配置されているALTが英語科教員と連携しながら担当する。生徒は、どのように表現すれば自分たちの考えが伝わるかを熟考し、表現力を磨く。その後、書いてまとめる成果として、研究成果を論文にまとめる。2月にコンクールとして優秀班を表彰する。

##### ③ 高3「グローバル・イシュー」

2年生からの研究を継続する。3年目の活動では、研究成果の発信と実践、社会貢献を目指す。市役所やJA、企業経営者など地域社会への発信と意見交換の場を設定する(グローカル・ミーティング)。また、英語での発信・交流の場として、ALTや留学生など外国人を対象とした国際意見交流会を実施。学校祭では有志生徒の自主企画として、ステージでの成果発表や意見交換、留学生との交流などを実施する。

これらの活動を通して実践力を育み、これまでの活動で得た知見を基に、研究成果を改めて論文にまとめ完成させる。各グループの論文は研究論文集として公開する。

# 本年度の高1「国際探究Ⅰ」について

教諭 木 村 太 郎

## 1 概要

昨年度同様、高校1年生全員が学校設定科目「国際探究Ⅰ」を履修した。指導には基本的に各クラス正・副担任があたり、海外フィールドワーク派遣生徒への指導は主に学年主任・副主任が行った。県内フィールドワークの指導は、訪問先に応じて、クラスを横断するかたちで担当職員全員が行った。

## 2 主な事業

### (1) 探究スキル講座

今年度初めて、探究活動の基礎的な能力を養うことを目的とし、4回にわたり「探究スキル講座」を実施した。内容は、協働力(講座Ⅰ)、課題設定能力(講座Ⅱ)、課題探究能力(講座Ⅲ・Ⅳ)である。各回で学んだことは、後に行われる専門講座の内容の事前学習、個人探究レポート作成のための情報検索、グループ別探究活動での協働などに生かされており、有意義な講座となった。

### (2) 夏休み個人探究レポート

グループ研究に入る前に夏休みの課題としてレポートを課した。夏休み明けに各クラスでレポート発表会を行い、それぞれが興味を持って取り組んだテーマを発表した。その後、それぞれのレポートからキーワードを抜き出し、興味の方向性が近い生徒同士で班編制をすることにつながった。班編制においては指導教員が助言を与える場面もあったが、生徒が主体的に取り組んでいた。

### (3) グループ別探究活動

夏休みの個人探究レポートをもとに編成した3~5人の班でグループ別探究活動を行った。もともと興味が近い生徒同士が組んだとはいえ、ひとつのテーマを設定する際には、意見の相違や衝突などもあり、容易にはいかなかった。それでも、時には譲り合い、また話し合いの中で新たな意見を生み出したりしながら、少しずつ班の団結力を深めていたようであった。

### (4) 県内フィールドワーク／海外フィールドワーク

県内:行き先を大きく県北・南秋田郡・秋田市内の3つにわけ、その中でさらに細分化し、学年所属職員が担当した。インターネットや書籍からは知ることのできない内容を学んだ班も多く、それまでの研究内容を深めるよい機会となった。

海外:昨年同様、タイ王国バンコクならびにマハーサーラカームで、「食」に関わる関係機関や企業の訪問、2校の高校への訪問を行った。今年度初めて訪問した国連FAOアジア地域事務所では、各班の研究テーマに関連して今後の研究を推進するための助言をいただくことができた。

### (5) 中間発表会／成果発表交流会

中間発表会にて、各クラスおよび海外フィールドワーク班が代表選考を行った。成果発表交流会では、各クラスから選抜された1班、海外フィールドワーク班から選抜された2班の計9班がステージ発表を行った。それ以外のすべての班も、各教室にて発表を行った。発表自体もこれまでの成果を活かした素晴らしいものであったが、質疑応答のレベルが高く、質の高い質問と、落ち着いて的確な応答のやり取りに、1年間の成長を感じた。

## 3 まとめ

指定最終の本年度、これまで4年間行ってきた内容を踏襲しながら改良を加え、探究スキル講座の実施や成果発表交流会への他校生徒の招待など、新たな取り組みを行うことができた。外部から講師を招聘する講座では、司会や講師誘導を積極的に引き受ける生徒が多く、国際探究Ⅰの諸活動を通じて主体性が育まれていることを実感した。5年間のSGH事業を通して築き上げた財産を、来年度から始まる新たな探究活動にどのように活かすか、引き続き検討が必要である。

# 本年度の高2「国際探究Ⅱ」について

教諭 戸 坂 圭 子

## 1 概要

昨年度の「国際探究Ⅱ」の選択者は、2クラス70名であったが、今年度はさらに増え、2クラス84名で活動を始めた。本校のSGH活動が対外的にも広く知られるようになり、活動を楽しみに入学してきた生徒たちが、上級生の活動を目の当たりにし「国際探究Ⅱ」の選択を希望したことが主な増加の理由である。

人数の増加に伴い班数も増え、指導者8名が2～3班を指導する体制となった。指定5年目で、以前に「国際探究Ⅱ」指導経験がある指導教員が複数いたこともあり、指導者が個性を活かしながら様々な工夫を主体的に行い、その指導方法を指導者同士で共有し積極的に指導にあたった。また、秋田県立大学の担当者と積極的に連携し、他大学の研究者を紹介してもらいSkypeでインタビューを行う場を設定するなど、フィールドワークに加え新たな調査活動を行うことができた。

昨年度同様、本校で導入しているクラウドサービスClassiに、班担当と県立大担当者を含めたグループを班ごとに作成し、Classi上でデータを共有できる環境を整えた。班によって利用頻度に差が見られるものの、昨年から利用していた県立大担当者は生徒と活発に情報交換していた。

## 2 生徒の主体性を促す活動

### (1) 校内成果発表会後の公開成果発表会までの活動

校内成果発表会で選考された6班が公開成果発表会でのプレゼンテーションに向けて、さらに充実した活動ができるように、発表会後に時間を確保し互いのプレゼンテーションを見せ合った。他の班のプレゼンテーションを見ることで、自分たちのプレゼンテーションを客観的に見つめ直すことができ、改善に向けて主体的に活動することができた。選考されなかった12班は、先輩たちのポスターを活用し、それぞれの良い点悪い点を確認し合い、自分たちのポスター作成に活かすことができた。2つの異なる目標に向けて、2週間という短い期間ではあったが主体的な活動を促すことができた。

### (2) 各種外部大会への参加に向けての活動

公開成果発表会で最優秀賞に選ばれた班は、「WWL・SGH×探究甲子園」に挑戦した。締め切りまで時間がない中、書類を整え応募し、3年ぶりにプレゼンテーション部の予選を突破することができた。その後も本戦に向けて探究を進め、2月には秋田県SSH指定校合同発表会でプレゼンテーションを行うなど、積極的に活動した。公開成果発表会で優秀賞に選ばれた班は、「全国高校生フォーラム」に参加し、ポスター発表を行った。インフルエンザが流行する中、欠席者が出ても発表できるように1人の分担量を増やして取り組んだ。また、AKITAグローバルネットワーク事業指定校の「GN研究発表交流会」が本校を会場に行われることになり、ポスター発表を希望する班を募ったところ、7班が発表を希望した。当日は新型コロナウイルスの感染防止のため中止になったが、本校生だけで7班のポスター発表を行う機会を作った。どの班もしっかりと準備して臨んでおり、今後校内でもポスター発表の機会を設けたいと思った。新型コロナウイルス流行の影響で様々な外部大会が中止になり、それらの会での発表の機会は失ったが、参加に向けて活動したことが、生徒たちの成長に大きくつながったと実感した。

# 本年度の高3「グローバル・イシュー」について

教諭 林 克至

## 1 実践・発信活動「グローカル・ミーティング」

この事業のねらいは、地域社会に出向き、食糧問題解決の具体的提案を発信し、意見交換などを通して社会参画を行う実践力を身に付けることである。今年度もまた、秋田市役所や地元企業経営者の方々に協力していただき、専門的立場からの的確な助言や激励を頂戴した。今年度は2クラス15班69名での実施であったため、年度当初から各班が設定したテーマと外部担当者とのマッチング状況が懸念されていたが、秋田市役所での実施に際しては、企画調整課の担当者が訪問する9つの班への事前準備や当日の対応を適切に行ってくださいました。また、本校での実施に際しては、地元企業経営者の方々が専門分野以外のテーマであっても担当を引き受け下さり、個人としての感想に加え、費用対効果や市場へのアピールなど経営者視点での助言をいただいた。

これまで本校が構築してきた校外の方々との関係性などから、実施日当日の運営に関する問題はほとんど見られなかつたが、今後より一層の充実を図るためにには、より分かりやすい要旨や発表資料データを実施日10日程度前に伝えるなど、外部担当者の準備期間に配慮することが必要であると考える。

## 2 自発的な外部発表・実践と今後の課題

今年度は「雪下野菜」をテーマとした9班が公立大学法人秋田公立美術大学とNPO法人アーツセンターあきた主催の「高校生クリエイティブキャンプ2019」に参加し、自分たちの提案を実現させる活動に尽力したほか、「米ぬかの活用」をテーマに掲げた11班がユネスコ国際理解ユースセミナーに招かれ、他校の生徒とSDGsに関する協議を行うなど、昨年度と同様に探究活動の成果を外部で発表する活動に積極的に参加した。

その一方で、本校留学生6名に向けて、各班が探究内容をプレゼンテーションする「国際意見交流会」では、読み原稿から終始目を離さずに発表を行うなど、これまで積み重ねてきた表現力を充分に發揮していない場面が見られた。自分たちの探究内容を正しく伝えることを意識したうえでの行為であるとは思うが、この2年間の取組を見続けて立場としては、若干の物足りなさを感じた。試行錯誤しながらも、聞き手との状況に応じたコミュニケーションをとろうとする気概を、継続して身に付けさせたい。



高校生クリエイティブキャンプの一環でラジオ番組に出演する9班



ユネスコ国際理解ユースセミナーで他校の生徒と発表する11班



今後は失敗を恐れずにプレゼンテーションする姿勢が求められる

# 令和元年度 国際探究Ⅰ 成果発表交流会

教諭 木村太郎

【日時】 令和2年2月27日(木) 午前の部:8:40~11:30 午後の部:12:30~15:45

【場所】 午前の部:高校1年生各教室  
午後の部:中等部体育館棟 アリーナ

【目的】 令和元年度SGH事業「国際探究Ⅰ」の集大成として、探究活動における調査や考察したことの発表を行って、プレゼンテーション能力や論理的思考力等の伸長を図り、発表参観や質疑応答を通して交流するとともに、研究の成果を広く発信・普及する。

【内容】 午前の部:県内フィールドワークで探究活動を行った55班のうち代表班7班をのぞいた48班と、海外フィールドワークで探究活動を行った5班のうち同じく3班の、計51班が6教室に分かれ、7分の発表と5分程度の質疑応答等を行う。なお、海外フィールドワークに参加した班は英語で発表・質疑応答を行う。各会場で1班を優秀賞として選出する。

午後の部:中間発表会で選出された各クラス代表7班と、海外フィールドワーク組代表2班の、計9班が、7分の発表と5分程度の質疑応答等を行う。なお、海外班を含めいくつかの班は英語で発表・質疑応答を行う。最優秀賞・優秀賞・第3位を選考し、上位2班は「東北地区SDGs課題研究発表フォーラム」で発表する。

【参観】 午前の部:2年D・E組生徒  
午後の部:2年D・E組生徒、中等部3年生、秋田県教育委員会、SGH運営指導委員、連携機関代表者、参観希望保護者

【連携】 秋田県立大学、ソフトアドバンス株式会社、秋田県国際課、県内フィールドワーク協力機関等

## 【事業を振り返って】

午前中の教室発表では、どの班も他クラスの生徒や2年生の前での発表に緊張しながらも、研究の成果を立派に発表し、質疑応答も活発に行われた。午後の代表班によるステージ発表は、どの班も問題提起から解決策までしっかりと述べられていて、とても聞きやすく、内容の濃い発表だった。研究内容、プレゼンテーションの技術はもちろん、日本語、英語での聴衆からの質問、それに対する発表者の応答など、どれをとっても年々レベルが上がっており、5年間のSGH指定で培ってきた探究活動の成果を十分に発表できたのではないかと考える。



教室発表の様子



アドバイスする2年生



活発に行われた質疑応答



午後の会場の様子



代表班によるステージ発表



表彰式の様子

【成果発表交流会 選抜された9班の発表テーマ】

発表1 「日本の稲作技術で南スーダンの飢餓を救う」

1C6班 中村蓮 鈴木ちえり 田口莉佳

発表2 「アプリで創る『食品ロスのない世界』」

1E1班 花岡周来 荒川侑輝 審田真悠

発表3 「Solving Food Loss in Pakistan by Japanese Fermentation Techniques」 【英語での発表】

**第3位**

海外3班 佐藤萌香 斎藤琉那 笛木悠慎 菊地まゆか

発表4 「高齢者の栄養不足を“雑穀”で改善する」

1G7班 蝶田華 伊藤英夫 高橋天 根元はな

発表5 「INTECH」 【英語での発表】

1B7班 菅原愛実 一関柊太 川上航平 福田遼空 元木陸人

発表6 「PsbSを使ってガーナの食糧問題を解決する」

1A2班 乾拓志 嵐峨丈太郎 三浦日向 山上陽向

発表7 「先進国よ、“粉”に頼れ！」

1F7班 鎌田璃珠 相川実華子 二木雄大 梁田侑花

発表8 「Increasing Thai Fishermen Income by Selling *Tsukudani*」 【英語での発表】

**最優秀賞**

海外1班 藤原菜摘 高橋乃愛 森川隼斗 三浦萌花

発表9 「ホワイトソルガムを用いて北米の肥満問題を解決する」

**優秀賞**

1D7班 天野祐晴 金田莉里 佐々木千寿 高橋莉子 テボラ・サレン

## 【生徒の振り返りから】

### (1) 成果発表交流会(午前の部)

- 日々重ねてきた研究を発表することができ、緊張したが楽しかった。多少のミスはあったものの、プレゼンは成功させることができた。研究はまだ終わりとは言えないので、授業外でも継続して研究したい。
- 今日は班員が一人欠席するという不測の事態が発生したもの、補って発表することができた。これは今後の強みになると思う。
- 他クラスの班の発表を初めて聞いて、目の付け所がおもしろいと思う発表がたくさんあった。扱う問題の種類も様々で、今まで知らなかつたことをたくさん知ることができた。
- 発表は上手くできたが、質問に対する答が上手くいかず、悔しかった。自分の英語力不足を痛感した。この悔しさを忘れず、今後英語力を向上させる努力をしたい。
- どの班も仮説→結果→考察の内容が深く、興味深かった。先輩から具体的な数字があればもっとよくなるというアドバイスをいただいたので、2年次の研究はより現実的になるように調査を進めていきたい。
- 海外グループの英語の発表は、同学年とは思えないスピーチング力に感動した。英語力や人を惹きつける発表を聞いて、私ももっと人前で上手に話せるようになりたいと思った。
- 「相手に届く発表をする」という目標を、声のトーン、ピッチ、アイコンタクト、話すスピードに留意して達成できた。質疑応答では質問の意図を理解して自分の意見を述べることの難しさを痛感した。
- クラス発表の時とは違った視点からの質問が多くて良い刺激をもらえた。特に2年生の質問やアドバイスは的確すごいと思った。私も1年後にはそうなれるように、これまでの経験を活かして頑張りたい。
- 2年生の質問は私たちとは全然違う視点から見ていてすごいと思った。私たちの中では当たり前と思って深く考えていなかつた問題や全く頭になかつたことをピンポイントで突いてきて、深く考えさせられた。
- 今日の発表まで準備には大変苦労したが、探究の成果を十分に示すことができた。同じ班で活動を共にした4人に感謝するとともに、探究を通して学んだことや経験したことを今後に活かしたい。

### (2) 成果発表交流会(午後の部)

#### ○発表者

- どのようにプレゼンテーションをすれば興味をもって聞いてもらえるかを考えて練習してきたので、その成果を發揮できてよかったです。英語の質疑応答は、質問の意味を理解できても、答えるのが難しかった。
- 4人中3人が運動部で忙しい時期もあったけれど、フィールドワークや関係企業への質問を通して新しく秋田の魅力に気付くことができた。
- 本番で話す内容が一瞬飛んでしまったが、それも乗り越えて最高の発表をすることができた。課題解決に向けて班で挑んできた時間は有意義だった。今後も探究心を絶やさず様々な活動に挑戦したい。
- これまでの探究やプレゼンテーションの練習を通して自分自身成長できたと思う。国際探究を通して学んだ探究する力、答のない問題に対してしっかり考える力を、これから的人生に活かしていきたい。
- 最優秀賞をとれた！今まで研究や発表の練習を頑張ってきてよかったです。海外FWで色々な経験をさせてもらったことはすごく大きいし、人やチャンスに恵まれていたからこそできた研究だと思う。

#### ○参観者

- 代表班の発表を聞いて、内容が充実しており、また発表の仕方も上手だと思った。英語で発表している班は、全員がとてもなめらかに英語を話すことができていて憧れた。
- 午後の代表班の発表を見て、実践して得たデータが有効に使われていて、グラフも見やすく、これが私たちの班に足りていないものだと感じた。
- 代表班の発表者は、堂々と発表していて、2年生からの質問にも堂々と答えていた。私も自信をもって英語のやり取りができるように、英語の力をつけたい。
- 代表班の発表を聞いて、今の世界の問題や課題、どうしたらそれを解決に導けるかについてヒントをもらうことができた。どう発表したら聞いている人が理解しやすいかも学ぶことができた。

## 令和元年度 国際探究Ⅱ 公開成果発表会

教諭 戸坂圭子

【日時】 令和元年10月24日（木） 14：00～

【場所】 秋田県児童会館みらいあ 子ども劇場 けやきシアター

【目的】

・「国際探究Ⅱ」での探究成果を発表するとともに、参観者との質疑応答を通して探究内容を深める。

【内容】

- ・SGH課題研究「国際探究Ⅱ」選択生徒の代表6班が、研究成果を英語で発表し、参観者との英語での質疑応答を通してプレゼンテーション能力と英語コミュニケーション力を高め合う。
- ・発表時間は10分、質疑応答は5分とする。時間超過は審査規準には抵触するが、これまでの成果を発表するという観点から、10分を超えて発表は最後まで行われる。
- ・代表6班以外のグループは、研究内容を英語でまとめたポスターを会場内に掲示する。

【参観者】

秋田南高校 高2年D E組（約80名）、高2年A B C F組（約145名）

高1年（約215名）、中等部3年（約80名）、教員（約50名）

AKITAグローバルネットワーク（GN）事業指定校生徒・引率教員

（横手清陵学院高校はSkype視聴のみ）

大館国際情報学院高校（42名）・能代松陽高校（33名）・由利高校（27名）

来賓 運営指導委員・教育委員会・連携機関・本校関係者等（約10～15名）

一般来場者 連携機関・FW先・県内他校教員等（約20～30名）

本校保護者（約30～40名） 計 750～770名

【評価の規準と評価の観点】

1 テーマ（課題設定能力）	本校の研究構想（『こまちの里』秋田の高校生が、『地球村』の食糧問題に挑む！）に沿って、明確な課題意識をもってテーマを取り組んでいるか。
2 内容（課題探究能力）	課題について基礎的知識をもち、課題解決のために必要な資料・データを適切に用いているか。
3 考察（論理的思考力）	資料・データをもとに論理的に主張を展開し、考察を深めたうえで、結論を導くことができているか。
4 表現（プレゼン能力）	発表の仕方などを含めて、聴衆をひきつけるような発表方法や表現手法の工夫をしているか。
5 態度・応答	時間内に発表し、また、質疑に対して誠実に応答しているか。

【審査員】

東北公益文科大学 学長（秋田南高校SGH運営指導委員）	吉村 昇 氏
聖園学園短期大学 教授（秋田南高校SGH運営指導委員）	五十嵐 隆文 氏
秋田県立大学生物資源科学部応用生物科学科 教授	秋山 美展 氏
秋田県教育委員会高校教育課英語教育推進班 副主幹（兼）班長	下橋 実 氏
秋田南高校・秋田南高校中等部 校長	眞壁 聰子

## 【発表要旨(発表順)】

### ① Group 16 【第三位】

「うま味物質」で解決！塩分過多

Solving Excessive Salt with "Umami Substance"

2D 酒井千桜 2E 犬塚友樹 加藤もえぎ 佐藤 匡 三浦真緒

本研究では、アジア諸国の塩分過多問題において、味増強効果のあるうま味物質と、醤油などの調味料を調理過程で組み合わせる減塩方法の有効性について述べる。うま味物質を用いた減塩方法が可能であるかを検証するために比較実験を行い、うま味物質を用いることで減塩をしても味を損なわないことが実証された。この結果を基にした日本での実践例、さらにそれを海外に応用したタイでの例についても述べる。

### ② Group 2

小さな栽培方法革命～ギニアの陸稻を変える～

Tiny Modification Makes Great Innovation ~Change Dry Paddy in Guinea~

2D 加藤真生 嶋田莉乃 2E 佐藤 凜 高安耀一朗 長谷部凌翔

ギニアでは乾期と雨期の降水量の差が激しく、主食である米、特に陸稻の収量が安定していないのが問題である。私たちはどうすればその問題を解決できるのかを考えた。大学教授やJICAの方との議論を経て、現地の詳しい状況や条播・プライミング処理などを行える可能性、機会均等の重要性が分かった。このことから、私たちが考えたいいくつかの解決策を組み合わせ、それをToTを行って広めることが有効であると考えた。

### ③ Group 1 【最優秀賞】

食育と養殖漁業を通してアフリカのタンパク質不足を改善する

Changing Africa with Education -A Solution to Solve Malnutrition-

2D 高橋美空 2E 小山杏奈 櫻田一史 中川華花 松沢旺介

アフリカでは栄養不足が深刻化している。その背景には、教育の不足により栄養の知識が得られず、穀物に偏りタンパク質が不足している食事を問題視していないことがある。本研究ではベナンを対象に、改善策として小学校での食育と養殖漁業を推進する。これは、過去のアフリカへの支援の失敗例を分析し、支援のあり方を改めて考えた提案である。この研究を通して、私たちが気づいた効果的・持続的な支援のあり方を発表する。

④ Group 10

ラオスの焼き畑農家への新農法の提案  
Proposing Advanced Agriculture in Laos

2D 伊藤紀彩 鈴木奏音 2E Byrne杏雅愛 橋本拓飛

ラオスでは食糧不足が深刻な問題となっている。その背景には急激な人口増加により焼き畑農業では食糧が追いついていないことが挙げられる。本研究ではフィールドワーク先で得た情報やNPO秀明インターナショナルから伺った実例をもとに最先端で持続的な「自然農法」を提案する。これを実践することで安定した収穫量が期待でき、食糧不足を解決できると考えた。

⑤ Group 18

ケニアの子どもの亜鉛不足をかぼちゃの種で解決する  
Save Kenyan Children by Pumpkin Seeds

2D 清水舞子 戸田咲 2E 池田優理 鈴木萌華 畠山委玖重

ケニアの農村部では、子どもの亜鉛不足が起きている。亜鉛不足は貧血や乳幼児の発育不良、下痢などの健康被害を引き起こす。そのため、医療環境の整っていないケニアでは深刻な問題であると考えられる。そこで亜鉛を多く含む食品を様々な条件のもと比較し、かぼちゃの種がケニアに適当な食物であるとして提案する。また、現地で食べられているものに加えることで手軽に亜鉛を摂取でき、亜鉛不足の解消につながると考察する。

⑥ Group 9

ベトナムの赤潮による漁業被害を予防する  
Prevent the Red Tide in Vietnam

2D 佐藤海里 藤村彰太 2E 佐々木詩菜 夏井颯太

ベトナムでは深刻な漁業被害が恒常的に発生している。本研究では、その原因である赤潮を防ぎ漁業被害を減らすために、「ぎばさ」をベトナムの海で養殖し、その水質浄化作用を用いて富栄養化を予防するという方法を提案したい。「ぎばさ」の高い水質浄化能力や、他の海藻にはない利点などの面から、秋田県民になじみの深い海藻「ぎばさ」を用いた漁業被害への対策法について述べる。

## 【事業を振り返って】

今回の発表会ではAKITAグローバルネットワーク事業指定校である大館国際情報高校、能代松陽高校、由利高校の皆さんを会場に迎え、横手清陵高校には発表や会場の様子をSkypeで伝えるという形で交流した。昨年同様、質疑応答でのコーディネートを含めた司会進行を本校生徒が務めた。事前に司会進行役の生徒を公募したところ、6名の生徒が英語司会に、1名の生徒が日本語司会に立候補した。昨年の先輩の姿が生徒の意欲を引き出したと思う。

発表では各班ともこれまでに積み重ねてきた探究の成果を存分に發揮した。また、発表後ALTやフィールドワークでお世話になった方々から鋭い質問が英語でなされたが、質問内容を理解し誠実に応答している姿が見られた。これまで公開成果発表会を参観してきた運営指導委員の方からは「毎年、今回の発表がこれまでで最高だと思える。南高生だけでなく他校生もレベルアップするような取り組みを期待する」との評価をいただいた。

最優秀賞の1班はWWL・SGH×探究甲子園（兵庫県）で口頭発表を、優秀賞9班は全国高校生フォーラム（東京都）でポスター発表を、第三位の16班は、東北地区SGH課題研究発表フォーラム（宮城県）で口頭発表を行う。

## 【生徒の振り返りから】

- ・この半年間でたくさん調べていろいろな人に話を聞き、うまくいったりいかなかったりしたことを10分以内にまとめるのは苦しかったが、自分たちの伝えたかったことを聴衆に響かせることができたと思う。これまで一番のパフォーマンスができた。多くの方々から評価していただいたので、嬉しかった。
- ・普段感情を大きく出している人ほど表現力があると思った。自分も普段から感情を表に出したい。
- ・本番は上手くいかないと気づく発表会になりました。自分のことだけに集中し、相手に伝えることを第一にすることを忘れていたような気がします。相手と会話をしているように発表した方が良かったと思った。英語力においても質疑応答で上手く答えられず、英語の「話す」力が足りないと感じました。
- ・代表班にならなかつたが、公開成果発表会に向けてポスター制作を頑張った。他の班のポスターを見て自分の班にはない工夫や図の配置など非常に参考になった。
- ・瞬時に相手の質問を理解し、それに対する答えを即座に応える様子に衝撃を受けた。
- ・客席からの鋭い質問に何度も聞き返しながら努めて答えようしたり、せりふを忘れてしまつてもあきらめずに発表を続けたり、横からサポートするチームメートの協力が印象深かった。
- ・質問者と回答者の認識がズれたままだった質疑応答があった。自分の質疑応答を振り返っても焦つて相手のいうことを理解しないまま回答し、的外れな返答をしていたのではないかと思った。次の機会にはきちんと対応できるようにしたいと強く思った。



司会進行と質疑応答の  
コーディネートを担当した生徒



最優秀賞に選ばれた  
1班の生徒の発表



ALTの先生からの  
質疑応答の様子

# 本年度SGH事業 研究開発の成果と課題

教諭 關 友 明

本校の開発構想調書で掲げた目標は以下の2つである。

- ①身近な事象と世界全体の問題を結びつけながら、積極的に課題を解決していくこうとする態度・姿勢の育成。
- ②グローバルリーダーに不可欠な「課題設定能力」、「課題探究能力」、「論理的思考力」、「プレゼンテーション能力」、「実践力」の5つの能力の育成。

これらの目標の達成・進捗状況について、本校SGH事業の取組を検証し、成果と課題について述べる。

## 1 令和元年度の成果と課題

(1)アンケートによる検証（※集計結果は「秋田南高校SGH研究報告書(第5年次)」に掲載）

### ①生徒アンケート

#### ○「国際探究Ⅰ」高1全員 回答数231(SGH対象者237名)

グローバルリーダーに不可欠な能力の成長について、ほぼ100%の生徒が肯定的な回答を示した(Q1～5)。課題設定能力や課題探究能力について(Q2、3)、昨年度は、肯定的な回答は97%以上ではあったものの、「大いに身に付いた」「非常に高まった」という回答が5割以下と少なかった。しかし今年度はそれぞれ63%、68%と改善が見られた(肯定的な回答はそれぞれ100%、99%)。活動の初期段階で課題設定や調査の手法について、「探究スキル講座」を実施して全体に指導した成果と思われる。また、英語への関心についても意欲の高まりが見て取れた(Q6、7)。海外志向の高まりについても、昨年度から10ポイント以上上昇した(Q11⑤)。また、自由記述でも、SGHについてネガティブな記述は見当たらず、活動を通して自身の成長を実感していることや、その力を今後の学習に活かしていくこうという意欲が見て取れた。

課題解決の態度・姿勢については、Q11の心の変化について、上位を「①秋田と世界とを結びつけて考えようになった」、「②秋田のことを考え、何かできないかと思うようになった」、「③世界のことを考え、何かできないかと思うようになった」の3つが上位を占めた。特に、③は過半数を超えており、多くの生徒にグローバルな意識が醸成されたことが見て取れる。さらに、Q12自己の変化について、複数回答の中の「④周囲の何気ない事象を自分なりに問題意識をもちながら見聞きするようになった」が昨年度の29%から40%に増加。「⑤新聞やニュースを鵜呑みにせず、客観的に考えたり調べてみるようになった」も46%と高い数値を示した。日頃から課題意識をもつようになったことが伺える。

#### ○「国際探究Ⅱ」高2選択生徒 回答数78(SGH対象者81名)

4期生にあたる2年生は、能力の高まりについて、昨年度、59～62%と低かった課題設定能力(Q1)や課題探究能力(Q3)が、約10ポイント向上した。この学年には、過去にSGHクラスの指導経験がある教員が多く入っており、経験を生かした指導が成果を上げたものと思われる。

しかしながら、Q7の行動の変化やQ11・12の気持ちの変化については、全体的に昨年度より減少傾向が見られた。ただし、この学年の生徒は入学時点ですでに探究学習への意識が高く、グローバルな視点をもった生徒が多かった。特にSGHクラスの生徒にその傾向は強く、1年生の頃と比較すると、能力的な成長は自覚できたものの、意識面・行動面では大きな変化を実感していないのかもしれない。その中で、自己の変化で大きな数値を示したのは「他の意見に耳を傾けるようになった」という項目である(65%)。自由記述を見ても、グループ活動において、異なる意見をもつ友人と協調しつつ、一つの方向に向かって活動していく術を学んだという意見が多く見られた。発表に向けた準備や論文の執筆など、グループで長く活動する2年生の探究学習においては、このような協働的な力が重要であり、アンケートからもそのことが伺えた。

#### ○「グローバル・イシュー」高3選択生徒 回答数69(SGH対象者69)

3期生にあたる学年。1クラス36名だった前の学年(2期生)と比較すると、能力の高まりや行動・気持ちの変

化の面など多くの指標で5~10ポイントずつ低い数字となった。2クラスとなったことも影響しているかもしれない。しかし、1年前の2年次の数値と比較すると、ほとんどの項目で数値が上昇しており、SGH活動を経て自身の成長を実感していることが見て取れた。特に、気持ちの変化の面(Q9)では、「①秋田と世界とを結びつけて考えるようになった」、「②秋田のことを考え、自分に何かできないだろうかと思うようになった」という生徒が6割近くと高い数値を示した。これは昨年度の2期生と比較しても大きく上昇している。グローカル・ミーティングなど地域に出ていく活動を経験したことが影響しているものと思われ、この取組は、地域に根差したキャリア教育としても有効なプログラムとなっているといえる。

## ②教員アンケート 回答数63

### ○SGHの有効性について

全教員が肯定的な回答であった(「大いに有効と思う」63%、「まあまあ思う」37%)。自由記述からは、生徒や卒業生の成長ぶりや活躍の実績などから有効性を認めるものと、活動の具体例を挙げてグローバルリーダー育成に資するものであるとするものがあり、この2つが多数を占めていた。一方で、2年次から選択制であることについて、平等でない、という指摘もあった。

### ○能力育成について

ほぼすべての教員が「特に効果が大きい」としたのが、「言語能力や表現力・発信力」と「コミュニケーション能力・協働力」の2つ。どちらも95%以上の数字であり、上位に挙げていた。続いて挙げられていたのが、「研究力・探究力」、「多面的思考力・批判的思考力」で、ともに7割前後であった。それ以外についても、昨年度よりほとんどの項目で数値が上昇しており、教員が生徒の多様な成長を実感していたことが伺えた。

### ○事業の全体化・組織化の進展について

新任や中等部所属の教員を中心に「分からぬ」とする回答が3分の1を占めた。しかし、「全体化・組織化したと感じる」としたのは残りの教員の半数以下となる29%であった。3%、2%と少数ながらも「あまり感じない」、「全く感じない」という回答もあった。自由記述を見ると、「全職員が関わるようになり、組織的に進んでいる」、「職員間の理解と協力が進んでいる」とするものが多くたが、「関わる労力に差がある」、「忙しいのは一部のみ」、「負担がかかるのは特定の方」とする意見もあった。SGH事業が学校全体の取組として定着している一方で、教員の負担の偏りが課題であることが明らかとなっている。

### ○自身の変容について

最も多かったのが、「生徒の成長する姿をして、生徒のもつ可能性への期待が大きくなった」という項目(63%)。自由記述では、「生徒に寄り添い、我慢して待つようになった」とか、「生徒の主体性を重視してまだ成長できると感じるようになった」という意見が見られた。そして、「探究力や協働力育成を意識した授業改善に取り組むようになった」という項目が半数近くとなった。自由記述には、「グループワークで考えを深める場面を取り入れた」とか、「毎時間、振り返りの時間をとるようにした」など、それぞれが授業改善に取り組んでいることが伺えた。実際、今年度は授業公開は行わなかったが、各教科で多様な授業実践の取組が見られた。

### ○指定終了後について(自由記述)

「総合的な探究の時間」において、課題研究の活動を継続することが決まっている状態でのアンケートであったが、「今までのノウハウを生かして探究を深めたい」、「将来の進路に結びつく活動になるとよい」などの前向きな意見が多くを占めた。一方で、「活動のねらいや方向性について職員全体の共通理解が必要」や、「担当教員の負担過重を避ける配慮が必要」という意見も少なくない。

指定当初は、教員もどのように探究学習を進めたものか、戸惑いながら手探り状態で取り組んできたが、目の前の生徒を指導していく中で、生徒が大幅に成長していく姿に触れて、どのような能力を育成するか、どう指導し、評価するかを考え、次第に身に付けていったといえる。教師自身にこのような変容が見られたことは、アン

ケートのQ1、6、7、8などから明らかである。また、年々、事業に関わる教員が増えたことによって、教員同士が相互に影響を与え合い、取組が広がっていったと思われる。

しかし、一方で、業務の偏りに対する指摘がある点は無視できない。2・3年生で選択制となっていることで、教員の関わり方に偏りがあるのは確かである。また、事業全体の担当者や、各学年の主担当を務める教員の仕事量が多いことも否めない。しかしながら、指定終了後の来年度からは、全生徒を対象として探究学習を進めることとしている。全職員で負担を少しづつ分担しながら、この5年間で得たスキルやノウハウを学校全体に広げ、活かしていく絶好の機会とどらえていきたい。

## (2) 特筆すべき成果・実績

○大学進学実績

SGHクラスの生徒は、多彩な活動実績と、SGHで育んだプレゼン能力を活かし、AO試験などでたような大学進学実績を残している。主なものを下に挙げる。

- ・東北大学 1名(法学部 AOⅡ期)
  - ・秋田大学(医学部医学科) 1名
  - ・国際教養大学 8名(AO6、推薦1、ギャップイヤー1)
  - ・早稲田大学 2名(社会科学部 AO1、国際教養学部 推薦1)
  - ・慶應大学 1名(総合政策学部 AO) など

#### ○各種外部大会・イベント等への参加や受賞実績

今年度、2年生の最優秀賞を受賞したグループが「WWL・SGH×探究甲子園(旧SGH甲子園)」プレゼンテーション部門での本選出場を決めた。本校グループの本選出場は、「優勝」した平成28年度以来となる。残念ながら、直前に新型コロナウイルスの影響で開催中止となってしまったが、これ以外にも、今年度多くの機会で生徒が活躍を見せてくれた。また、様々な課外活動に取り組む生徒も多かった。主なものは以下の通りである。

- ・秋田県高校生英語弁論・暗唱大会 弁論の部 1位(東北大会出場)、 暗唱の部 1位・3位
  - ・東北6県中学校英語暗唱・高等学校英語弁論大会 高等学校の部 2位(全国大会出場)
  - ・国際理解・国際協力のための英語弁論大会 秋田県代表選考会 1位(東北大会出場)・2位
  - ・アジアユースリーダーズ2019in ハノイ 参加(4名)
  - ・秋田県高校生米国語学研修 参加(3名)
  - ・高校生クリエイティブキャンプ2019 本選参加(4名)
  - ・山形東高校「Challenge ! 模擬国連 in 山東」 参加(6名)
  - ・秋田ユネスコ協会国際理解ユースセミナー 招待発表(4名)
  - ・北部ブロック8道県教育委員協議会 招待発表(4名)
  - ・From Project 秋田(7期・8期) 参加(計16名)
  - ・秋田市国際フェスタ 高校生ボランティア 参加(17名) など

#### ○英語能力の向上

英検合格者数は年々増加している。SGHクラスの生徒は、卒業までに7割以上の生徒が英検2級以上を取得している。SGHクラスは、課題研究の授業を設定するため、コミュニケーション英語Ⅱ・Ⅲの授業を1単位ずつ減じており、SGH事業開始当初は英語の学力低下が懸念されたのだが、実際には検定試験だけでなく、教科の成績でも他クラスを上回る結果を残している。

## 2 指定5年間の成果と課題

### (1) 成果

#### ○目標達成状況

本校では、構想調書で掲げた2つの目標について、概ね達成されたと考えている。

1つ目の「身近な事象と世界全体の問題を結びつけながら、積極的に課題を解決していくとする態度・姿勢の育成」については、生徒の意識アンケートにおいて、明らかな変容が見て取れる。さらに、授業や課外活動に対する生徒の積極的な行動が増えたことからも、このような態度・姿勢が定着してきたことが伺える。また、SGH事業を経験した卒業生たちが、少しずつではあるが、地域や世界の課題解決に向けた実践に取り組み始めている。

2つ目の「グローバルリーダーに不可欠な5能力の育成」についても、生徒が自身の成長を実感していることがアンケートから見えている。また、外部発表会等での実績や、運営指導委員会からの評価などからも、本校のSGHプログラムを通して各能力が伸長してきていることがいえるだろう。

これらのことから、上記の目標は達成できたものと考えており、これらの目標を達成するカリキュラムとして、研究開発の3本柱として掲げた、「生徒の課題研究・教員の授業研究・外部機関との連携」は有効であるといえる。以下、具体的なカリキュラムの有効性について述べたい。

#### ○課題研究の指導について

課題研究の活動においては、生徒同士の協働的な場面が多くを占める。自分と異なる多様な意見から考えを広げるとともに、ディスカッションを通して自らの思考を文章化することで、生徒は考えを深めていく。そのような活動において、本校では教員が直接研究内容について指導する場面はあまり多くない。本校の研究テーマが「世界の食糧問題」という、ほとんどの教科教員の「守備範囲外」のものであったこともあり、専門的な知識を授けることは難しく、大学教員など外部連携に頼ることとなった。結果として、本校教員の役割は、「課題は何なのか」、「どうして起こっているのか」、「主張に根拠はあるか」などについて、対話を通じて生徒に考えさせることが主となった。生徒に考えさせ、教員は聞く。そして、専門的な助言をもらう機会を設けたり、生徒がしっかりと調べることのできる状況をできるだけ整える。生徒の探究学習に対するこのような関わり方は、生徒の主体性を引き出すことにつながった。

#### ○各教科における授業改善について

各教科でも5能力の育成を意識し、授業改善が進んだ。課題研究における上記のような生徒との関わり方が生徒の主体的な学習を生んだことから、これらの手法は日常の授業にも取り入れられるようになった。各教科の特性に合わせて、多様な授業法が試みられた。その結果、授業において生徒に考えさせたり、発信させたりする場面が増え、まさに「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業づくりにつながっている。

#### ○外部機関との連携について

外部機関との連携は、年々拡大している。大学教員による専門的な講座や連携指導を通して、生徒は大学での学びについて、より深くとらえ、考えるようになった。課題研究で大学教員の指導を受けたことで、その大学や専門分野に魅力を感じ、志望するようになった生徒もいた。地域の企業やNPOなどとの連携も拡大している。地域の社会人の方々と触れ合うことで、生徒はこれまで知らなかった地域の魅力を知るようになった。「こんなに世界の舞台で活躍している人が秋田にいるなんて知りませんでした」と振り返りに書いた生徒もいた。地域と関わることで、働くこと、社会に出ていくことを生徒は強く意識するようになった。連携機関の方々を通して自分たちで人脈を築き、さまざまな課外活動にチャレンジする生徒も出てくるようになっている。

### (2)課題

生徒・教員へのアンケートから、いくつかの課題が見えている。

1つ目は、活動の全体化についてである。2年生以降、課題研究は選択履修として実施してきたが、選択生徒の成長が著しい一方で、他の生徒にも成果を広げる必要が指摘された。アンケートを見ると、2・3年生の非選択生徒の多くが「選択生徒の成長に驚いた」、「自分も同様の力を身に付けたい」、「刺激を受けている」という意見を書いている。「自分も選択しておけばよかった」という生徒も5~6%と少数だが存在する。こうしたことを見て、指定終了後は、探究学習をすべての生徒に導入することとした。

2つ目は、生徒の負担についてである。特に2年生以降にSGHを選択した生徒の探究に向かう意欲は非常

に高いものがあり、放課後や休日も費やして活動に取り組んでいた。特に成果発表会の前や論文の提出直前の時期は遅くまで活動に取り組み、家庭学習や部活動・生徒会などの特別活動との両立に苦しんだ生徒もいた。このような状況多くの生徒は前向きにとらえ、スケジュール管理の重要性に気付いたり、効率的な学習を進める力を身に付けたりしてはいたが、一部では、心理的な余裕がなくなり、グループの人間関係に影響が出るケースもあった。探究活動は、やろうと思えばどこまでも深めることができる学習活動であり、終わりがない。教員サイドで、学校の活動全体を見渡しながら、生徒をコントロールする必要があるといえる。

3つ目は、教員の負担についてである。生徒の探究に終わりがないということは、教員の関わり方についても同様である。放課後や休日など勤務時間を超えて生徒と一緒に活動に取り組む教員も少なくなかった。また、主担当となった教員への業務の偏りも大きくなかった。学年部など周囲の教員が負担を分担するよう心掛けてはいたが、どうしてもリーダーの負担は大きかった。特に外部連携機関等との折衝や、イベントの準備などは、突発的に発生するものもあり、仕事量増加の要因であったが、必要不可欠な業務であり、解消は難しかった。

これらの課題については、来年度以降の取組において改善を図っていきたい。

### 3 指定終了後の取組継続に向けて

SGH指定終了後も、本校の3つの取組（課題研究、授業研究、外部連携）は継続する。

#### （1）課題研究（探究学習）

課題研究「国際探究」をベースとして、下記のように変更を加えて実施する。

- ①「総合的な探究の時間」において、対象をすべての生徒として実施する。
- ②1年生は「国際探究」の通称で、テーマを食糧問題からSDGsに広げ、実施する。海外フィールドワークは行わない。
- ③2年生からは、コース選択制として、週2時間、大学教員の支援を受けながら専門的なグループ研究を行う「学術探究コース」と、週1時間、自身の関心に基づいて個人研究を行う「総合探究コース」に分かれる。
- ④研究テーマについて、2・3年生の「学術探究コース」では、社会課題や理数分野について、グローバルな視点から研究テーマを定める。「総合探究コース」では、将来学びたい学問分野について個人でテーマを定める。いずれも3年生まで継続し、発表・発信の機会を設け、相互に探究を深め合うようにする。

#### （2）授業研究

5年間を通して、教員の間に授業改善の風土が定着した。引き続き、校内授業研究会等を実施し、「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善の研究を続けるものとする。

#### （3）外部連携

SGH事業を通して、地域の大学や諸機関等、また全国のSGH指定校とのネットワークを構築することができた。発表の機会やイベントに声をかけていただくことも増え、生徒の成長の機会となっている。これらのネットワークは学校の財産であり、引き続き探究学習や授業研究に活かしていく。さらに、県外の高校や教育委員会とインターネットを活用した教育連携も計画中である。

#### （4）その他

生徒のグローバルな意識の高まりは、学習や進路にも影響を与えている。海外進学志望者も増加傾向であり、海外進学セミナーの定期開催などを通じてサポートしていく。また、留学生も積極的に受け入れていく方針である。令和2年度は、アジア架け橋プロジェクトを含め、長期留学生3名と、短期留学生5～6名を受け入れる予定である。異なるバックグラウンドや異文化をもった生徒と触れ合うことは、生徒にとって日常的なグローバルな体験であると捉えている。また、中高一貫教育校として、探究的な取組をさらに発展させることができると考えている。中3の学校設定科目「クリエイティブサイエンス」では理数系の課題研究を行っており、高校との連携はさらに深めていきたい。

## スーパークリエイティブスクール事業 5年間の研究開発を終えて

探究部統括主任・SGH事業主担当 教諭 關 友 明

本校SGH事業は、3つの柱から構成されている。生徒の課題研究と、教員の授業研究の2つの研究。そして地域の大学や諸機関との連携である。本校SGH事業は、今年度で指定最終年度となるが、これまで多くの方々に支えていただいて、ここまでやってくることができた。SGUである国際教養大学、秋田大学、そして秋田県立大学の先生方には、講座や各研究の指導など、本当にさまざまな点で、ご支援、ご協力をいただいた。ジエトロ秋田、秋田経済研究所には、事業初期より助言いただきなど本校SGH事業の基盤を作っていただいた。ソフトアドバンス株式会社代表取締役の菅原亘様には、プレゼンテーション指導において多大なご尽力をいたしている。ここに挙げた以外にもたくさんの方々のご支援をいたしており、紙面を借りて感謝申し上げたい。

2月6~7日、秋田県総合教育センターにて、令和元年度秋田県教育研究発表会が開催された。2日目、関西学院大学関西学院大学学長特命・高大接続センター副長・教授の佐藤真先生(中央教育審議会「児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ」委員)の講演の中で、本校SGHの取組が紹介された。全国各地から集まった各校種の先生方を前に、全国スーパークリエイティブスクール課題研究発表会2017「SGH甲子園」において、本校2年生のグループが英語口頭発表部門で最優秀賞を受賞した時の発表映像を、「現在の教育が目指すべき理想的な姿」として紹介してくださったのである。本校SGH事業に取り組んだ生徒、そして生徒とともに作り上げてきた本校SGH事業の取組に対する賛辞に、胸が熱くなる思いであった。

5年間を振り返ると、試行錯誤と挑戦の連続であった。その中で、生徒たちは素晴らしい成長を見せた。文化会館大ホールでの英語発表、秋田市役所に出向いての意見交換、SGH甲子園やグローバル・リンク・シンガポールでの活躍…。研究や発表が思うようにいかず、時に目に涙を浮かべながらも、生徒たちは全力で、やったことのないSGHの取組にひたむきに取り組んでくれた。そして楽しんでくれた。

活動に取り組む生徒たちは、キラキラと輝いて見えた。あっという間に、我々の想定を飛び越えて、全国や世界の舞台に飛び出していった。生徒たち自身も、自らの成長に自信を深めていたと思う。やがて後輩たちも彼らに続いた。先輩たちを超えると一生懸命だった。目の前で生徒が変わっていく経験に、携わっていた教員も刺激を受けた。「この子たちは、どこまでも伸びるんだ」と感じた。少しずつ、教員の意識も変わっていたと思う。新しいスタイルの授業が徐々に広がっていった。やがて、入学してくる中学生の意識も変わった。「SGHがやりたくて南高に来たんです！」という言葉を何度も聞いた。SGHを経験した卒業生たちは、大学に通いながら、そんな後輩たちのために動いてくれている。大きさではなく、学校が変わったと思う。

もちろんいいことばかりではない。まだまだ課題は多い。SGHの5年間を「嵐のよう」と評した教員がいた。この後の学校が「嵐の過ぎ去った後」になってはいけない。このSGHの成果を、持続可能な取組にしていくことが、本校の次の挑戦である。

最後に、このような機会を与えてくださった文部科学省と、管理機関としてバックアップしてくださいました秋田県教育委員会、ご指導くださいました運営指導委員や連携諸機関の方々、応援してくださっている保護者の皆様、そして、事業立ち上げから中心となって尽力していただいた腰山潤先生をはじめとする本校教職員の方々と、全力でSGH事業に取り組んでくれた生徒と卒業生の皆さんに、心から感謝申し上げる次第である。

## 編 集 後 記

平成から令和に改元され、新しい時代の到来という見方をしてしまうせいかもしれませんのが、今年度はさまざまなところで時代の変わり目というか画期的というか、そのようなことを感じる事柄が多かったような気がします。

本校では、中等部一期生が高校へと進みました。また、SGH指定の最終年度ということで、昨年度のカンファレンスのような大きな行事はなかったものの、その集大成が図られました。2年生の国際探究Ⅱのグループが、今年度のWWL・SGH×探究甲子園において、書類審査を通過して探究成果プレゼンテーションの出場校に選ばれたことは、大きな成果と言えるでしょう。5年間のSGHの活動で培った経験やノウハウを、次年度以降の「総合的な探究の時間」にしっかりと引き継いでいかなければならぬと考えます。

今年度をもって、31年続いた大学入試センター試験が終了しました。最後の受験生となった3年生は、例年とはまた違った類いのプレッシャーを感じながらの受験だったことでしょう。ただ、そんな中でも、大部分の生徒が最善を尽くせたのではないかと感じています。

大学入試センター試験は、来年度から「大学入学共通テスト」へと模様替えとなります。その施行については未だ混沌としているという感は否めず、全国の高校生や学校関係者等に大きな不安や戸惑いを与えています。今回の改革の目玉とされた、英語の民間試験の活用や、国語や数学での記述式の導入が見送られたことは皆さんご存じの通りです。

本研修収録には、昨年度から、大学入学共通テストを見据えた定期考查の作問を載せていましたが、この見送りで多少肩透かしを食らった教科・科目もあったようです。ただ、「思考力・判断力・表現力」の重視という共通テストの基本的な方向性はそのままのようであり、定期考查の作問や普段の授業も、これまでの先生方の取り組み通り、このことを意識した形で継続していくかなければなりません。

新学習指導要領が、中学校では令和3年度から全面実施、高校では令和4年度から年次進行で導入されることになります。特に高校においては教科・科目の再編成が行われるなど、大きな改訂となりました。すでに新学習指導要領を見据えた授業の改善・再構築を図られている先生もいらっしゃると思いますが、本研修収録が少しでもこれから授業改善・授業再構築の役に立てるのなら幸いです。

最後になりますが、本研修収録に寄稿していただいた先生方に感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

令和2年3月 探究部教育研究班 佐藤寿志 記

令和元年度 研修集録 46

発行日 令和2年3月24日

発行者 秋田県立秋田南高等学校  
秋田県立秋田南高等学校中等部

〒010-1437 秋田市仁井田緑町4番1号

TEL 018-833-7431

FAX 018-833-7432